對校源氏物語新釋 巻十五

310
138

310-138
1 × 1

外箱あり

始

吉沢義則著

對校源氏物語新釋　巻十五

310
138

凡例

一本書は湖月抄本を底本とし、尾張德川家所藏の河內本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一底本及び河內本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩樣に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の俤をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一對校の記號としては黑點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河內本で、黑點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

いろ〳〵の紙なるふみどもを・(中略)・引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ〳〵の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが河内本では

いろ〳〵のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お・ぼし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのである。

一　句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來の句讀を改めた箇所が尠くない。

一　湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した例へば本書に

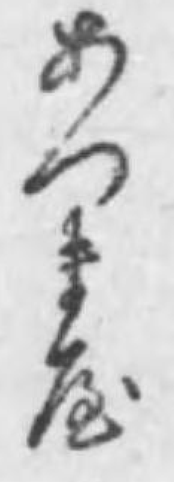
あなくるし　　むつまじう

とあるが如きは、もと底本に「あなくるし」「むつまじう」などとあつたのを、河内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一　註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものがないではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一　附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、啻に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著者識



第十五巻所収目次

東屋	一
浮舟	七九

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞きかろがるしう傍痛かるべき程なれば、思し憚りて、（薫が浮舟へ）御消息をだにえ傳へさせ給はず。かの（弁尼）尼君のもとよりぞ、（浮舟の母の所へ薫の御しやつた話などを度々匂はしてよこしたのだが）母北の方に宣ひしさまなど、度々ほのめかしおこせけれど、（母北方は薫が眞面目に御心に懸けてゐられる事とも思はないから）まめやかに御心とまるべき事とも思はねば、只さまでも尋ね知り給ふらむ事とばかりをかしう思ひて、（薫の）人（人柄が此の世に又とありさうもないやうに思はれるにつけても）の御程の、只今世にありがたげなるをも、（自分の方が相當の身分ならば嬉しいがなど）數ならましかばなど（と）ぞ、よろづに思ひける。

（かみ）守の子どもは、（先妻腹）母なくなりにけるなどあまた、（中將君の腹即ち浮舟の異父兄弟と）この腹にも、姫君と（稱して）つけてかしづくあり。まだをさなきなど、（次々に）すぎすぎに五六人ありければ、さまざまにこの扱ひをしつつ、（ことびと）他人と思ひ隔てたる心のありければ、（中將君が）常にいとつらきものに守をも恨みつつ、（浮舟を他の娘達よりよい緣につけて見せたいものだと）いかで、引きすぐれておもだたしき程にしなしても見えにしがなと、（中將君が浮舟を）あけくれこの母君は思ひあつかひける。（浮舟の容姿が十人並で介の實子達）さまかたちの、

筑波山を 薫は浮舟を手に入れたい氣持はありながらも、人も[illegible]間に熱中するのも、人も[illegible]々しい輕擧と思ふだらうし、また自分の身分が違ふので人前氣恥かしく思はれる程度の相手であるわけで。新古今集一戀之二讀人知らず「筑波山端山繁山茂けれど思ひ入るにはさはらざりけり」浮舟が常陸介の繼娘であるからこの歌を引いたのである。薫廿六、浮舟廿一。

思し憚りて 浮舟は八宮の御女とはいへ、介は受領風情の繼娘であるから、その相手になる事を斷念されるのである。

母北の方 中將の君。

只さまでも 能くそこまでも探し出さうといふ熱を持つて下されることよと、たゞそれだけの興味を感じて。

守の子どもは 常陸介の子供。常陸や上野は親王の任國で實務は介が取るから、介を俗に守といふ。

- 八宮 ― 浮舟
- 中將君
- 常陸介 ― 女、左近少將の妻、女
- 先妻 ― 藏人式部丞、[illegible]少納言妻、讃岐守妻

この扱ひを 介が先妻腹中將腹の實子の世話ばかりをしてゐて

なのめに取りまぜてもありぬべくば、いとかうしも何かは苦しきまでもて惱ましし、同じごと思はせてもありぬべき世を、物にもまじらず、あはれに忝く生ひ出で給へば、あたらしく心苦しきものに思へり。むすめ多かりと聞きて、なま君だちめく人々も、音なひいふいとあまたありけり。初めの腹の二三人は、皆さまざまにくばりて、大人びさせたり。今はわが姫君を、思ふやうにて見奉らばやと、あけくれまもりて、撫でかしづくこと限りなし。守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、中らひも、物きたなき人ならず、徳いかめしうなどあれば、程々につけては思ひあがりて、家の内もきらきらしく、物清げに住みなし、事好みしたる程よりは、あやしう荒らかに、田舍びたる心ぞつきたりける。若うより、さるあづまの方の、遙かなる世界にうづもれて年經ければにや、聲などほとほとうちゆがみぬべく、物うちいふ、すこしだみたるやうにて、豪家のあ

繼娘の浮舟を他人として疎外してゐる氣持があつたので。

同じごと 人には介の實子同樣に思はせてもよい譯なのだが。河内本では「こと」の「こ」の傍に「一子」と附記してある。

物にもまじらず 浮舟は介の實子とは引離れて本當に勿體ないやうに、美しく成人されるので。

むすめ多かりと 常陸介には娘が大勢あると評判に聞いて。

音なひいふ 懸想文を送る人々が。

わが姫君を 母北の方は、今度こそ自分の浮舟を、思ひ通りの緣へ結付けたいものだと、始終目を離さず世話して、大變に愛撫してゐる。

中らひも 一族の人々も小ぎたない人達ではなく、財産も莫大であつたりなどするので、身分相當に高く構へて。德は富、財產の意。

事好みしたる 風流がつてゐるわりには妙に氣性が荒くて。

さるあづまの あんな開けない東鄙の遠い田舍に長年埋もれて居た爲か、發音など殆ど聞違ひさうな、あぶなかしい口のきゝ方をする。言葉もすこし訛つてゐるやうで。拾遺物名「あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ」

豪家のあたり 權門を怖ろしく面倒なものとして憚り怖ぢ、眞面目に行届いて拔目のない用心深さもある。

たり、怖ろしく煩はしきものに憚りおぢ、すべていとまたく隙間なき心もあり、をかしきさまに、こと笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。なほなほしきあたりともいはず、いきほひに引かされて、よき若人どもつどひ、裝束有樣はえならずととのへつつ、腰折れたる歌合物語・庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想の君だち、「らうらうじくこそあるべけれ。かたちなむいみじかなる」など、をかしき方にいひなして、心を盡しあへるなかに、左近の少將とて、年廿二三ばかりの程にて、心ばせしめやかに、ざえありといふ方は人に許されたれど、きらきらしう今めいてなどはえあらぬにや、通ひし所なども絶えて、いと懇にいひわたりけり。この母君、あまた斯かることいふ人々のなかに、この君は人がらもめやすかなり、心さだまりて、物思ひ知りぬべかめるを、人もあてなりや、これよりまさりて事々しききはの人はた、

をかしきさまに 風流ごと—管絃の道にはうとくて。

いきほひに 受領は財力に富んでゐるから、それに引きつけられて相當の身分の若女房達も集まつて來るのである。

庚申 花鳥餘情「庚申經曰、人腹中有三尸、爲人大害、常庚申之夜、上告天帝、記人品過、絕人生籍云々、庚申夜不寢、則不得天上」許渾詩「年長每勞推甲子、夜寒初共守庚申」庚申の一夜を遊び明かすのであらう。

年廿二三ばかり 河内本は本の儘。

きらきらしう 家が貧しくてきらびやかな派手な生活も出來ない爲か、今迄通つて行つた女とも緣が切れて、今では浮舟に熱心にいひ寄つて來た。

この君は 左近少將は人柄も相當なものだ、志操も堅固で分別もありさうだもの、人物も上品だ。

これよりまさりて と言つて少將以上の立派な身分の人は、いくら何でも自分達風情の所には寄りつくまい。

斯かるあたりを、さはいへど、尋ね寄らじ、と思ひて、この御方に取次ぎて、さるべき折々は、をかしきさまに返りごとなどせさせ奉る。心一つに思ひまうけて、守こそおろかに思ひなすとも、我は命をも譲りて、かしづきてむ、さまかたちのめでたきを見つきなば、さりとも、おろかになどはよも思ふ人あらじ、と思ひ立ちて、八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、さま殊にやうをかしう、蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをば、この御方に取隠して、劣りのを、「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず、そこはかとなき物どもの、人の調度といふ限りは、ただ取り集めて並べすゑつつ、目をはつかにさしいづるばかりにて、こと琵琶の師とて、内教坊のわたりより迎へ取りつつ習はす。手一つ弾き取れば、師を立ち居をがみて喜び、禄を取らすること、うづむばかりにもて騒ぐ。はやりかなる曲のも

守こそ　介こそ浮舟を疎略にしようとも。

さりとも　いくら何でもよもや浮舟を粗末にする人はあるまい。

思ひ立ちて　浮舟を少將にめあはす事を決心して。

はかなき遊び物を　一寸した玩具を造らせるにしても、平凡なのとは違つて恰好も面白く。

こまやかなる　蒔絵や螺鈿のやうな、他の物よりも一層精巧な趣向を凝らしてある調度品をば浮舟の爲にと隱しておいて。

そこはかとなき　とりとめもないがらくたで調度と名のつくものは、落選ばず何でも集めて陳列して、やつと目で外が覗かれる位に山と積んでおいて。

内教坊　宮中にあつて舞姫をおき女樂踏歌等を調習する所。

手一つ　一曲習ひあげると。

はやりかなる　調子の輕く早い曲などを敎へて。

のなど教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾きあはせて遊ぶ時は、涙もつつまず、をこがましきまで、さすがに物めでしたり。斯かる事どもを、母君はすこし物の故知りて、いと見苦しと思へば、殊にあへしらはぬを、「あこをば思ひおとし給へり」と、常に怨みけり。

斯くてかの少將、契りし程を待ちつけで、「同じくは疾く」と責めければ、わが心一つにかう思ひ急ぐも、いとつつましう、人の心の知りがたさを思ひて、初めより傳へそめける人の来たるに、近う呼び寄せて語らふ。「よろづ多く思ひ憚ることのあるを、月頃かう宣ひて程の經ぬるを、なみ〳〵の人にも物し給はねば、かたじけなう心苦しうて、かう思ひ立ちにたるを、親など物し給はぬ人なれば、心一つなるやうにて、傍痛う、うちあはぬさまに見え奉る事もやと、かねてなむ思ふ。若き人々あまた侍れど、思ふ人具したるは、おのづからと思ひ譲られ

さすがに　無風流ものながら。

殊にあへしらはぬ　格別相手にしないので。

あこをば　私の娘達を浮舟よりも輕く見てゐられる。

わが心一つに　自分の一料簡でこんなに急ぐのも甚だ氣の引ける事だし第一少將の氣持が知りがたいといふ事を斟酌して。

よろづ多く　浮舟の事については、"私も萬事氣がねが多いのですが、常陸介が世話してくれないので、母北方一人で氣を揉んでゐるのであるから。

月頃かう　今迄こんなにいひ寄つて來られて大分時日もたつて居りますので。この一句は「かたじけなう心苦しうて」に續く。

親など　浮舟は父親のない子ですので。

傍痛う　句を隔てて「かねてなむ傍痛う思ふ」といふ句法。

若き人々　常陸介の實の娘達。

思ふ人具したるは　世話をしてくれる人（實父や夫）のある娘達は自然安心だと、世話してくれる人にまかせる氣になつて。

て、この君の御事をのみなむ。はかなき世の中を見るにも、うしろめたくいみじきを、物おぼし知りぬべき御心ざまと聞きて、かうよろづのつつましさを忘れぬべかめるに、もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむあるべき」といひけるを、少將の君にまうでて、「しかしかなむ」と申しけるに、氣色あしくなりぬ。「初めより更に守の御むすめにあらずといふ事をなむ聞かざりつる。同じ事なれど、人聞きもけ劣りたる心地して、出で入りせむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで、浮びたる事傳へける」と宣ふに、いとほしくなりて、「くはしくも知り給へず、女どもの知るたよりにて仰言を傳へ始め侍りしに、中にかしづくむすめとのみ聞き侍れば、守のにこそはとこそ思ひ給へつれ。他人の子持給へらむとも問ひ聞き侍らざりつるなり。かたち心もすぐれて物し給ふこと、母上のかなしうし給ひて、おもだたしう高き事をせむと、あが

この君の御事をのみなむ　心配してゐるといふやうな言葉が略されてある。
はかなき世の中　世の無常を觀ずるにつけても。明日知らぬ私の身の上だからの意。
もし思はずなる　結婚後、介の實娘でない事が分つて、少將が案外な仕打でもされたら。
氣色あしく　浮舟を介の繼娘と知つて。
守の御むすめ　常陸介の實娘。
同じ事なれど　浮舟も母北方の娘故要するに同じ事だが、介の實子でないから、その婿とあつては、人が聞いても一段低く思はうと考へられて、諂つてゆくのも具合がわるからう。
ようも案内せで　十分に穿鑿もせずにいゝ加減な事を話したのはけしからぬ。
女どもの　妹が常陸方に奉公してゐる縁故であなたのお手紙の取次を始めたのですが。八頁參照。
他人の子　介に繼娘があるとも聞かなかつたのです。
おもだたしう　立派な人に縁付けて面目を施すやうな事をしようと。

めかしづかると聞き侍りしかば、「いかでかの邊のこと傳へつべからむ人もがな」と宣はせしかば、「さるたより知り給へり」と取り申ししなり。更に浮びたる罪侍るまじきことなり」と、腹あしく言葉多かるものにて申すに、君いとあてやかならぬさまにて、「かやうのあたりにいき通はむ、人のをさをさ許さぬことなれど、今樣のことにて、咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隱してなむあるたぐひもあめるを、同じこととうちうちには思ふとも、よその覺えなむ、へつらひて人いひなすべき。源少納言、讃岐守などの、うけばりたる氣色にて出で入らむに、守にもをさをさ受けられぬさまにてまじらはむなむ、いと人げなかるべき」と宣ふ。この人追從あり、うたてある人の心にて、これをいと口惜しう、こなたかなたにいとほしう思ひければ、「誠に守のむすめと思さば、まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らむかし。中にあたるなむ、姫君とて、守は

いかでかの邊の　ぜひ常陸方の事を取次ぎ得る人がほしいとの仰せでしたので、よい便宜を知つて居りますと申上げた譯なのです。「給ふ」「給へり」の如く。四段の「給ふ」を自卑に用ひた例は十頁四十七頁にもある。
浮びたる罪　少將の「浮びたる事傳へける」といつた詞を受けていふ。
腹あしく　詐は意地わるのおしやべりで。
今樣のことにて　それも今時の風で別段私の越度になる筈もなく。
もてあがめて　娘の親が大事にしてくれるので、それに免じて通つてゆく例も世間にはあるやうだが。
よその覺えなむ　他人の思はくから見れば、私が常陸に諂つての事のやうに取沙汰するだらう。
うけばりたる　自分達こそ實娘の婿だぞと得意な態度で通つて來るその二人の間に伍して、自分が介からも碌に婿扱ひもされぬざまでゐるといふ事は。
この人追從あり　この媒人はおべつか使ひのいやなたちの男で。
こなたかなたに　常陸方に對し又少將方に對し。
誠に守のむすめと　あなたが本氣で介の實子をとのお望みならば。
中にあたる　三人娘の第二女。（一頁系圖參照）

中將君
　├ 女
　├ 女（左近少將妻）
　└ 女
常陸介
　├ 藏人式部丞
　├ 源少納言妻
　└ 讃岐守妻

先妻

かのかんのぬし　あの介殿は、人柄も貫目があつて分別のある御仁故。

もはら顔かたちの　自分には器量望みなど一つもない。身分の高い美しい女をとの希望ならば、わけなく手に入れられるだらう。

物清くもなく　綺麗な生活も出來ず。

守に斯くなむと　介に私の氣持を告げて、介が同心ならば、私には何の異存があらう。

さもと許す　貴娘を與へてもよいとのお考へならば。

何かはさも　「何かはさもせざらむ」の意。

このわたりに　その男は當方に時々出入りするとは噂に聞いてゐるが、まだ會はうとした事もないのに、何をいひに來たのだらう。

いとかなしうし給ふなる」と聞ゆ。少將「いざや、初めよりしかいひ寄れる事をおきて、又いはむこそうたてあれ。されどわが本意は、かのかんのぬしの、人がらももの〳〵しく・大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひ始めし事なり。もはら顔かたちのすぐれたらむ女の願ひもなし。品あてに艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど淋しう事うちあはぬ、みやび好める人のはて〳〵は、物清くもなく、人にも人とも覺え・たらぬを見れば、すこし人に謗らるるとも、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり。守に斯くなむと語らひて、さもと許す氣色あらば、何かはさも」と宣ふ。この人は、妹のこの西の御方にあるたよりに、斯かる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬものなりけり。ただいきに守の居たりける前にいきて、「取り申すべきことありてなむ」と言はす。守、「このわたりに時々出で入りは

逢ひたり　介が男に。

語らひがたげなる　一寸いひだしにくさうな顔付をして。介のふてつらうを讃んで。

此月頃うちの御方に　此頃中御内儀様に少將様から、御浮舟を望んで來られたところ、御承諾があつて、今月中に婚禮とのお約束がありましたので、日取を見計らつて早々にとの御計畫中。

君だちの　さうした御嬢の所へ公達が通つて來るといふ事は、常陸に取入らうとするものゝやうに世間で取沙汰する事だらう。

ただ私の君の如く　娘の親が婿を内々の主君のやうに大事にかけて、手に載せるやうにして後押をする、その點を取柄にしてさうした事をなさる公達がおありなやうだもの。

さすがにその願ひは　「諂ひたるやうならむ」とはいふものの、さすがに是非大事にしてもらひたいと望んでゐられて、しかも疎に婿扱ひもされず、相婿よりも輕んぜられるといふ事は具合のわるい事だといふ趣を。

びんなかりぬべきよし　前の「ある人の申しけるやう」の結びとしては調はぬ文脈である。

すと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何事いひにか・あらむ」と、なま荒々しき氣色なれど、「左近の少將殿の御消息にてなむさぶらふ」といはせたれば、逢ひたり。語らひがたげなる顔して、近う居寄りて、「此月頃うちの御方に、消息聞えさせ給ふを、御ゆるしありて、この月の程にと契り聞えさせ給ふむ侍るを、月をはからひ・いつしかと思ほす程に、ある人の申しけるやう、「誠に北の方の御腹に物し給へど、かんの殿の御むすめにはおはせず。君達のおはし通はむに、世の聞えなむへつらひたるやうならむ。ずりやうの御婿になり給ふ斯樣の君たちは、ただ私の君の如く思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごと思ひ扱ひ後見奉るにかかりてなむ、さる振舞し給ふ人々物し給ふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさ受けられ給はで、け劣りておはし通はむこと、びんなかるべき』よしをなむ、せちに謗り申す人々あまた侍るなれば、

初めより　自分はもと〳〵、常陸は裕福で人の後援者たるべき十分の資格があるといふ聲望、その點を見こんで婿にならうと申込んだ譯なのだ。繼娘があらうとは更々知らなかつたので。この下に「十分詮索もせずに申込んだのだ」の意の省文がある。

もとの御志の　前後の續きから河内守に從ふべきである。常陸にはまだ幼い實娘も大勢おありになるのだから、私の素志通り私の希望を容れてくれるならば大變嬉しい。

誠に同じことに　浮舟は實子同様に世話すべき筈の人ですが。

これを他人と　浮舟を他人扱ひして別け隔てをする、とすねたやうな口をきゝまして、浮舟の事には一切私に口出しをさせないのですから。

ほのかに「聞き侍り」を修飾する。

なにがしを　御者に見込があつての御所存とは知りませんでした。

いと嬉しく　自分を見込んでとは大變嬉しく存じます。

いとらうたしと思ふ　七頁に媒が「中にあたるなむ姫君とて云々」と語つた姫で二〇頁に「年十五六の程にて云々」とある。

只今思し煩ひてなむ、「初めより、ただ・・・・きら〳〵しう、人の後見と頼み聞えむに、たへ給ふべき御覺えをえらび申して、聞え始め申ししなり。更に他人物し給はむといふことを知らざりければ。もとの御志のまゝに、まだをさなきもあまたおはすなるを、ゆるい給はばいと嬉しくなむ」と仰せられつれば」といふに、守「更に、斯かる御消息侍るよし、くはしく承らず。誠に同じことに思ひ給ふべき人なれど、よからぬ童べあまた侍りて、はか〴〵しからぬ身に、さま〴〵思ひ給へあつかふ程に、母なるものも「これを他人と思ひ分けたること」と、くねりいふ事侍りて、ともかくも口入れさせぬ人のことに侍れば、ほのかに、しかなむ仰せらるる事侍るとは聞き侍りしかど、なにがしを取りどころに思しける御心は知り侍らざりけり。さるは、いと嬉しく思ひ給へらるる御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふ女童侍り。あまたのなかに、これ

なか〳〵胸痛き　なまなかの縁組をして却つて苦勞する事があつてはの懸念から。

いかでうしろやすくも　ぜひとも今のうちに立派な縁につけて安心したいものだと始終苦にやんでゐる矢先。この句はずつと後の「仰せのごと奉らむは、易きことなれど」に續く文脈で、中間に、斯様に苦にやんでゐる矢先少將殿から有難い申出があつて嬉しいといふ意味の挿入句である。

いときやうざくに　少將殿は大層すぐれた人物ゆゑ氣に入つてお仕へ申したいとは思つたが。

月頃の御心　今迄のお考へを私が翻へさせたやうに妻が思はうかと、それを斟酌して居ります。

何かと思し憚る　何かの斟酌は御無用です。

ただ一所の　北方は問ふ所でない。

いはけなく　たとひ娘はまだ幼少で未熟であつても、實父の介が、鄭重にして下さる事を自分は滿足に思ふ。

をなむ命にも換へむと思ひ侍る。宜ふ人々あれど、今の世の人の御心、定めなく聞え侍るに、なか〳〵胸痛き目をや見むの憚りに、思ひ定むることもなくてなむ。いかでうしろやすくも見給へおかむと、明暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも、若くより參り仕うまつりき、家の子にて見奉りしに、いときやうざくに、仕うまつらまほしと、心つきて思ひ聞えしかど、遙なる所に、うち續きて過ぐし侍る年頃の程に、うひ〳〵しく覺え侍りてなむ參りも仕うまつらぬを、斯かる御志の侍りけるを、返す〴〵・・・・・かしこまりながら、仰せのごと奉らむは易きことなれど、月頃の御心たがへたるやうに、この人思ひ給へむことをなむ、思ひ給へ憚り侍る」と、いとこまやかにいふ。よろしげなめりと嬉しく思ふ。「何かと思し憚るべきにも侍らず。かの御志は、ただ一所の御ゆるし侍らむを願ひ思して、「いはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の

もはらさやうの　父親の知らない縁組と結婚するといふやうな、あんな守に近寄らうが婿になるやうな行爲はすべきものでない。

若き君だちとて　若い貴公子はよくありがちな事だが、少将はそれと違つて。

すき〴〵しくあてびても（細）實めなる人と也（花）あてびはあてやかなりといふ心也（眠）あてびてもおはしまさず實なる人とほめたり（孟同）と湖月抄にあるが、「あてび」は上品ぶると釋くべきものとおもふ。上品ぶつて女をおもちやにするやうなところはおありなさいませぬ。

まだ頭の　まだ現在の財産といふものはないやうですが、少将の日比の生活振りは、平民の底なし財産と世渡りについて勝りますが、それ以上の威勢です。

の　「一」は「此頃の」の意。文頁參照。

頭　藏人頭。

ことて　「ことたて」である。取りたて給ふの義。

朝臣　對稱人代名詞。

はやさるべき　湖月抄本はこの「はや」を「定めざなるは、や」とにつけて讀んでゐるがそれは誤。

親の、やんごとなく思ひおきて給へらむをこそ、本意かなふ事にはせめ。もはら、さやうのほとりばみたらむ振舞すべきにもあらず」となむ宣ひつる。人がらはいとやんごとなく、覺え心にくくおはする君なりけり。若き君だちとて、すき〴〵しくあてびてもおはしまさず、世の有様もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。まだ頭の御徳なきやうなれど、おのづからやむごとなき人の御けはひのありけるやうに、直人の限りなき富といふめる勢にはまさり給へり。來年四位になり給ひなむ。こたびの頭は疑ひなく、御門の御口づからことだて給へるなり。「よろづの事足らひてめやすき朝臣の、妻をなむ定めざなる。はやさるべき人選りて後見を設けよ。上達部には我しあれば、今日明日といふばかりになしあげてむ」とこそ仰せらるなれ。何事も、ただこの君ぞ御門にも親しく仕うまつり給ふなる。御心はたいみじう警策に、おも〳〵しくなむおはしますめる。

あたら人の御婿を　少将はあつたら立派な婿君ですもの、折角かう申込まれた機會に、御決心なさるがよからう。

ここにしぶ〳〵なる　あなたが澁つてゐるやうな樣子をなさると、少将は他へ氣がお移りにもなりませう。これは全く安心の出來る御話を申上げるのです。

此頃の御徳などの　現在の財産が不十分だといふやうな事は仰しやつて下さるな。

心もとなく何を　何を氣づかはしく不滿足の事と思召さうぞ。

たとひあへずして　たとひ私が中途で死んで奉公をしさしても。

又取り爭ふべき　この娘の外に所有を爭ふ者は外に誰もありませぬ。

大臣の位を　少将が大臣の位を得ようと望んでその勝身料として世に無類の寶物を調進しようとなさる場合には、私の所に無いものはありますまい。

御後見は　後援の段は私が氣遣なく引受けませう。

あたら、人の御婿を、かう聞え給ふ程に、思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、我も〳〵婿にとり奉らむと所々にはべるなれば、ここにしぶ〳〵なる御けはひあらば、ほかざまにも思しなりなむ。これただうしろやすき事を取り申すなり」と、いと多く、よげに、いひ續くるに、いとあさましく鄙びたる守にて、うちゑみつつ聞き居たり。「此頃の御徳などの、心もとなからむことは、な宣ひそ。なにがし命侍らむ程は、いただきにも捧げ奉りてむ。心もとなく何を飽かぬとか思すべき。たとひ、あへずして、仕うまつりさしつとも、殘りの寶もの、領じ侍る所、一つにても又取り爭ふべき人なし。子ども多く侍れど、これはさま殊に思ひそめたるものに侍り。ただ眞心に思し顧みさせ給はば、大臣の位を求めむと思し願ひて、世になき寶ものを盡さむとし給はむに、無き物侍るまじ。當時の御門しか惠み申し給ふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これかの御爲に

さいはひとあるべき　これが結局兩人の仕合となる事かと思ひますがそこは請合はれませぬが。

寄りつかで　この下に「少將方に參りぬ」などの文が省略されてゐる。

すこしひなびてぞ　「いとあさましく鄙びたる守にて」と前頁にあつた。

大臣にならむ贖勞　介が「大臣の位を求めむと思し願ひて云々」といつた事をいふ。

贖勞を取らむ　贖勞料を引受けよう。贖勞とは財物を官に納めて官位を請ふ事で、茲では贖勞料の意味に用ひてゐる。

志殊に　北の方がこの緣談には初めての事であるし、特別張切つてゐられるだらうに、違約したならば、筋道にはづれた非行のやうに解釋する人もあらう。さあどうしたものだらう。

ただ中のこのかみにて　浮舟は大勢の姫達の中の年長者で。「ただ」は句を隔てて「申されけるなり」にかゝる。

そなたにと　あなたのお申込を浮舟の方に振向けて返事されたまでに過ぎないのです。

月頃は　妹の今までの口ぶりでは。

も、なにがしが女のわらはの爲にも、さいはひとあるべき事にやとも知らず」と、よろしげにいふ時に、いと嬉しくなりて、妹にも、「斯かる事あり」とも語らず、あなたにも寄りつかで。守のいひつる事を、いとも／＼よげにめでたしと思ひて聞ゆれば、君、すこしひなびてぞあるとは聞き給へど、憎からず、うちゑみて聞き居給へり。大臣にならむ贖勞を取らむなどぞ、あまりおどろ／＼しき事と、耳とゞまりける。「さてかの北の方には斯くと物しつや。志殊に思ひはじめ給ふらむに、引きたがへたらむ、ひが／＼しくねぢけたるやうに取りなす人もあらむ。いざや」と思したゆたひたるを、「何か。北の方も、かの姫君をば、いとやんごとなきものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。ただ中のこのかみにて、年も大人び給ふを、心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて、申されけるなり」と聞ゆ。月頃は、又なく世の常ならずかしづくといひつるもの

ながらへて　次の「いとまたく賢き君にて」の句をこの上に移して解くと「少將は實に如才ないかしこいお方故、百年保全の道を講ずるのが得策だと悟つたので。

北の方は　浮舟の母はこの事を知らないから、少將を迎へる準備をするのである。

少將などいふ　少將などいふ低い身分の人に緣づけるのも惜しく、あつたらものと思はれる程の美しさであるので。

大將殿の　薫殿のお申込みの通りに、よしそれが分不相應な緣組であるにしても、何で應じないがあらう。

ほかの音聞きは　世間では常陸の實子やらどうやら知らない。どうせ實子と思つてゐる筈はないの意。

又實を尋ね知らむ　浮舟は八宮の姫君で高貴の血筋だといふ實情を知つてゐる人も、父宮から認められなかつたといふ理由で卻つて輕蔑されさうなのが悲しい。

いかがはせむ　少將ではちと不十分だが。

の、うちつけに斯くいふもいかならむ、と思へども、なほ一わたりはつらしと思はれ、人にはすこし譏らるとも、ながらへて頼もしき事をこそと、いとまたく賢き君にて、思ひ取りてければ、日をだに取りかへで、契りし暮にぞおはし始めける。

北の方は人知れず急ぎ立ちて、人々の裝束せさせ、しつらひなど、よし／＼しうし給ふ。御方をも、頭洗はせ、取りつくろひて見るに、少將などいふ程の人に見せむも、惜しくあたらしきさまを、あはれや、親に知られ奉りて生ひ立ち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大將殿の宣ふらむさまに、おほけなくとも、などかは思ひ立たざらまし、されど、うち／＼にこそ斯く思へ、ほかの音聞きは、守の子とも思ひ分かず、又實を尋ね知らむ人も、なか／＼おとしめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひ續く。いかがはせむ、さかり過ぎ給はむもあいなし、賤しからずめやすき程の人の、斯く懇に宣ふめるを、など心一つ

女はまして　男の常識でさへまるめこまれたのだもの、淺はかな女はまして。
明日明後日　結婚の日が。
そそめき　そそくさ騒いでゐると。
あこの御懸想人を　[illegible]
めでたからむ　[illegible]
賤しく異樣ならむ　[illegible]
怪しくあぶなく　[illegible]

に思ひ定むるも、媒の斯く言よくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。明日明後日と思へば、心あわただしくいそがしきに、こなたにも心のどかにゐられたらず、そそめきありくに、守外より入り來て、ながながと、滞るところもなくいひつづけて、「我を思ひ隔てて、あこの御懸想人をうばはむとし給ひけるが、おほけなく心をさなき事。めでたからむ御むすめをば、要ぜさせ給ふ君だちあらじ。賤しく異樣ならむなにがしらが女子をこそ、いやしうも尋ね宣ふめれ。かしく思ひくはだてられけれど、もはら本意なしとて、ほかざまへ思ひなり給ひぬべかなれば、同じくはと思ひてなむ、『さらば御心、』と許し申しつる」など、怪しくあぶなく、人の思はむところも知らぬ人にて、いひ散らし居たり。北の方、あきれて物もいはれで、とばかり思ふに、世の中の心憂さをかきつらね、涙も落ちぬばかり思ひつづけられて、やをら立ちぬ。

さりとも人には　いくら何でも　[illegible]
親なしと　[illegible]
守の斯く　[illegible]
あさましく云々　少將も守も何れも　[illegible]
あたら御さまをも　勿體ないやうな浮舟のお人柄が分らないのでせう。

こなたにわたりて見るに、いとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。乳母と二人、「心憂きものは人の心なりけり。おのれは同じごと思ひあつかふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには、命をも譲りつべくこそ思へ。親なしと聞きあなづりて、まだをさなくなりあはぬ人を、さし越えて、斯くはいひなるべしや。かく心憂く近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、守の斯くおもだたしき事に思ひて、受取り騒ぐめれば、あいあひにたる世の人の有樣を、すべて斯かることに口入れじと思ふ。いかでここならぬ所に、暫しありにしがな」と、うち嘆きつついふ。乳母もいと腹立たしく、わが君を斯くおとしむる事と思ふに、「何か。これも御さいはひにて違ふ事とも知らず。斯く心口惜しくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば、心ばせあり物思ひ知りたらむ人にこそ見

あはれにはた　それに、浮舟を熱心に所望されるのです。御宿縁にまかせて薫に嫁づけるやうに御思案遊ばせ。

おぼろげならむ　並大抵の女はめとらぬ。

左のおほ殿　夕霧。河内本は右大臣の「右」の右傍に「左」と記してある。

いかばかりの　どんな女を真面目に妻として愛されようぞ。薫が真面目に妻として愛してくれる女はまづなからうの意。

それはたげに　成程女三宮の御殿も結構な所には違ひありませんが、といつて、さうした蔭の女ではたまらない事です。

物思はしげに　六君の事などで苦労してゐられるらしい様子をよく見ますと、身分などはどうでもよいから、側目も振らずに一人を守りつてくれる男が、世間體も良し、力強い事でせう。

せ奉らまほしけれ。大将殿の御さまかたちの、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地（の）し侍りしかな。あはれにはた聞え給ふなり。御宿世にまかせて、さもおぼし寄りねかし」といへば、「あな怖ろしや。人のいふを聞けば、年頃、「おぼろげならむ人をば見じ」と宣ひて、左のおほ殿、按察の大納言、式部卿の宮などの、いと懇にほのめかし給ひけれど、聞き過ぐして、御門の御かしづきむすめを得給へる君は、いかばかりの人をか、まめやかには思さむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなむ。それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮のうへの、かくさいはひ人と世に申すなれど、物思はしげに思したるを見れば、いかにもいかにも、二心なからむ人のみこそ、めやすく頼もしきことにはあらめ。わが身にても知りにき、故宮の御ありさまは、いとなさけなさけしく、めでたくをかしくおはせしかど、人かずにも思

このいといふかひなく　今の夫常陸は御話にもならぬ、情味のない、ざまのわるい人ですが、一本気な二心のない人である事を知つて居るので、安心で今迄連れ添つて來たのです。

折節の心ばへの　何の折の心構へが。

かたみに云々　夫婦の者の数まらない場合には、お互に口喧嘩をしてでも気を晴らしたものです。

上達部親王たち　公卿や親王達といつた風な優雅な奥ゆかしい方につれ添ふにしても、自分がつまらぬ身分では連れ添ひがひもあるまい。

よろづの事わが身から　萬事が自分の身分次第によるものだと思ふと、浮舟を氣の毒には思ひながら、こちらの身分が身分故、浮舟を萬事につけて可愛さうに思つて居ます。

女房など　以下北方にいふ詞。

やがて帳なども　この部屋は、御婿様の新調のものだ、早急な事になつたやうだから、此處は此儘で、調度類を、あちらに移したり、いろ〳〵模様がへはすまい。

めやすきさまに　母北方が、體裁よく清潔に、さつぱりとこしらへて、十分にしてある室内であるのに、餘計な事に屛風を持つて來て、陶しい程澤山立て並べ。

さざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいといふかひなく、なさけなくさまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年頃をも過ぐしつるなり。折節の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ。歎かしく恨めしきこともなく、かたみにうちいさかひても、心にあはぬ事をばあきらめつ。上達部親王たちにて、みやびかに心恥かしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ。よろづの事わが身からなりけりと思へば、よろづに悲しくこそ見奉れど、いかにして、人笑へならずしたて奉らむ」と語らふ。守は急ぎ立ちて、「女房など、こなたにめやすきあまたあるを、この程はあらせ給へ。やがて、帳なども新しくしたてられためる方を、事俄かになりにためれば、取りわたし、とかく欲むまじ」とて、この西の方に来て、立ち居とかくしつらひさわぐ。めやすきさまにさはらかに、あたりあたりあるべき限りしたる

厨子　扉のある物。二段の棚。

人の御心は　北方に[illegible]あなたの母はすつかり分つた。

ただ同じ子なれば　私の實娘だつて、やはりあなたの子なのだから、いくら何でも[illegible]たらかされる事がなからうと思つて[illegible]さればかういふ水臭い仕打を[illegible]

何か人の異ざまに　なに、北方が浮舟の婿にと推薦された人を何も横取りするでもあるまいとは思ふが、何分人柄が優れていて、又と得がたいあつたらお方だから。

この程のいかめしく　婚約中の常陸の婿に對する態度が堂々たるもので、[illegible]て望んでゐたに違はないことと、總て整ひもないやうに滿足して、浮舟に約束した夜をも變へずに、その晩から通ひ始めた。

る所を、守まかしらに屏風どもも持て來て、いぶせきまで立て集めて、厨子二階など、怪しきまでし加へて、心をやりて急げば、北の方見苦しく見れど、口入れじといひてしかば、ただに見聞く。御方は北おもてに居たまへり。守、「人の御心は見知り果てぬ。ただ同じ子なれば、さりともいと斯くは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。されば、世に母なき子はなきやはある」とて、むすめを、晝より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、にくげにもあらず。年十五六の程にて、いと小さやかにふくらかなる人の、髪うつくしげにて小袿の程なり。裾いとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひて、撫でつくろふ。「何か、人の異ざまに思ひ構へられける人をしも、と思へど、人がらのあたらしく警策に物し給ふ君なれば、我も我もと婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむも口惜しくてなむ」など、かの仲人に謀られていふもいとをこなり。男君も、この程のいかめし

ひが〱しきやうなれば　[illegible]は母が浮舟ばかりをかはいがるやうに考へてゐるから、浮舟の世話をするのはまちがつた事のやうに見えるのでの意。

その事ども　格別の用事もないのにお手紙をあげては不躾かと遠慮致しまして、平素は差控へて御無沙汰してゐるのですが。

いと忍びて　お邸の内に人目を忍んで居られさうな隠れ場がございましたら誠に嬉しく存じます。

數ならぬ　つまらぬ私一人の庇護には安んじてゐられないで、苦勞ばかりの多い世の中でございますので、お縋り申す先としてはまづあなたを。浮舟を引取つて保護して下さいの意。

又見苦しきさまにて　浮舟が零落して見苦しい有樣でゐるのを知らぬ顔してよそに聞いてゐるのも心苦しからう。

殊なる事なくて　格別の事もなしに姉妹二人が別れ〱になつてゐるのも。

く、思ふやうなることと、よろづの罪あるまじう思ひて、その夜もかへず來そめぬ。母君、御方の乳母、いとあさましく思ふ。ひが〱しきやうなれば、とかく見あつかふも心づきなければ、宮の北の方の御もとに御文奉る。「その事と侍らでは、馴れ〱しくやとかしこまりて、え思ひ給ふるままにも聞えさせぬを、つつしむべき事侍りて、暫し所かへさせむと思ひ給ふるに、いと忍びてさぶらひぬべき隠れの方さぶらはば、いと〱嬉しくなむ。數ならぬ身一つの蔭に隠れもあへず、あはれなる事のみ多く侍る世なれば、頼もしき方にはまづなむ」と、うち泣きつつ書きたる文を、あはれとは見給ひけれど、故宮の、さばかり許し給はでやみにし人を、われ一人殘りて、知り語らはむもいとつつましく、又見苦しきさまにて世にあふれむも、知らずがほにて聞かむこそ心苦しかるべけれ、殊なる事なくて、かたみに散

大輔　中君の侍女。

さるやうこそ　中君にいふ詞。浮舟を八宮の子といふのも、それだけの事情があるのでございませう。無愛相なすげない御返事をなさるな。浮舟のやうな母違ひの卑しい者が立派な御兄弟の中に一人二人あるのは世間にありがちの事です。

かの西の方に　二條院の西の對に隠れ場所を用意しませう。むさくるしい所ですが、それでも御辛抱が出來さうでしたら當分おいで下さい。

なかなか　少將の違約からこんな結果になつた事を却つて嬉しく思つてゐる。常陸守は少將をどれ程鄭重にもてなさうかと思案するに。

東絹　東國產の粗末な絹。として差出したのである。

下衆　少將の供人。

りはむも、なき人の御ためには見苦しかるべきわざを、おぼし煩ふ。」大輔がもとにも、いと心苦しげにいひやりたりければ、大輔「さるやうこそは侍らめ。人憎くはしたなくもな宣はせそ。斯かる劣りの者の、人の御なかにまじり給ふも、世の常の事なり。あ・ま・り・い・と・な・さ・け・な・く・宣・ふ・ま・じ・き・事・な・り」など聞えて、大輔「さらばかの西の方に、隠ろへたる所しいでて。いとむつかしげなめれど、さて過ぐい給ひつべくば、暫しの程」といひつかはしつ。いと嬉しと思ほして、人知れず出で立つ。御方も、かの御あたりをば、睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なかなか、斯かる事どもの出で來たるを、嬉しと思ふ。守、少將のあつかひを、いかばかりめでたき事をせむと思ふに、そのきらきらしかるべき事も知らぬ心には、ただ荒らかなる東絹どもを、おしまろがして、投げ出でつ。食物も所せきまでなむ運びいでてののしりけるを、下衆などは、それをいとかしこきなさけ

君も　少將も大層滿足して、この縁組は思ひつきであつたと喜んで居つた。この縁組の騒ぎをよそに知らぬ顔してゐるのもすねたやうに見えようと拵へて。

客人の御でゐ　これは少將のお部屋だと大げさに設備するので。「でゐ」は出居で、さぶらひは侍所。この御方は浮舟の部屋には少將が住んで居るので、廊などといふ不滿足な所に浮舟を住ませるのも不滿足で氣の毒に思はれて。

この御方ざまに　浮舟の身内に然るべき後見者のないのを見くびつて常陸守がこんな事をするのだらうと北方は思ふので。中君は格別認めては下さるが、強ひて浮舟を差上げる。

西廂の　二條院の西廂の間の北寄りの、人のあまり出入りしない所に浮舟の部屋を設けてある。

年頃斯く遙かなりつれど　年來かうして離れて遠々しかつたがもと／＼八宮に仕へてゐた女房だから、八宮に仕へるべき人でないから御殿に參る折には恥かしがらずにお會ひになる。

われも故北の方には　中將の君は故北方の姪。浮舟の母

に思ひければ、君も、いとあらまほしく、心かしこく取り寄りにけり、と思ひけり。北の方、この程を見捨てて知らざらむも、ひがみたらむ、と思ひ念じて、只するままにまかせて見居たり。客人の御でゐ、さぶらひとしつらひ騒げば、家は廣けれど、源少納言東の對には住む、男子などの多かるに、所もなし。この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとりばみたらむに、住ませ奉らむも飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひめぐらす程、宮にとは思ふなりけり。この御方ざまに數まへ給ふ人のなきを、あなずるなめりと思へば、殊にゆるい給はざりしあたりを、あながちに參らす。乳母若き人々二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり。年頃斯く遙かなりつれど、うとく思すまじき人なれば、參る時は恥ぢ給はず。いとあらまほしく、けはひ殊にて、若君の御あつかひをしておはする御有樣、美しく覺ゆるもあはれなり。われも故北の方には

ここには―二條院では御物忌の由に、浮舟が來たのだといひなしてあるので誰も尋ねて來ない。**こたみは**―今度はあわただしく歸つて行つたのだが。**宮わたり給ふ**―匂宮が二條院に來られるを。**櫻を折りたる**―「花櫻折る」などと同樣容姿の美しい形容。**あたり〳〵の**―それ〴〵擔任の事務を。**わが繼子の**―常陸の先妻腹の。**こよなき**―宮のすばらしい御樣子を拜して。**あはれこは何人ぞ**―何たる御立派な方だらう、どんな方のお側にでもおいでになる中君の御運のよさよ。

離れ奉るべき人かは、宮仕うまつるといひしばかりに、數まへら
れ奉らず、口惜しくて斯く人には侮らるる、と思ふには、
斯くしひてむつび聞ゆるもあいなし。ここには御物忌とい
ひければ、人も通はず、二三日ばかり母君も居たり。こたみ
は、心のどかにこの御有樣を見入る。
宮わたり給ふ。ゆかしくて物のはさまより見れば、いと清らに、
櫻を折りたるさまし給ひて、わが頼もし人に思ひて、うら
めしけれど心にはたがはじと思ふ常陸守より、さまかたちも人
の程もこよなく見ゆる五位四位ども、あひ膝まづきさぶらひ
て、この事かの事と、あたりあたりの事ども、家司どもなど申す。
又若やかなる五位ども、顔も知らぬども多かり。わが繼子の
式部の丞にて藏人なる、内の御使にて參れり。御あたりに
もえ近く參らず。こよなき人の御けはひを、あはれ、こは何
人ぞ、斯かる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時は、

めでたき人々と―いくら結構な御身分の方でも、宮にうち思ひを寄せなくなつては、今迄は宮樣からさうした方々には紙が遠ざかつてゐたのはとんでもない思ひちがひであつた。かやうに見奉りて下さりつつ御對面になるのは、誠に有りがたいわけのものだ。**御かたちども**―御兩人の御容貌は誠に綺麗で似合の御夫婦である。**宮たちと聞ゆれど**―同じ宮樣でも實に格段の相違のものだ。**御臺こなたに**―お膳を中君の部屋に運んで來る。**わがいみじき事**―自分が家では善美を盡してゐる積りでは居るが、平凡な家庭は殘念なものだと感じたので。**かやうにて**―こんな風に宮樣に連れ添はせて見ても見苦しくはあるまい。**ゆだけき勢を**―父の常陸介が富裕を頼んで居るを心ざして居る娘達は、浮舟とは同じくわが腹ではあるが、浮舟とは樣子が段違ひであると思ふにつけても、やはり今後も理想は高く持つべきものだと、一晩中將來の企望を描き續けて居つた。

めでたき人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はばと、物憂くおし
量り聞えさせつらむあさましさよ。この御有樣かたちを見れば、
棚機ばかりにても、かやうに見奉りかよはむは、いといみじか
るべきわざかな、と思ふに、若君いだきてうつくしみおはす。
女君短き几帳を隔てておはするを、押しやりて、物など聞え給
ふ。御かたちどもいと清らに似合ひたり。故宮の淋しくおはせ
し御有樣を思ひくらぶるに、宮たちと聞ゆれど、いとこよなき
わざにこそありけれ、と覺ゆ。几帳のうちに入り給ひぬれば、
若君は、乳母などもてあそび聞ゆ。人々參りあつまれど、
惱ましとて大殿籠り暮しつ。御臺こなたに參る。よろづの事、
け高く心殊に見ゆれば、わがいみじき事を盡すと見思へど、な
ほ〳〵しき人のあたりは口惜しかりけり、と思ひなりぬれば、
わがむすめも、かやうにてさし並べたらむには、かたはならじ
かし、ゆだけき勢をたのみて、父ぬしの、后にもなしてむと思

はた　打解けた姿もいいが、をいつて正装の御姿は。
え見捨て給はで　手放しては出かけかねて。
強飯　今の普通の御飯。
今朝より参りて　今朝御装束例ひに来てお供部屋の方で休息して居つた連中が、宮のお出かけと知つて参り寄つて今迄は遠慮して待つて居つたのだが。
御前にて　宮の御前では一向目につかないのを。
守のむすめを　常陸の實娘を貰つて大事がつて貰ひたい。常陸の
かむけたる女のわらはは　いじけた女を貰つてゐる訳。了くんだ女童。
この御あたりの　二條院の人々はそんな事もしませぬ。又は常陸殿の方から。さうした事をよく御覧きこむついでがあるのです。

ひたる人々は、同じわが子ながら、けはひこまなきを思ふも、なほ今より後も、心は高く使ふべかりけり、と夜一夜おちまじごとに思ひつゞけけり。

宮、日たけて起き給ひて、「后の宮例のなやましくし給へば、参るべし」とて、御装束などし給ひておはす。ゆかしう覚えてのぞけば、うるはしく引きつくろひ給へる、はた似るものなくけ高く愛敬づき清らにて、若君をえ見捨て給はで、もてあそびおはす。御粥強飯などまゐりてぞ、こなたより出で給ふ。今朝より参りてさぶらひの方にやすらひける人々、今ぞまゐりて物など聞ゆるなかに、清げだちてなでふ事なき人のすさまじき顔もたる、直衣着て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、（若き人々）・・・・、女房「かれぞこの常陸守の婿の少將な。初めはこの御方にと定めけるを、守のむすめを得てこそいたはられめ」などいひて、かむけたる女のわらはを得たるななり」。女房「いざ、この御

少將をめやすき　今迄少將を相當な人物と考へて居つた自分の心も残念で。
げに殊なる事云々　成程少將は格別な所もない人であつたやうだ。「げに」は一七頁に乳母が、「斯く心口惜しくいましける君なれば」といつた詞を受ける。
立ちかへり寄りおはしたり　若君愛弄の様を写して、中君の境遇を想はしめ、それを見る北方の心中を描かうとしたものである。
女君の　北方が中君の御前に出て来て、匂宮の事を頻にほめ立てると、中君は北方を田舎めいてゐると思召して御笑になる。
故うへの　故北方が亡くなられた時は、あなたは生れたばかりの赤ちやんで、どうなられる事かと、おそばの人も故宮もお歎きになつたのですが。

あたりの人はかけても言はず。かんの君の方より、よく聞くたよりのあるなり」と、おのがどちいふ。聞くらむとも知らで、人の斯くいふにつけても、胸つぶれて、少將をめやすき程と思ひける心も口惜しく、げに殊なる事なかるべかりけりと思ひて、いとどしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君の這ひいでて、御簾のつまよりのぞき給へるを、うち見給ひて、立ちかへり寄りおはしたり。匂「御心地よろしく見え給はば、やがてまかでなむ。なほ苦しくし給はば、今宵は宿直にぞ。今は一夜を隔つるも覚束なきこそ苦しけれ」とて、暫し慰め遊ばして出で給ひぬる・さまの、かへすがへす見るとも見るとも飽くまじく、匂ひやかにをかしければ、出で給ひぬる名残、さうざうしくぞながめらるる。

女君のお前に出で来て、いみじくめで奉れば、田舎びたると思して、笑ひ給ふ・・。北方「故うへのうせ給ひし程は、いふかひなく

こよなき御宿世の　かうした結構な御宿命があつたからこそ、あんな山里にお育ちになつたのです。

口惜しく故姫君の　殘念にも大君の亡くなられたのが、何ものたりなく思はれます。

世の中の怨めしく　匂宮に六君といふ人があつたりして。

古へ頼み聞えける　昔力にして居つた御親達に死別した事はそれも世間の常と却つて諦めがついて——母君はお顔も存ぜずじまひになつた事だから——居るのですが。「あるを」は「世の常に思ひなされてあるを」と續くのである。

おはしまさましかば　御存命で薫の北方になつてゐられたならば、二宮御降嫁の事も大君の為にお止めにならないでもなかつたでせうに。

くをさなき御程にて、いかにならせ給はむと、見奉る人も故宮
もおぼし歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山ふ
ところのなかにも、生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜
しく、故姫君のおはしまさずなりにたることを、飽かぬことなれ」
など、うち泣きつつ聞ゆ。君もうち泣き給ひて、「世の中の怨
めしく心細き折々も、又かくながらふれば、すこし思ひ慰め
つべき折もあるを、古へ頼み聞えける蔭どもに、おくれ奉りけ
るは、なかなかに世の常に思ひなされて、見奉り知らずなりに
ければ、あるを、なほこの御事は、尽きせずいみじくなむ。
大将殿の、よろづの事に心の移らぬ由を愁へつつ、浅からぬ
御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」と宣へば、
北方「大将殿は、さばかり世にためしなきまで御門のかしづき思し
たなるに、心おごりし給ふらむかし。おはしまさましかば、な
ほこの事せかれもし給はざらましや」など聞ゆ。中君「いさや、

やうのものと　姉君が生きてゐられたならば姉妹共に同様の運命（姫君は二宮に、中君は六君におされて）だと人から笑はれるやうなつらい思ひをすることであつたらう、それも却て見じめであつたであらう。

故宮の御のちの　父宮の後世の事までも十分に氣をつけて親切に世話して居つて下さるやうです。

かの過ぎにし　あの亡くなられた大君の御かはりに探し出して世話したいものだと。

さもやと　薫に差上げようかなどとは畏多くて思ひも寄るべき筋合の事ではございませんが。

一本ゆゑにこそは　それも大君の妹なればこそさうまで仰しやつて頂くのだと、畏多い事ながら、薫の御親切がありがたく身にしみます。古今雜上「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」

命待らむ限りは　私の存命中はなあに、朝夕の慰めぐさですまされる事でせう。併し私の死後は、意外な姿におちぶれたりするのが悲しくて、思案に余つては、いつその事尼にして、深い山の中にでも住まはせて、世捨入として婚姻などいふ世事は断念して居ようかなどとも考へて居ります。

やうのものと、人笑はれなる心地せましも、なかなかにやお
らまし。見果てぬにつけて心にくくもある世にてこそはと思へど、
かの君は、いかなるにかあらむ、怪しきまで物忘れせず、故宮
の御のちの世をさへ、思ひやり深く後見ありき給ふめる」など、
心うつくしう語り給ふ。北方「かの過ぎにし御かはりに尋ねて見む」
と、この数ならぬ人をさへなむ、かの弁の尼君には宣ひける。さ
もやと思ひ給へ寄るべき事には侍らねど、一本ゆゑにこそはと、
忝けれど、あはれになむ思ひ給へらるる御心深さなる」などい
ふついでに、この君をもて煩ふことと、泣く泣く語る。こまかに
はあらねど、人も聞きけりと思ふに、少将の思ひあなづりける
さまなどほのめかして、北方「命侍らむ限りは、何か、朝夕の慰め
ぐさにて見過ぐしつべし。うち捨て侍りなむのちは、思はずな
るさまに散りぼひ侍らむが悲しさに、尼になして、深き山にや
し据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ思

何か　いやなに、浮舟が人から軽蔑されるのも、それは私共のやうに孤児になつた者の常です。

さりとも　いくら固い決心を持つて居ても、隠遁生活で通すといふ事は出来ないわけのものだから、父宮が隠遁生活をさせようとすつかりきめておかれた私でさへ、この通り思ひがけない生活をしてゐる事ですから。前半は一般について、後半は中君自身について、隠遁生活遂行の困難なる事を述べて浮舟出家の事に反対したのである。

常陸殿とは　いかにも國司風情の妻らしく見えた。

故宮のつらう　故宮が浮舟を疎外して冷淡な扱を遊ばしたので。

いとど人げなく　妻腹な上に父宮から認められなかつたから。

見給ふれど　湖月抄本「見給れど」

浮島の物語　常陸が陸奥守であつた時の話。新古今集五山口女王「鹽釜の前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり」

わが身一つの　古今下「世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか」拾遺五「大方の我身一つの憂きからになべての世をも恨みつるかな」

ひ給へわびては、思ひより侍る」・といふ。「げに心苦しき御
有様にこそはあなれど、何か人にあなづらるる御有様はかかる
やうになりぬる人のさがにこそ。さりと・もえ絶えこもらぬわ
ざなりければ、むげにその方に思ひおきて給へりし身を、だに、
斯く心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御事なり。
やつい給はむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いと大
人びて宣へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたるさまなれ
ど、よしなからぬさまして清げなり。いたく肥え過ぎにたるな
む常陸殿とは見えける。「故宮のつらうなさけなく思し放ちた
りしに、いとど人げなく、人にもあなづられ給ふと見給ふれど、
かう聞えさせ御覧ぜらるるにつけてなむ、古への憂さも慰み侍
る」など、年頃の物語、浮島のあはれなりし事も聞えいづ。
「わが身一つのとのみいひ合する人もなき筑波山の有様も、斯く
あきらめ聞えさせて、いつも〳〵いと斯くてさぶらはまほしく

かしこ　常陸方即ち北方の自邸の事。

さすがに　前の「斯くてさぶらはまほしく云々」を受ける。

斯かる程の　こんな受領風情の妻に身を落すのは残念なものであつたといふ事が自分でも身にしみて居りますので、浮舟の身の上は一切あなたに任せきりにして私は構ひますまい。

げに見苦しからでも　自分の妹の事であるから、浮舟が見苦しくおちぶれる事もなくてほしいと思ふ。「げに」は二一頁の「又見苦しきさまにて世にあふれむも知らずがほにて聞かむこそ心苦しかるべけれ云々」を受ける。

かの人形　あの大君の身代りを探し求めてゐられる薫にこの浮舟をお目にかけたいものだ。

客人　浮舟。

思ひ給へなり侍りぬれど、かしこには、よからぬあやしのもの
ども、いかに立ちさわぎ求め侍らむ。さすがに心あわただしく
思ひ給へらるる。斯かる程の有様に身をやつすは、口惜しきも
のになむ侍りける、と、身にも思ひ知らるるを、この君はただま
かせ聞えさせて、知り侍らじ」など、かこち聞えかくれば、げ
に見苦しからでもあらなむと見給ふ。かたちも心さまも、え憎
むまじうらうたげなり。物恥ぢもおどろ〳〵しからず、さまよ
うこめいたるものから、かどなからず、近くさぶらふ人々にも、
いとよく隠れて居給へり。物などいひたるも、昔の人の御さま
に、怪しきまで覺え奉りてぞあるや、かの人形もとめ給ふ人に
見せ奉らばや、と打ち思ひいで給ふ折しも、「大將殿まゐり給ふ」
と人聞ゆれば、例の御几帳引きつくろひて心づかひす。この客
人の母君、「いで見奉らむ。ほのかに見奉りける人の、いみじ
きものに聞ゆめれど、宮の御有様にはえ並び給はじ」といへば、

お前にさぶらふ　中君のおそばにゐる女房達。

むかひておはせし　薫と匂宮と對座の御様子。

取り放ちては　別々に見れば、何れも優劣がつけられませぬ。

かたちよき人は　器量のよい人は他人を見ばえなくしてしまふのが憎い。前の「宮はいとなさけなげに見にくくこそ見え給ひしか」に應ずる詞。

されどお前には　けれども宮は薫に壓倒される事はございますまい。どんな方でも宮を見る影もないやうにする事は出來ませぬ。

げにあなめでた　前の「宮の御有様にはえ並び給はじ」を受けて「げに」といふ。

すずろに　何かしら薫にはお目にかかりにくく、きまりがわるくて。

額髪なども　きまりがわるいから自然身づくろひもされるのである。

御前　前驅の人々

宮たちの　中宮腹の皇子達が中宮のお側にゐられなかつたので。

お前にさぶらふ人々、「いざや、えこそ聞え定めね」と聞えあへり。「むかひておはせしさま、宮はいとなさけなげに、見にくくこそ見え給ひしか。取放ちては、いづれもともかくもわかれず。かたちよき人は、人を消つこそ憎けれ」と宣へば、人々笑ひて、「されどお前にはおされ奉り給はざめり。いかばかりならむ人か宮をば消ち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車よりおり給ふなりと聞くほど、かしかましきまで追ひののしりて、とみにも見え給はず。待たれたる程に、歩み入り給ふさまを見れば、げにあなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてに清げなるや。すずろに見え苦しう恥かしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥かしげに用意多く、きはもなきさまぞし給へる。うちよりまゐり給へるなるべし、御前どものけはひあまたして、「よべ后の宮の悩み給ふよし承りて參りたりしかば、宮たちのさぶらひ給はざりしかば、いとほしく見奉り

今朝もいと　今朝も大層なまけて遅參された事は、多分あなたが引きとめておかれた爲の過失だと、面白からず推察して居ります。

げにおろかならず　宮の代理を勤めて懈怠をつくろつて下さつたとは、ほんとに並々ならぬ御同情ある御心づかひです。

さしもいかでか　どうしてさういつまでも大君の事が忘れられないでばかりはゐられよう。これはやはり最初深く思ひこんでの事のやうに中し出されたのだから、すつかり忘れてしまつたやうには思はれたくないとの事か、などと思つては見られるが。

あはれなる　中君も岩や木ではないのだから、薫の眞實なるお心持が分つて來る。文集四「人非二木石一皆有レ情」

斯かる御心をやむる　伊勢物語「戀せじと御手洗川にせし御禊神は受けずぞなりにけるかな」。

かの人形　大君の代りの浮舟。浮舟の事を人形といふやうになつたのは宿木巻二八五頁九行以下参照。

て、宮の御代りに今までさぶらひ侍りつる。今朝もいと懈怠して參らせ給へるを、あいなう御あやまちに推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、「げにおろかならず思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへ聞え給ふ。宮はうちにとまり給ひぬるを見おきて、ただならずおはしたるなめり。例の物語いとなつかしげに聞え給ふ。事に觸れて、ただ古への忘れがたく、世の中の物憂くなりまさるよしを、あらはには言ひなさで、かすめ愁へ給ふ。さしもいかでか世をへて心に離れずのみはあらむ、なほ淺からずいひそめてし事の筋なれば、名殘なからじとにや、など見なし給へど、人の御氣色はしるきものなれば、見もてゆくままに、あはれなる御心ざまを、岩木ならねば思ほし知る。恨み聞え給ふ事も多かれば、いとわりなくうち歎きて、斯かる御心をやむる御禊をせさせ奉らまほしく思ほすにやあらむ、かの人形宣ひいでて、「いと忍びてこのわたりになむ」と、

ほのめかし聞え給ふを、（薫の心に浮舟もいい加減には考へられず）彼もなべての心地はせず、（見たくなつたが）ゆかしくなりにたれど、うちつけにふと（思ひ）移らむ心地はたせず。（薫）「いでや、その本尊（ほとけ）願ひ滿て給ふべくばこそ尊からめ、（朝夕常に逢つてゐることが出来ないで）時々心やましくば、なか〳〵山水も濁りぬべく」と宣へば、はて〳〵は、（中君）「うたての御聖（の）心や」と、（中君が）ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。（薫）「いで、さらば（私の心持を何もかも浮舟の母に）傳へ果てさせ給へかし。この御のがれ言葉こそ、思ひいづればゆゆしく」と宣ひて、（大君を想ひ出して）又涙ぐみぬ。

（薫）見し人の形代（しろ）ならば身に添へて（折々の慰めであつて水の撫物）戀しき瀨々のなで物にせむ

と、例のたはぶれにいひなして、まぎらはし給ふ。

（中君）「みそぎ河瀨々にいださむ撫物を身に添ふ影と誰か頼まむ（浮舟が可愛さうです）

引く手あまたにとかや、さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや」と宣へば、（薫）遂に寄る瀨は更なりや。（私の心の寄る所はいふ迄もなくあなたです）いとうれたきやうなる（水の泡と何れ劣らぬ浮標のはかなさを思ふと悲しい）水の泡にも爭ひ侍るかな。かき流さるる撫物（私はあなたに捨てられる撫物です）（は）いで誠ぞかし。いかで慰むべきことぞ」などいひつつ、暗うなるも（例の）（中君の心に）うるさ

うちつけに　浮舟の事を聞くなり直に中君を浮舟に思ひかへる氣にもなれない。

その本尊　本尊とは浮舟の事。宿木卷二八八頁四行に「人形の願ひばかりにはなどかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ」とあつた。本尊たる浮舟が私の願望を叶へて下さるならば有りがたくもありませうか、時々なやましい思ひもしなければならぬやうでしたら、却つて煩惱の種になりませう。

思ひいづれば　中君が浮舟の事をいうて薫から遁れようとするのが、大君が中君に譲つたのに似てゐて縁起がわるい。

見し人の　浮舟が大君の身代りであるならば、始終そばにおいて、大君を戀しく思ふ時々に、その戀しさを撫で移して捨てる撫物にしよう。形代は我が身にかたどつた人形の事で、御禊の折に、その人形に撫ての罪穢れを移して流し捨てるもの。

みそぎ河　撫物は御禊の時川に流してしまふ物ですもの、浮舟を一生お側において頂かれるものと安心は出來ませぬ。

引く手あまたに　伊勢物語「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」

さかしらなれど　いらぬおせつかいだけれど。

遂に寄る瀨は　伊勢物語「大幣と名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀨はありといふものを」

いとうれたきやうなる　古今戀五「水の泡の消えてうき身といひながら流れてもなほ頼まるるかな」の歌によつて書いたもの。

けれ ば、（中君）「假初に物したる人も、（浮舟の母）怪しと思ふらむとつつましきを、今宵はなほ疾く歸り給ひね」と、（すかして）こしらへやり給ふ。（薫）「さらばその客人に、（浮舟の母の家）（浮舟を望む心）斯かる心の願ひ年經ぬるを、うちつけになど、淺うは思ひなるまじう、宣はせ知らせ給ひて、（私の願ひを叶へて下さ）はしたなげなるまじうばこそ。いとうひ〳〵しうならひにて侍る身は、何事（に）もをこがましきまでなむ」と、（中君に）語らひ聞えおきて出で給ひぬるに、（浮舟の）この母君、「いとめでたく思ふやうなる（薫の）御さまかな」とめでて、（浮舟の）乳母の、ゆくりかに思ひ寄りて度々いひしことを、あるまじきことにいひしかど、（薫の）この御有樣を見るには、天の川をわたり（へだて）ても、斯かる彥星の光をこそ待ちつけさせめ、わが（浮舟）むすめは、（平凡な男に許づけるのは）なのめならむ人に見せむは惜しげなるさまを、爽めきたる人をのみ（見なれて）見ならひて、（立派な男と）少將をかしこきものに思ひけるを、くやしきまで思ひなりにけり。（薫の）寄り居給へりつる眞木柱も茵（しとね）も、（語られたあとの）名殘匂へる移香、（口に出せばわざと作つたと思はれる程）いへばいと殊更めきたるまでありがたし。時

怪しと思ふらむ　薫が長居しては。

さらばその　ではそのお客樣に私の願ひは長年の事ですもの、突然の思ひ付だなどと淺い心と誤解しないやうにお傳へ下さつて、恥をかかないで濟むやうならば願ひます。

いとうひ〳〵しう　戀路に不馴れな私は戀にかけては萬事痴呆に近い樣です。

乳母のゆくりかに　乳母が急場の思ひつきで浮舟を薫にあげなさいと度々勸めた事を、とんでもない事と退けたのだが、今この立派なお姿を見ては、年に一度でもよいから、こんな夫を通はせたいものだ。

爽めきたる　長年の東國生活で。

寄り居給へる　伊行釋引歌「わぎもこが來ては寄り添ふ眞木柱そも睦まじやゆかりと思へば」

時々見奉る　始めて見た北方の驚嘆はさこそあれ、時々お目に懸る中君の女房までが。

香のかうばしきを　香の芳ばしい事を貴いと佛が仰せられたのも御尤もだ。
藥王品　法華經第二十三章。
牛頭栴檀とかや　藥王品「若有人聞二是藥王菩薩本事品一、能隨喜讚善者、是人現世、口中常出二靑蓮花香一、身毛孔中常出二牛頭栴檀之香一」正法念經云「修羅と戰ふ時、牛頭栴檀を塗れば即癒」と云々。牛頭栴檀は牛頭の如くなる山也。其山に栴檀を生ずる也。
行ひもいみじく　佛道修行遊ばしたから、身内からこのやうに香氣が發散するのだ、藥王品にあるやうに。
すずろにゑみて　もう薫をわが君にしたつもりで。
忍びて　中君は薫が内々仰しやつた事を母北方にほのめかさる。
執念きまで　執念深いと思はれる程、輕々しくなく、變改なさらぬ方のやうですが。
げに只今の　女二宮のおありになる現在の有樣などを考へて見ると、うるさい氣持はしませうが。
かの世を背きても　あの尼になつてもなどと考へられるのと同じ事に考へて女一人を捨てたつもりで薫にあげて御覽なさい。二九頁に「尼になして深き山にやすゑて云々」などいつた事を受けていふ。

時見・奉る人だに、度ごとにめで聞ゆ。「經などを讀みて、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやんごとなき事に佛の宣ひおきけるもことわりなりや。藥王品などにも、取り分きて宣へ・る、牛頭栴檀とかや、おどろ〳〵しきものの名なれど、まづかの殿の近く振舞ひ給へば、佛はまことし給ひけりとこそ覺ゆれ。をさなくおはしけるより、行ひ・もいみじくし給ひければよ」などいふもあり。又、「さきの世こそゆかしき御有樣なれ」など、口々めづることどもを、すずろにゑみて聞き居たり。

君は、忍びて宣へることを、ほのめかしのたまふ。「思ひそめつること、執念きまでかろ〳〵しからず物し給ふめるを、げに只今の有樣などを思ふは、わづらはしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひ寄り給ふらむも、同じことに思ひなして、試み給へかし」と宣へば、「つらき目見せず、人にあなづられじの心にてこそ、鳥のね聞えざらむすまひまで思ひ給へおきつれ。げに人の御有樣けはひを見奉り思ひ給ふるは、下仕の程などにても、斯かる人の御あたりに馴れ聞えむはかひありぬべし。まいて若き人は、心つけ奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に、物思ひの種をやいとど蒔かせて見侍らむ。高きもみじかきも、女といふものは、斯かる筋にてこそこの世後の世まで苦しき身となり侍るなれ、と思ひ給へ侍ればなむ、いと悲しく思ひ給へ侍る。それもただ御心になむ。ともかくも思し捨てず物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて、「いざや、きし方の心深さに打解けて。ゆく先の有樣は知りがたきを」とうち歎きて、殊に物も宣はずなりぬ。

明けぬれば、車などゐて來て、守の消息など、いと腹立たしげにおびやかしたれば、「忝くよろづに賴み聞えさせてなむ。なほ暫し隱させ給ひて、いはほのなかにともいかにとも、思ひ給

鳥のね聞えざらむ　古今戀一「飛ぶ鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ」
げに人の御有樣　成程あなたの仰しやる通り薫の御樣子を拜見しますと。
數ならぬ身に　數ならぬ浮舟の身の上で、その爲一層物思ひの種を蒔かせるやうな結果になつて、私もそのなやみを見なければならぬ事になりませう。
それもただ　それも全くあなたの御考へ次第です。お見捨てなくどのやうになりと宜しくお願ひします。
きし方の　今迄薫が心深かつたので、うつかり口をきつたが、これから先の事は分らないもの。
車など　常陸から北方を迎への車などを。
いと腹立たしげに　娘の婚禮をよそに他に長居をするのは何事ぞなどと。
いはほのなかに　出家させるなりどうするなり思案して居る間中、不束者ながらお見捨てなく何事も敎へてやつて下さい。古今雜下「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞えこざらむ」

いと心細く　「ならはぬ心地に、立ち離れむことをいと心細く思へど」と句をおきかへて見る。

若君おぼつかなく　宮は若君の事が氣がかり故、微行の體で、御車なども常と違つた網代車のやつれたのに召して歸つて來られた所へ北方の車にでくはして。

なぞの車ぞ　誰の車かと疑はれての詞。

かやうにてぞ　こんな風にして忍び女の所からは紛れ歸るのだと御自分の經驗から思ひ付きなさるのも氣味のわるい事である。

御前ども　匂宮の前驅の人々。

殿こそ　受領風情の妻に殿呼ばりは耳ざはりだ。

へめぐらし侍るほど、數に侍らずとも、思ほし放たず、何事をも數へさせ給へ」など、打泣きつつ聞えおきて、この御方も、いと心細く、ならはぬ心地に、立ち離れむことを思へど、今めかしくをかしく見ゆるあたりに、暫しも見馴れ奉らむと思へば、さすがに嬉しく思ほえけり。車引きいづる程のすこしあかうなりぬるに、宮、うちよりまかで給ふ。若君おぼつかなく覺え給ひければ、忍びたるさまにて、御車なども例ならでおはしますにさしあひて、おしとどめ立てたれば、廊に御車寄せており給ふ。「なぞの車ぞ、暗き程に急ぎ出づるは」と目とどめさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所にはまぎれ出づるかし、と御心ならひに思しよるもむくつけし。「常陸殿のまかでさせ給ふ」と申す。若やかなる御前ども、「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身の程やと、悲しく思ふ。ただこの御方のことを思ふ故にぞ、おのれも人々

まして正身を　身分でさへ一人前らしくなりたいのだから、まして娘自身をつまらぬ人の妻にしてしまふのは大變惜しく思ふやうになつた。

ここに通はし　當家に出入りさせてありますか。

殊に今めかしう　田舍者故格別當世風な女にも見えないやうだのに、それを何か意味ありげに仰しやる事よ。

常に取りない　何でもない事をいつも意味ありげに解釋して、人に不審を抱かせるやうな事ばかり仰しやつて無實の罪をきせなさる。後撰戀二「思はむと頼めし事もあるものを無き名を立ててただに忘れぬ」の詞だけを借りたもの。

左のおほい殿の君だち　夕霧の子息達。

人々　中君の女房達。

しくならまほしくおぼえける。まして正身を、なほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、「常陸殿といふ人やここに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに、急ぎ出でつる車添ひなどこそ、殊更めきて見えつれ」など、なほ思し疑ひて宣ふ。聞きにくく傍痛しと思して、「大輔などが若くての頃、友だちにてありける人は、殊に今めかしうも見えざめるを、故々しげにも宣ひなすかな。人の聞きとがめつべき事をのみ、常に取りない給ふこそ。無き名は立てて」とうち背き給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた參り給へば、寢殿にわたり給ひぬ。后の宮は、事々しき御惱みにもあらで、怠り給ひにければ、心地よげにて、左のおほい殿の君だちなど、碁うち韻塞などしつつ遊び給ふ。夕つ方宮こなたにわたらせ給へれば、女君は御ゆするのほどなりけり。人々もおのおのうち休みなどして、御前には人もなし。

小さき童　中君の召使ふ童女。

さう〴〵しくてや　中君の洗髪がすむまで自分一人でぼんやり相手もなしにゐるでもあるまい。

げにおはしまさぬ　「げに」は「折あしき御ゆするの程こそ云々」を受ける。匂宮がおいでにならぬ時にばかりいつも髪をお洗ひになるのです。「すます」は洗ふ意。

日もなし　髪を洗ふべきよい日がない。洗髪には日柄や月を選んだのである。

西の方　西の對即ち浮舟の隱れてゐる所。

例ならぬ童　見馴れぬ童女即ち浮舟の召使である。

今參り　新參者。

帷子一重を　几帳の垂布一重を几帳の手にかけて。

紫苑色　表薄色裏青。

女郎花　表は經青緯黄裏は青。

今參りの　新參の女房の中の萬更ではないのだらうと想像して。

小さき童のあるして、(匂)「折あしき御ゆするの程こそ見苦しかめ(會ふのも見苦しからう)れ。さう〴〵しくてやながめむ」と聞え(聲を以て)給へば、(大輔)「げにおはしまさぬひま〳〵にこそ例はすませ。怪しう日頃も物憂(洗髪を)がらせ給ひて、今日過ぎ(な)ば、この月は日もなし。九十月はいかでかは(洗髪が出來ぬ)・とて、仕うまつらせ(今晩・)つるを」と、大輔いと侘しがる(匂宮に對して)。若君も寢給へ(ひに)りければ、そなたに(若君の方に女房達が)これかれある程に、宮はたゝずみ(あたりを)ありき給ひて、西の方に例ならぬ童の見え(け)つるを、今參りのあるか(た・こ)など思して、さしのぞき給ふ。中(なか)の程なる障子(襖)の、細目にあきたるより見給へば、障子のあなたに(その屏風の端に)、一尺ばかり引きさけ(横から遠ざけ)て、屏風立てたり。そのつまに、几帳、簾に添へて(几帳を簾垂の奥に)立てたり。帷子(かたびら)一重をうちかけて、紫苑(しをん)色の花やかなるに、女郎花の織物と見ゆるかさなりて、袖口(ほのかに)・・さしいでたり(側面の下から)。屏風の一(ひと)枚(ひら)たたまれたるより、心にもあらで(何も氣づかずに)見ゆるなめり。今參り(匂宮の心)の口惜しからぬなめりと思して、この廂(今匂宮がゐられる廂に通ずる)に通ふ障子を、いとみそかに押し

端近く添ひ臥して　浮舟が端近の所で脇息に俯向き加減にもたれて庭の景色を眺めてゐるのであつた。

例の御心は　宮の例の浮氣心には只にはおけなくて、浮舟の裾をとらへて。

屏風のはざま　屏風と襖との間にすわられた。

名のりこそ　名前が聞きたい。

さるもののつらに　さうした屏風などの蔭に顔を外の方に向けて誰やら分らぬやうにしてゐられるので。

このただならず　これはあの懸想の心をほのめかしてゐられる大將かも知らぬ。

あけ給ひて、(宮が)やをら歩み寄り給ふも人知らず(誰も氣づかない)。こなたの廊のなかの壺前栽(中庭)の、いとをかしう色々に咲き亂れたるに、遣水のわたりの石高きほど、いとをかしければ、端近く添ひ臥して眺むる(程)・なりけり。あきたる障子を、今すこしおしあけて(宮が)、屏風のつまよりのぞき給ふに、宮とは(浮舟は)思ひもかけず、例こなたに(いつも浮舟方に)來馴れたる人(女房)にやあらむと思ひて、起きあがりたる樣態(浮舟の)、いとをかしう見ゆるに、例の御心は、(見)・過ぐし給はで、衣(きぬ)の裾をとらへ(側面の下から)給ひて、こなたの障子(さつきあけて入つた襖)は引き立て給ひて、屏風のはざまに(つい)・居給ひぬ。怪しと(浮舟は)思ひて、扇をさし隱して(扇で顔を)、見かへりたる(宮の方を)さまいとをかし。扇を持たせ(浮舟に)ながら、とらへ(浮舟の手を)給ひて、(匂)「たれぞ。名のりこそゆかしけれ」と宣ふに、むくつけくなりぬ(浮舟は氣味わるくなつた)。さるもののつらに、顔を外(ほか)ざまにもて隱して、いといたう忍び給へれば、このただならず(浮舟の心)(まんざいでは無いやうな口吻をもらされる)ほのめかし給ふらむ大將(薫)にや、かうばしきけはひなども思ひわたさるる(薫らしく思はれてくるので)に、いと恥かしくせ(う)む方なし。乳母(浮舟の)、

人げの例ならぬを　人のけはひがいつもと違ふので。
かくうちつけなる　新樣に出來心からのお仕事ではあるが。
言葉多かる　宮は多くの口數をきく御性質故。
誰と聞かざらむ　名前を聞かぬうちは放さない。
今わたらせ　中君の御洗髮がすんで今すぐにお部屋にお歸りになりませう。
お前ならぬ　中君のお部屋の格子だけを除いて他は皆おろすのである。
廚子一よろひ　扉のある厨子を一雙。
まだ大殿油も　まだおあかしもつけなかつたのですね。

人げの例ならぬを、怪しと思ひて、あなたなる屏風をおしあけて來たり。「これはいかなる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と聞ゆれど、憚り給ふべきことにもあらず。かくうちつけなる御しわざなれど、言葉多かる御本性なれば、何やかやと宣ふに、「誰と聞かざらむ程はゆるさじ」とて、馴れ〳〵しく臥し給ふに、宮なりけりと思ひ果つるに、乳母いはむ方なくあきれてゐたり。大殿油は燈籠にて、「今わたらせ給ひなむ」と人々いふなり。お前ならぬ方の御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方にしなして、高き棚厨子一よろひばかり立て、屏風の袋に入れこめたる、所々に寄せかけ、何かの荒らかなるさまにし放ちたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞあけたるを、右近とて、大輔がむすめのさぶらふ來て、格子おろしてここに寄り來なり。「あな暗や。まだ大殿油もまゐらざりけり。御格子を苦しきに急ぎまゐ

宮もなま苦しと　右近の來るのを聞いて、かうした所を見られるのを心苦しく思召さないではない。
見給へごうじて　長い間見まもつてゐつて疲れました。
袿姿　袿だけで上に直衣や狩衣などを着ない姿。
女の　浮舟の同意なき事と想像されるので。
右近はいかにか　私は何とも申上げる詞はありませぬ。直に參つて中君にこつそりお知らせしませう。
かたはに　中君に知らせる事を皆が見ともない事と思ふけれども。
右近がいひつる　右近の話し具合から見ても並々の新參者ではないやうだ。
心づきなげに　浮舟は不愉快なとりすました態度もしないけれども。

りて、闇にまどふよ」とて、引きあぐるに、宮もなま苦しと聞き給ふ。乳母はたいと苦しと思ひて、物づつみせず、はやりかにおぞき人にて、「物聞え侍らむ。ここにいと怪しき事の侍るに、見給へごうじてなむ。え動き侍らでなむ」。「何事ぞ」とてさぐり寄るに、袿姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥し給へるを、例のけしからぬ御さまと思ひ寄りにけり。女の、心あはせ給ふまじき事と推し量らるれば、「げにいと見苦しき事にも侍るかな。右近はいかにか聞えさせむ。いま參りて、お前にこそは忍びて聞えさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰も誰も思へど、宮はおぢ給はず。あさましきまであてにをかしき人かな、なほ何人ならむ、右近がいひつる氣色も、いとおしなべての今參りにはあらざめり、と心得がたく思されて、といひかくいひ怨み給ふ。心づきなげに氣色ばみてももてなさねど、ただいみじう死ぬばかり・・・思へるがいとほしければ、な

しか／＼こそ　只今宮がかく／＼の有樣でいらつしやいます。どんな氣持でいらつしやるかお氣の毒の事です。

うしろやすく　安心の出來るやうにお預り下さいと。

いかが聞えむ　何と申上げようぞ。宮は永のやうなお癖の方でどうせ聞きなさらないのだから。

さぶらふ人々も　侍女達でも、すこし若々しく一寸した器量なのは、其儘ではおきなさらず、けしからん浮氣癖の方なのだから、何とも申上げる詞もない。

皆打解けて　平素も早寢するのだから、今日もおいでが遲くなるだらうと思つて皆氣をゆるして寢てゐられる、だから相談も出來ない。

かの乳母こそ　前に「物づつみせずはやりかにおぞき人にて」とあつた。あの乳母は氣の强い人だ。浮舟の側を離れないで番をしてゐて。

なさけありてこしらへ給ふ。右近、うへに、「しか／＼こそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞ゆれば、「例の心憂き御さまかな。かの母も、いかにあは／＼しくけしからぬさまに思ひ給はむとすらむ。「うしろやすく」と返す／＼いひおきつるものを」と、いと恥しく思せど、いかが聞えむ、さぶらふ人人も、すこし若やかによろしきは、見捨て給ふなく、あやしき人の御癖なれば。いかでかは思ひより給ひけむと、あさましきに、物もいはれ給はず。右近「上達部あまた參り給ふ日にて、遊びたはぶれ給ひては、例も斯かる時はおそくもわたり給へば、皆打解けて休み給ふぞかし。さてもいかにすべき事ぞ。かの乳母こそおずましかりけれ。つと添ひて居てまもり奉り、引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつれ」と、少將と二人していとほしがる程に、うちより人參りて、大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじくおもく惱ませ給ふよ

心なき折の　（細）たはふれにいへり、眞實にいふにあらず（孟）匂宮の浮舟の方に入れはするをりふし、中宮の御なやみを告きたれば、匂の爲心なきをりとは、右近がいふ也、眞實心なき折といふにあらず（哢）以上湖月抄。

今はかひなくも　かうなつては今更どうにもならないのだから。

まだしかるべし　まだ事實には及んでない。

すこし心あらむ　すこし物の分つた人は、宮ばかりか、私をまでもきらひさうな事だ。

參りて　右近が匂宮の御前に。

宮のさぶらひ　中宮職の侍。

出で給はむことの　匂宮はこの場を去るのが非常に殘念なので人目を斟酌しようともなさらないので。

西おもてにて　寢殿の西面で浮舟の居る方である。宮もそこにゐられる。右近はわざ／＼御使を西面にまはして、宮に聞えよがしに御容態を尋ねると。

大夫　中宮大夫。

し申さす。右近、「心なき折の御惱みかな。聞えさせむ」とて立つ。少將、「いでや、今はかひなくもあべい事を、をこがましく、あまりなおびやかし聞え給ひそ」といへば、右近「いな、まだしかるべし」と、忍びてささめきかはすを、うへは、いと聞きにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへうとみぬべかめり、と思す。參りて、御使の申すよりも、今すこしあわただしげに申しなせば、動き給ふべきさまにもあらぬ御氣色に、「たれか參りたる。例のおどろ／＼しくおびやかす」と宣はすれば、右近「宮のさぶらひに平の重經となむ名のり侍りつる」と聞ゆ。出で給はむことのいとわりなく口惜しきに、人目もおぼされぬに、右近立ちいでて、この御使を西おもてにて問へば、申しつぎつる人も寄り來て、「中務の宮も參らせ給ひぬ。大夫は只今なむ、參りつる道に、御車引きいづる、見侍りつ」と申せば、げに俄に時々惱み給ふ折々もあ

人の思すらむ　他人の手前もきまりわるくなつて。
斯かる御すまひは　かうした所にいらつしやいますは、萬事につけて氣づまりでもあり勝手がわるいものだつた。
限りなき人と　いくら高貴なお方でも理かならぬ御振舞は誠に面白からぬ事と思ふ。
よそのさし離れたらむ　よその何の緣もゆかりもない人から、妻として愛して貰ふ方が寧ましうございます。
降魔の相　不動尊などのやうな忿怒の相。
いとむくつけく　私を氣味のわるいげすつぽい女と思召して。
直人の懸想だちて　下々の懸想の所作じみて誠にをかしうございました。
ただ一所の　浮舟一人の世話にばかりかかつて居つて、私の實子は構つてやらない。婿君の來てゐられる時の泊りあるきは見つともない。

るを、と思すに、人の思すらむ事もはしたなくなりて、いみじう恨み契りおきて出で給ひぬ。怖ろしき夢のさめたる心地して、汗におしひたして臥し給へり。乳母うちあふぎなどして、「斯かる御すまひは、よろづにつけて、つつましうびんなかりけり。かくおはしましそめて、更によき事侍らじ。あな怖ろしや。限りなき人と聞ゆとも、やすからぬ御有樣は、いとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、よしともあしとも覺えられ給はめ。人聞きも傍痛きことと思う給へて、降魔の相をいだして、つと見奉りつれば、いとむくつけく下衆々々しき女と思して、手をいといたくつませ給へ・るこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、今日もいみじくいさかひ給ひけり。『ただ一所の・うへを見あつかひ給ふとて、わが子ども・をば思し捨てたり。客人のおはする程の御旅居見ぐるし』と、あらあらしきま

下人さへ　常陸の下部までがこの夫婦喧嘩を聞いて氣の毒がつた。
なだらかに　「おはしますべきものを」に續く。平穏に。
只今はともかくも　浮舟は今のところ昨夜の怖ろしさに親達の夫婦喧嘩の事など考へて見る餘裕もないのである。
いかに思すらむと　中君が自分の事を何と思召すだらうと思ふとつらくて。
何か斯く　何を御心配なさいます。
母おはせぬ　實母のない人こそ頼りなく悲しいものだと思はれる。その點であなたは仕合ですの意。
よその覺えは　實父のない子は他人の氣受は思はしくないけれども、意地のわるい繼母に憎まれるよりはこの方は氣樂です。お母樣があなたを何とかして下さるでせう。
なおぼしくつせそ　屆の字。氣をくさらせなさいますな。
さりとも　初瀨には度々參詣した事故いくら何でも不便と思召して下さる事でせう。
まで給ふことは　參詣された事は効驗なしには終らないの意。
人の斯く　今迄はどうかすると人が斯樣にあなたを輕蔑の目で見て居つたのを、昔はかうもあつたのだ（あはれな身の上であつたのだ）と人が驚く程のお仕合があるやうには祈念した事ですから、あなたは世間の物笑ひに終る事はありませぬ。

でぞ聞え給ひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、いと愛敬なく覺え給ふ。この御事侍らざらましかば、うちうち安からずむつかしき事は折々侍るとも、なだらかに、年頃のままにておはしますべきものを」など、うちなげきつついふ。君は、只今はともかくも思ひめぐらされず、只いみじくはしたなく見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すらむと思ふに、わびしければ、うつぶし臥して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、「何か斯くおぼす。母おはせぬ人こそ、・・・・たづきなう悲しかるべけれ。よその覺えは、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母に憎まれむよりは、これはいとやすし。ともかくもし奉り給ひてむ。なおぼしくつせそ。さりとも初瀨の觀音おはしませば、あはれと思ひ聞え給ふらむ。ならはぬ御身に、度々しきりてまで給ふことは。人の斯くあなづりざまにのみ思ひ聞えたるを、斯くもありけりと思ふ

ばかりの御さいはひゐはしませとこそ念じ侍れば、あ(わ)が君は人笑はれにてはやみ給ひなむや」と、世をやすげに(氣樂らしく)いひ居たり。

宮(匂宮は)は急ぎて出で(參内)給ふなり。うち(內裏への近道と見えて)近き方にやあらむ、こなた(浮舟の居る西の方の)の御門より出で給へば、物宣ふ御聲(宮の)も聞ゆ。いとあてに限りもなく聞えて、心ばへ(面白い)ある古事(ふるごと)などうちず(ん)・じ給ひて過ぎ給ふほど、すずろに煩はしく覺ゆ。うつし馬ども引きいだして、宿直にさぶらふ人、十よ人ばかりして參り給ふ。

うへ、いとほしくうたて思ふらむとて、知らず(昨夜の事は)がほにて、(中君)「大(明石)宮(中宮)惱み給ふとて參り(匂宮參內)給ひぬれば、今宵は出で(退出なさるまい)給はじ。ゆするの(髮を洗つた爲か)名殘にや、(風)・心地もなやましくて、起きゐ侍らぬ(るこ)を、わた(私方に)り給へ。つれ〴〵にも思さるらむ」と聞え給へり。(浮舟)「亂り心地のいと苦しう侍るを、ためらひて」と、乳母して聞え給ふ。(中君)「いかなる御心地ぞ」と、立ちかへりとぶらひ聞え給へば、(浮舟)「何心地とも覺え・・(侍ら)ず、只いと苦しく侍り(う)・」と聞え給へば、少將、右(二人共中君の侍女)

古事 古い詩歌。
すずろに その御聲で、昨夜の記憶がよみがへつて、何となしに氣が重い。
うつし馬 乘替の馬。
宿直にさぶらふ人 匂宮のお供をして禁中に宿直する人十數人をつれてお出かけになる。
うへ 中君は浮舟がいやな氣持でゐるだらうと氣の毒がられて。
亂り心地の 氣分が大變わるうございますから、暫くしてから參上致します。
いかなる御心地ぞ どんな御氣分か。
立ちかへり 折返して容態をお尋ねになると。
何心地とも 何病氣か分りませんが只ひどく苦しいのです。

近、目まじろき(目くばせして)をして、「傍痛くぞ・おぼすらむ」といふも、ただなるよりはいとほし(浮舟が氣の毒だ)。いと口惜しく(以下中君の心)心苦しき(う)わざかな、大將の(薫が浮舟に)心とどめたるさまに・の(も)・(し)たまふめりしを、いかに(薫が浮舟を)あはく〴〵しく思ひおとさむ、かくのみ・・亂りがはしくおはする人は、聞きにくく實(じち)ならぬことをもくねりいひ、又誠に(事實多少不都合な事があつても)すこし思はずならむことをも、さすがに(自分に缺點があるから、さすがに見のがすといつたやうな所がおありなさるやうだ)見許しつべうこそおはすめれ、この(か)君(薫)は、いはで憂しと思はむこと、いと恥かしげに心深きを、あいなく・(物)思ふ・・(はしき)事添ひぬる人(浮舟の身の上)のうへなめり・、年頃(浮舟といふ人は)見ず知らざりつる人のうへなれど、心ばへかたちを見れば、え思ひ放つまじうらうたく心ぐるしきに、世の中は(世の中といふものは渡りにくくうるさいものだ)ありがたくむつかしげなるものかな、わが身の有樣は(自分の境遇は)、飽かぬこと多かる心地すれど、かく物はかなき目も見つべかりける身の、さはふれずなりにける・にこそ、げにめやすき・・(わざ)なりけれ、今は只この憎き(いやな穢を賣りつけようとしてる)心添ひ給へる(る薫が)人の、なだらかにて(穩かに認めてくれたら)思ひ離れなば、更に何事(今何の心配もなくなる事だらう)も思ひ入れずな

傍痛くぞ 中君が氣まりわるくお思召すだらう。匂宮の仇心から起つた事故。
ただなるよりは 誰も知らなければとにかく、侍女達までが知つてゐるから。
いかにあはく〴〵しく どんなに分別のない女と見さげる事だらう。
かくのみ 匂宮のやうにかうまで女の事といふとだらしのない人は、無實の事をも誇飾をつけて聞きづらい口をきいたり。
この君は あの方は口には言はずに心の中でけしからぬと思つてゐるといふ大層氣のおける深みのある方だのに、浮舟といふ人はつまらなく物思ひがふえてしまつた。
年頃 今迄は一向見も知りもしなかつた人だが、氣立や容姿を見るとほつておけない程可憐でいぢらしく思はれるのに。
わが身の有樣は 「げにめやすきなりけれ」に續く。不滿な事が多いやうな氣もするが。
かく物はかなき 浮舟同樣つまらぬ目にもあひかねない身の上であつたにも拘らず、さうもおちぶれずに終つたので。
げにめやすきなりけれ 人も私を仕合者だといつてゐるが、成程その通りであつたのだ。

ほそやかにて　御衣ばかりで袿などを着てゐられないから細やかに見えるのである。**いと傍痛し**　往かないでは匂宮との間に何かあつたやうに見えてきまりがわるいの意。中君から折角招かれたのに病氣と稱して行かないのを責める詞。**事しもありがほに**　〔行かなくては、匂宮との間に事でもあつたやうに思召しませうから、只大やうな態度でおあひなさい。**物聞えさせむ**　お話申上げたい。**いと怪しく**　妙な出來事があつた後で熱を出されて、心から苦しさうにしてゐられるのでお氣の毒に存じます。**お前にて**　中君から慰めて頂かうと存じまして。御自分は何も過ちもないのに、大變恥かしさうにくよ〳〵してゐられるのも御尤もと思ひまして。**さすがにこそ**　浮舟の實事もなけれど恥かしくおぼすもさすがにこそとことわりなれと也（湖月抄）**いかでかは**　下に「つつましげに思ほしわび給はざらむ」などの意の文が省かれてゐる。**引きおこして**　うつぶし臥してゐる浮舟を引き起して中君の方へ押してやる。

りなむ、と思ほす。いと多かる御ぐしなれば、とみにもえほしやられず、起きゐ給へるも苦し。白き御ぞ一かさねばかりにておはする・・、・・ほそやかにてをかしげなり。

この君は、誠に心地もあしくなりにたれど、乳母、「いと傍痛し。事しもありがほに思すらむを、只おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有樣、初めより語り侍らむ」と、せめてそのかし立てて、こなたの御障子のもとにて、「右近の君に・物聞えさせむ」といへば、立ちていでたれば、「いと怪しく侍りつることの名殘に、身もあつうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。お前にて慰め聞えさせ給へとてなむ。あやまちもおはせぬ御身を、いとつつましげに思ほしわびにためるも、さすがにこそ。聊かにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはと、ことわりにいとほしく見奉る」とて、引きおこして參らせ奉る。我にもあらず、人の思

これに思しつきなば　こんな美しい浮舟に匂宮が執心されたならば、大變な事が起るだらう、これ程の美人でなくても、目新らしい女に興味をお持ちになる御性分だのに。**物語いとなつかしく**　中君が大層やさしく浮舟にはなしかけられて。**忘らるる世なく**　大君の事が忘れられる時もなく悲しく。**身も怨めしく**　死なれずに一人ぼつちになつた我身も怨めしく。**思ふ人もなき身に**　愛してくれる親兄弟もない私ですのに、大君が愛して下さつたやうにあなたが愛して下さるならば大變嬉しく思ひます。**年頃いと遙にのみ**　今迄は全く他人のやうに思つて居りましたのに、かやうに親しくお目に懸りましては、何もかも慰められるやうな氣が致しまして。

ふらむことも恥かしけれど、いと柔かにおほどき過ぎ給へる君にて、おし出でられて居給へり。額髮などの、いたう濡れたるをもて隱して、火の方にそむき給へるさま、うへをたぐひなく見奉るに、け劣るとも見えず、あてにをかし。これに思しつきなば、めざましげなる事はありなむかし、いと斯からぬをだに、珍らしき人・をかしうし給ふ御心を、と二人ばかりぞ、お前にてえ恥ぢあへ給はねば、見ゐたりける。物語いとなつかしくし給ひて、「例ならずつつましきところなど、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなりにしのち、忘らるる世なくいみじく、身も怨めしく、たぐひなき心地して過ぐすに、いとよく思ひよそへられ給ふ御さまを見れば、慰む心地してあはれになむ。思ふ人も・・なき身に、昔の御志のやうにおもほさば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つつましくて、又ひなびたる心に、いらへ聞えむこともなくて、「年頃いと遙にのみ思ひ聞

繪など　繪物語などを侍女に持って來させて。**ことわり**　筋路をよませて。繪同の事。

心に入れて　熱心に繪を見てゐられる燈下の姿は、こゝが缺點だと思はれる所は聊かもなく、どこまでも美しい。

繪は殊に　繪は前に廣げた儘中君がじっと浮舟を見つめながら考へるのである。

いとあはれなる　大層なつかしい顔をしてゐられる事だ。

古人どもいふ　老女房達。**げに似たる人は**　似て居る人はなつかしといふが、浮舟の父宮や姉君に似てゐるのを見るとその通りだ。

思しくらぶる　浮舟と大君や、父宮とを想ひ出してくらべてゐられるので。

かたはなるまで　度を過ぎて却って缺點になりさうなまで。**もてなしの**　物ごしがうぶで、萬事遠慮がちにしてゐる爲か目につくやうな色つぽさが稍乏しい。

えさせしに、かう(く)見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」
とばかり、いと若びたる聲(けはひ)にていふ(なり)。繪などとり(う)いで(こ)させて、
右近にことわり(は・こ)讀ませて見給ふに、(中君が)むかひて(浮舟は中君と向ひあって坐って)、物恥ぢもえしあ
へ給はず、心に入れて見給へる火影(浮舟の)、更にこゝ・・(こそ)と見ゆる所
なく、こまかにをかしげなり。」額つきまみのかをりたる(いふにいはれぬ味があって)心地し
て、いとおほどかなる(大やうなる上品さ)あてさは、ただそれ(まるで大君かと)とのみ思ひいでらる
れば、繪は殊に目もとどめ給はで、いとあはれなる、人(浮舟)のかた
ちかな、いかで(どうしてこんなに似られたのか知らぬ)かうしもありけるにかあらむ、故宮(やはり八宮に)にいとよく
似奉りたるなめりかし、」故姫君(大君)は宮(八宮)の御方ざまに、我は母上に
似奉りたるとこそは古人(ふるびと)どもいふなりし(め)か、げに似たる人は・(い)
・(と)いみじきものなりけり、と思しくらぶるに、涙ぐみて見給ふ。
かれ(大君)は限りなくあてにけ高きものから、なつかしうなよよかに(やさしくしなやかに)、(ひ)
かたはなるまで、なよ〳〵とたわみたるさま・(の)し給へりしにこ
そ、これ(浮舟)はまだ(又)もてなし・・(など)のうひ〳〵しげに、よろづの事を

故々しき　樣子に深みでも出來て來たら萬が妻となさるにも決して見苦しくあるまい。

このかみ心に　いつとなく姉といふ氣持になって浮舟をいぢりまはしてゐられる。

年頃おはせし　御存命中の御樣子などを、委しくはないけれども話される。

いとゆかしうて　八宮にお目にかゝり度く思って、御生前お目に懸らずに終った事を。

見奉りず　湖月抄本は本の儘。

よべの心知り　昨晩の事情卽ち匂宮が浮舟に近づかれた事を知ってゐる右近や少將等は。

いかなりつらむな　宮と浮舟の間は實際はどうであったのだらう。

いみじう　中君が浮舟を大事になさらうとした所で、宮との關係が出來て居っては、大事にして下さるかひはあるまい、お氣の毒な。

すずろに　とりとめもなく愚癡をこぼして居った樣子は、何の疑はしい事もないやうな口ぶりでした。

あひてもあはぬ　伊行釋引歌「臥す程もなくて明けぬる夏の夜は逢ひてもあはぬ心地こそすれ」寢る間もなくて明けてしまったといふやうな調子での寓。

いざや　いやそれはわざと反對な風をなさったのでもありませう、その後の事は分らない。

つつましう(く)のみ思ひたるけにや、見どころ多かるなまめかしさ
ぞ劣りたる・・・(心地しける)、故々しきけはひだにもてつけたらば、
大將の見給はむにも、更にかたはなるまじ、など、このかみ心
に思ひあつかはれ給ふ。(浮舟と)物語などし給ひて・(つ)・(こ)、曉がた(ちかう)になりて
ぞ寢給ふ。(中君が浮舟を)かたはらに臥せ給ひて、故宮(八宮)の御事ども、年頃おは
せし御有樣(八宮の)など、まほならねど語り給ふ。(浮舟は)いとゆかしう・て、見
奉り(ら)ずなりにけるを、いと口惜しう(み・こ)悲しと思ひたり。よべの心
知りの人々は、(女房)「いかなりつらむな(け・こ)。いとらうたげなる(浮舟の)御さま
を、いみじう(も)お・ぼすとも、かひあるべき事かは。いとほし」
といへば、右近ぞ、「(い で)・・さ・(し)もあらじ。(浮舟の)かの御乳母の、(私を呼びとめ)引きす
ゑて、すずろに語りうれへし氣色、(宮と浮舟と)もてはなれてぞいひし。宮
も、(宮は)あひてもあはぬ(と)・やうなる心ばへにこそ打ちうそぶき(口笛吹いたり歌ったり)口ず
さび給ひしか。いざや、殊更にもやあら(りけ)・む、そは知らずかし。」
よべの(昨夜の燈下における浮舟の姿が)火影のいとおほどかなりしも、事ありがほには見え給は

人もけしからぬ　周圍の人達も不埒な事といひもし思ひもする事だらう。當の中君御自身も何と思召す事やら、男女の事についての嫉妬といふものは、貴人も下々と同じ事だ、と自分のこんな場合のいつもの心持から落着いて居られない氣持になつて。

宮。　匂宮は今參內中でお留守故。

怪しく　妙に子供々々した娘をお預け申して、大船に乘つた氣持では居りながら、娘のやうに疑つて心配ばかりして居りますので、家の者でなしどもから疎まれ怨まれして居ります。細流抄「娘は狐の性の類也、狐は狐疑」とて物を弱く疑ふ心のある物也、その如くに娘も疑心のあるもの也、うしろやすくは思へども疑はしき心のあると也」

御まかげ　瞼のまかげともいつて、瞼が目の上に手をかざして遠巡してゐる貌。前の瞼に引かれた詞。

御まみ　瞼のまかげに引かれた詞。

心の鬼に　浮舟の事で中君が怨つて居るのではないかと氣が咎めて。

年頃の願ひ　年來の宿望が成就したやうな氣がして、人の耳にはひつても體裁がよく、名譽と心得て居りますが、でもそれはさしひかへなければならない事でございましたもの、やはり奥山に隱遁するといふ素志は動かすことの出來ないものでございませうに。

ざりしを」など、うちささめきて、いとほしがる。

乳母、車乞ひて（借りて）、常陸殿へいぬ。北の方にかう〳〵（昨夜の次第を）といへば、胸（母は）つぶれ騷ぎて、人（女房達を始め）もけしからぬさまにいひ思ふらむ、さうじみもいかが思すべき、斯かる筋の物憎みは、あて人もなきものなりと、おのが心ならひに、あわただしく思ひなりて、夕つかた參りぬ（北方が二條院へ）。宮おはしまさねば心（北方は）やすくて、（北方）「怪しく心をさなげなる人（浮舟）を參らせおきて、うしろやすくは頼み聞えさせながら、鼬（いたち）の侍らむやうなる心地のし侍れば、よからぬもの（常陸介やその息子達）どもに、憎み怨みられ侍る」と聞ゆ。（中君）「いとさいふばかりのを（浮舟は仰しやる程の事へなしではないやうです）さなげさにはあらざめるを、うしろめたげに氣色ばみたる御ま（あなたが心配して疑つてゐられるやうな口ぶりが變備です）かげこそ煩はしけれ」とて笑ひ給へるが、心恥かしげなる御（中君）まみ（の目付を）を見るも、心の鬼に恥かしくぞ覺ゆる。いかに思すらむと（昨夜の事を中君が何と思召すか心配で）思へば、（北方はその事をいひ出しかねてゐる）えも打ちいで聞えず。（北方）「斯くてさぶらひ給ふは（浮舟が中君方に）、年頃の願ひの滿つ心地して、人の漏り聞き侍らむも（事）めやすく、お

ここには　此處にゐられては、何の氣はづかしく思はれる事がありませう。

とてもかくても　「びんなうはもてなし聞えじ」を修飾する。

その心を皆　その邊の事情は誰も呑込んでゐるやうですから、私が注意して、不都合なやうには取計らふまいと思ひますのに、あなたはどう思つてそんな事を仰しやるのです。

傍痛う　故宮が浮舟を子として認めて下さらなかつたあのきまりのわるかつた事については、今更何で愚癡を申上げませう。その點ではなくても、あなたと私との間には叔母姪といふ斷ち得ない綱もございますから、それに縋つて、あなたを力にして居ります。二三頁參照。

あさましう　北方は案外なけしからん事に驚き騷いだので、碌々口もきかずに歸つて行つた。

もだたしき（嬉し）事になむ思ひ給ふるを、さすがにつつましき（いくら當方に都合のよい事でもやつぱり差控へねばならぬ事でした）事になむ侍りけるを、深き山の本意は、みさをになむ侍るべきを」とて、打泣く（北方が）もいとほしくて、（中君）「ここには、何事かうしろめたく覺え給ふべき。とてもかくても、疎々しく思（中君の心に）（私が浮舟を疎外してお）ひ放ち聞えばこそあらめ（嫌ひしないならばとにかく）、けしからずだちて（けしからぬ事する不良な）よからぬ人（匂宮）の、時時物し給ふめれど、その心を皆人見知りためれば、心づかひして、びんなうはもてなし聞えじ（浮舟の爲に）と思ふを、いかに推し量り給ふにか」と宣ふ。（北方）「更に御心をば隔てありても思ひ聞えさせ侍ら（あなたがわけへだてしていらつしやるとは更々思つては居りませぬ）ず。傍痛う許しなかりしすぢは、何にかかけても聞えさせ侍らむ。その方ならでも、思し放つまじき綱も侍るをなむ（私を）とらへどころに頼み聞えさする」など、おろかならず聞えて、（北方）「明日明後日かたき（嚴重な）物忌に侍るを、おほざうならぬ所（假初ならぬ場所で）にて過ぐして、又も參らせ（お手許へ）侍らむ」と聞えて、いざなふ（浮舟をつれ歸る）。いとほしく（中君は）本意なきわざ（見苦しい昨夜の一件）かなと思せど、えとどめ（引きとめ得ない）給はず。あさましうかたはなる事に驚

かやうの 斯様な場合の方違の場所にとの目的で、かねて小さい家を用意して、あつたのだ。それは三條邊で、しやれてはゐるがまだ出來上らずに居る家であるので、十分な飾りつけもせずにあつたのだ。**心にかなはぬ** ままならぬ憂世には生きてゐるべきものではなかつたのです。私一人だけならば、身分卑しく人がましくなくとも、かういふ身分と觀念して憂世を捨てて引籠りきりに引籠つても暮されるのです。「**只ひたぶるに**」は「這ひこもりて過ぐしつべし」を修飾する。**心憂しと** 父宮が娘として認めて下さらなかつたので。**むつび聞ゆるに** 中君に頼るのは浮舟の爲と思つて近づいて行つたのに。**異樣なりとも** 此處はへんな家であつても、誰にも知らせずに隱れてゐなさい。**世にあらむこと** 生きてゐるのも肩身の狭い身と小さくなつてゐられる様子は可愛さうだ。**親はたまして**「やすからぬなりけり」を修飾する。浮舟は親の心が分らないので、この院住居を悲しがるのであるが、母は浮舟をよい縁につけたいからこそここにおくのである。**あたらしく惜しければ** 浮舟を臺なしにするのがあつたらもので惜しいから、無事に成長させて思ふ通りの立派な縁につけようと思つて、あんな不都合な事の爲に人からも考への無い者と

きさわぎたれば、をさ〳〵物も聞えで出でぬ。
かやうの方違所（かたたがへどころ）と思ひて、小さき家まうけたりけり。三條わた
りに、ざればみたるが、まだ造りさしたる・（やうな）・所なれば、は
か〴〵しきしつらひもせでなむありける。北方「あはれ、この御身（浮舟）
一つ（一人）を、よろづにもてなやみ聞ゆるかな。心にかなはぬ世には、
あり經（ふ）まじきものにこそありけれ。みづからばかりは、只ひた
ぶるに、品々しからず人げなう・（くとも）・、只さる方に這ひこもりて
過ぐしつべし。この御ゆかりは、（中君方はつらく思ひ上げて居た所ですのに）心憂しと思ひ聞えしあたりを、
むつび聞ゆるに、（不都合な事でも起つては世間の物笑ひでせう）びんなき事も出で來なば、いと人笑へ・（に古へ）・
・（の事取扱へ心憂かし）・なるべし。（この世はいやだ）あぢきなし。異様（ことやう）なりとも、ここを
人にも知らせず忍びておはせよ。おのづからともかくも（どのやうになりともお世話しませう）仕うま
つりてむ」といひおきて、（北方自身は）みづからは歸りなむとす。君（浮舟）はうち
泣きて、世にあらむこと所せげなる身と思ひく（ん）し給へるさま（浮舟の）、
いとあはれなり。（母北方の心には）親はた・・まして、あたらしく惜しけれ（かひなしと思）・・

思はれたり言はれたりするのが心配で、こんな所に院住居をさせたのである。

しか隱ろへたらむ そんな風に小さくなつてゐるのを氣の毒に思つて斯様に取計らつたのであるが。河内本は本の儘。

あばれて 十分出來上らず戸締りなども不完全故。**さる心し給へ** 無用心だから注意しなさい。**宿直人の事など** 番人の事なども指圖してはありますが、それでもまだ心配だから私も此處に居たいのですが。**少將の** 左近少將（大女の婿）の世話を。**もろ心に** 自分と一緒になつて婿の世話をしない、不體裁な事だ。**いと心憂く** この人故に浮舟に取つてこんなどさくさがあるのだ。實にいやだ。**又なく思ふ** 無類の愛兒の浮舟がこんな有様故。

・こば、・（いかで）・恙なくて思ふごと見な（さ）さむと思ひ（ふに）・、さる傍痛（匂宮の一件）
きことにつけて、人にもあは〳〵しく・（いひ）・思はれ言はれむが、
やすからぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、（母は物の分らぬ人ではないが）なま腹立ち（おこりつぽくて）
やすく、（に）思ひのまゝに（氣儘）・（なる）・ぞすこしありける。かの家（常陸の家にも浮舟を藤の者として）にも隱ろ
へてはすゑたりぬべけれど、（おけばおけたのだが）しか隱ろへ・（たる）・たらむをいとほしと
思ひて斯くあつかふ・（らす）・に、年頃（今迄は一度も母子そばを離れた事がなかつたから）かたはら去らずあけくれ見なら
ひて、（母子互に）かたみに心細く（別居を）わりなし（つらい）と思へり。北方「ここは、まだ（又こ）斯く
あばれて、あやふげなる所なめり。さる心し給へ。曹司々々に（部屋々々にゐる女房達）
あるものども召しいでて使ひ給へ。宿直人の事などいひおきて
・（見捨つ）・侍るも、いとうしろめたけれど、かしこ（守の・常陸から）に腹立ち恨みらる
るがいと苦しければ」と、うち泣きて・（つこ）・歸る。
少將のあつかひ（かしづき）を、守（常陸）は又なきものに思ひ急ぎて、「もろ心に、
さま悪しく、いとなまず」と怨（えん）ずるなりけり。いと心憂く（母の心）この
人（少將）により斯かるまぎれどもあるぞかしと、又なく思ふ方の事

まさ〳〵見入れず　少將の事は碌々構はない。

かの宮のお前にて　少將があの匂宮の御前で實にみすぼらしく見えたので、それが主なる原因で輕蔑するに至つた事故、浮舟の秘藏娘にして大事にしようなどゝ思つた念は消えてしまつた。

こなたに　北方が少將の方に行つて物の隙からのぞく。

なつかしげなるに　糊氣の無くなつてしなやかな衣。

今樣色　薄紅梅色。

擣目　砧で打つて艶を出したその艶の具合。

宮のうへの　中君が匂宮と並んでゐられた御樣子などを思ひ出して見ると、二人とも見苦しい姿だなと思はれる。

前なる御達に　少將がそばに居る女房達に冗談などをいつて打解けてゐる樣子は、以前見た時のやうに引立たないそして人前にも出せないといつたやうな男とも思はれないので、あの時二條院に居つたのは外の少將であつたのだと思ひ直して見る折も折。

のかかれば、（ねてこ）（母は）つらく心憂くて、をさ〳〵見・・（聞き）入れず。かの、宮のお前にて、いと人げなく見えしに、（北方が少將を）多く思ひおとしてければ、私物に思ひかしづかましをなど思ひし事はやみにたり。（常陸）こゝにては（方では少將がどんなに見えるか）いかが見ゆる（らん）と、まだ打解けたる（少將のくつろいだ姿は）さま・・（も）見ぬに、と思ひて、のどかに（少將がひまな晝頃）居給へる晝つかた、こなたにわたりて、物よりのぞく。白き綾の（少將の裝束のさま）なつかしげなるに、今樣色（いまやういろ）の擣目（うちめ）なども淸らなるを著て、端の（端近な所で）かたに、前栽見るとて居たるは、いづく・かは・・（入　に）劣る、いと淸げなめるは、（常陸）と見ゆ。むすめ（常陸の次女）、まだ・・（いと）片なりに、何心も（陽氣な樣子をして）なきさまにて添ひ臥したり。宮のうへの並びておはせし御さまどもの思ひいづれば、口惜し（少將も次女も）のさまども・・やと見ゆ。前なる御達（たち）に物などいひたはぶれて、打解けたるは、いと見し（嘗て二條院で）やうに、匂ひなく人わろげにも（引立たない無ざまなやうにも）見えぬを、かの宮なりしは、異（こと）少將なりけりと思ふ折しもいふことよ。（少將が）少將「兵部卿（匂宮の事）の宮の萩の、なほ殊におもしろくもあるかな。いかでさる種ありけむ。同じ

事だに惜しき　拾遺秋「うつろはむ事だに惜しき秋萩に折れぬばかりもおける露かな」

心ばせの程を　浮舟を變改した根性の卑しさを思ふと人間とも思はれないし、それに匂宮の御前に出てのみすぼらしさは實にひどかつたくせに、歌でもあるまいて。

しめゆひし　約束した浮舟は迷ふ事なくいつまでも約束を守つて居つたのに、あなたはなぜ妹に乗りかへたのでせうの意。「移る」は葉の紅葉する意であるが少將の心の變る意にとりなしたもの。「下葉」は少將である。

宮城野の　初めから浮舟を宮樣の姫君と知つて居つたら少しも心を他に移すのではなかつたのにの意。宮城野の宮を八宮にとりなしたのである。

故宮の御事　さては故宮との關係を聞いたのだらうと思ふと、ぜひとも浮舟を人並の緣につけたいものだと、その事ばかりが一入氣が揉めてくる。「いとど」は「思ひあつかはる」を修飾する。

枝ざしなどの、いと艶（えん）なるこそ。（先日參上した所）一日まゐりて、（匂宮がお出かけの序であつた）出で給ふ程なりしかば、（ので）え折らずなりにき。『事だに惜しき』と宮のうちずじ給へりしを、（若女房達に）若き人たちに見せたらましかば」とて、我も歌詠みゐたり。北方「いでや、心ばせの程を思へば、人とも覺えず、出で消えは・（た）いとこよなかりけるに、何事いひゐたるぞ」とつぶ（どん）（息は少將）やかるれど、（笑の聲がもれるが）（但し少將がさう風流の分らなさうな樣子もして居ないので）いと心地なげなるさまはさすがにしたらねば、いかがいふとて（な返歌をするかと）試みに、（北方）

しめゆひし小萩が上も迷はぬにいかなる露に移る下葉ぞ

とあるに、（少將は）いとほしく覺えて、（少將）

「宮城野の小萩がもとと知らませば露も心を分かずぞあらまし

いかでみづから聞えさせあきらめむ」（ぜひとも直接お目に懸つて申し開きしたいものです）といひたり。故宮（八宮）の御事聞きたるなめりと（少將が）思ふに、（北方が）いとど、いかで人とひとしくとのみ、思ひあつかはる。（中君）あいなう大將殿の御さまかたちぞ戀しう面影に見・・（え）ゆる。（つまらなくも薫の容姿が目先にちらついて戀しい）同じうめでたしと見奉りしかど、（北方は匂宮も薫も同樣に立派なお方だとは思つたが）宮は思ひ離れ給ひ（浮舟を問題にもせず低にもと）

さすがに「うちつけにも言ひかけ給はず」云々—に係る。薫は浮舟を妻にしたい氣持はありながら、倂し唐突に口外するやうな事もせず、平靜を裝つてゐられる所がえらい。

よろづにつけて 自分でさへ萬事につけて、薫の事が思ひ出されるのだから、まして若い人は私のやうに思ひ出してゐる事だらう。

わがものにせむと こんないやな男をわが婿にしようと思ついたのは見苦しい譯のものであつたのだ。

とてやかくてやと あれやこれやと萬事都合のよささうな空想を描き續けて見ると、その實現は實にむつかしい事だ。

やんごとなき 尊い身分だかい態度の薫である、い妻としてゐられる婦人は浮舟よりも今一段優れてゐる（後文に「當帝の御かしづきむすめ」とあるのを指したもの、即ち浮舟の親王の女、これは内親王であるからである、浮舟がどれ程の女といふので）薫がこれに心を留められることがあらうや。

劣りまさり 優劣といふ事、それは身分の高下によつて容姿も心も判定される譯のものであつた。

わが子ども 常陸との間に出來た娘達。

似るべきやはある この下に「と」を補つて解する。

て、心もとまらず、あなづりて（侮つて無理に近づかれた事を思ふと憎らしい）押し入り給へりけるを思ふもねたし。この君（薫）は、さすがに、尋ねおぼす心ばへ（目をつけて思ひ寄らうとする心）のありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、つれなしがほなるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひいでらるれば、若き人（浮舟）はまして、斯くや思ひいで聞え給ふらむ、わがものにせむと、斯く憎き人（少將）を思ひけむこそ見苦しきことなるべかりけれ、など、ただ心にかかりて（只管浮舟の事が氣にな）、ながめのみせられて、とてやかくてやと（とやかくやと）、よろづによからむあらましごとを思ひつづくるに、いと難し。やんごとなき御身の程御もてなし、見奉り給へらむ人（薫）は今すこしなのめならず、いかばかりにてかは心をとどめ給はむ、世の人の有樣を見聞くに、劣りまさり、賤しうあてなる品にしたがひて、かたちも心もあるべきものなりけり、わが子どもを見るに、この君（浮舟）に似るべきやはある、少將（權の左近少將）を、この家（常陸の家では）の内に又なきものに思へども、宮（匂宮と）に見くらべ奉りしかば、いとも口惜しかりしに、（少將が大變みすぼらしかつたので以上の事實が想像）

當帝の 薫が女二宮を見た目で浮舟を見られては、實に恥かしく氣の引ける譯のものだと思ふにつけても、北方は氣もそぞろに魂のぬけがらになつてしまつた。

旅の宿り 浮舟の居る三條の隱家。

庭の草も 何もかも物思の種でないものはないから、庭の草までが鬱陶しく感ぜられる所へ。

あづま聲したる 常陸の家來達である。

あやにくだち 無理わざをされた匂宮の事までも、あんなに嫌いたとはいふものの思ひ出されて。

何事にかありけむ あの晩匂宮は何事だつたか、しんみりした口調で長々と仰しやつたつけ。

名殘をかしかりし 匂宮の去られた後までも興味をそゝつた御移香が、今も殘つてゐるやうに思はれて、またその感じにつれて怖しかつた記憶もよみがへる。移香をなつかしんでゐる心持はやがて來るべき匂宮との宿命を物語つてゐるのである。

母君だつやと 母親らしくといふつもりで。湖月抄師說「今までは此母卑下し給へど、今かく浮舟の頼りなき有樣には、母君めきていひあつかふ也、此人の頼もしくあらんとて、あはれに親めきたる文をおこせたると也」—

推し量らる。當帝の御かしづきむすめ（女二宮）を得奉り給へらむ人（薫）の御目移しには、いともいとも恥かしくつつましかるべきものかな、と思ふも、すずろに心地もあくがれにけり。

旅の宿りは、つれづれにて、庭の草もいぶせき（氣持がわるいやうに思はれる上に）心地するに、いやしきあづま聲したる（教養無の田舍者だけが）者どもばかりのみ出で入り、慰めに見るべき前栽の花もなし。うちあばれて（邸内が）、晴れ晴れしからで（くさくさした氣持で）明し暮すに、宮のうへ（中君）の御有樣思ひいづるに、若い（浮舟の）心地に戀しかりけり。あやにくだち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひいでられて、何事（浮舟の心）にかありけむ、いと多くあはれげに宣ひしかな、名殘をかしかりし御移香も、まだ殘りたる心地して、怖ろしかりしも思ひいでらる。母君だつやと、いとあはれげなる文を書きて（北方が）おこせ（浮舟に）給ふ。おろかならず（母は自分を一通りならず不便がつて世話してゐ）心苦しう思ひあつかひ（て下さるらしいのに世話の受けがひもない自分だ）給ふめるに、かひなうもてあつかはれ奉る事と、うち泣かれて、（母文）「いかにつれづれに（そんな陋家に居つては）見ならはぬ心地し給ふらむ。

ひたぶるに　今居るこの場所を全然憂世を離れた別世界と考へる事が出來たら嬉しい事でせう。「ひたぶるに」は「世の中にあらぬ」を修飾する。拾遺雜上の「世の中にあらぬ所も得てしがな年ふりにたるかたち隱さむ」の詞を用ひたもの。

憂き世には　あなたの爲に此世以外の別世界を探し求めてでもあなたの榮華のさまを見るすべがあつてほしい。

ならひにし　大君を思ひ出すのが習慣になつてゐるから。

物忘れせず　大君を忘れず。

こぼちし寢殿　元の寢殿を取拂つてその跡に又新たに寢殿を建てたのである。

さまかへてけるも　改築して舊觀を改めてしまつた事までが。

（浮舟）「つれ〴〵は何か（徒然ぐらゐは何でもありませぬ）。

暫し忍びすぐし給へ（辛抱して居なさい）」とある返りごとに、

心やすくてなむ（却つて気楽です）。

ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所と思はましかば」と

をさなげにいひたるを見るままに（浮舟の返事を）、（母は）ほろ〳〵とうち泣きて、

がう惑はしはふるるやうにもてなす事と（浮舟を斯様に途方にくれさせ路頭に迷ふやうな目にあはせる事よ）、いみじければ、

（母君）憂き世にはあらぬ所を求めても君がさかりを見る由もがな

と、なほ〳〵しき事どもをいひかはしてなむ心をのべける（平凡な歌を詠みかはして悲しい心持を慰めた）。

かの大將殿（薫）は、例の秋深くなりゆく頃、ならひにし事なれば、寢覺々々に物忘れせず、あはれにのみ覺え給ひければ、宇治の御堂造り果てつと聞き給ふに、みづからおはしましたり（宇治へ）。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍らしうおぼゆ。こぼちし寢殿、こたみ（今度）はいと晴れ〴〵しう造りなしたり。昔いと事そぎて（故宮が簡素にして）聖だち給へりしすまひを思ひいづるに、故宮（八宮）も戀しう覺え給ひて、さまかへてけるも口惜しきまで思さるれば、常よりもながめ給ふ（感傷に堪へなくて）。もとありし御しつらひは、いと尊げにて、今片つかたを、女しくこまやかになど、一方ならざりしを、網代屏風（昔からの）何かの荒々しきなど（調度類）は、かの御堂の僧坊の具（今度建立した寺）に殊更になさせ給へり（記念の爲わざと古調度を用ひられた）。山里めきたる具どもを殊更にせさせ給ひて（今度新に造らせられて）、いたうも事そがず、いと清げに故々しく（奥ゆかしく）しつらはれたる遣水のほとりなる岩に居給ひて（薫が）、とみにも立たれず。

もとありし　改築前の寢殿の設備は、故宮の方は持佛をすゑて大層佛殿にし、もう一方の部屋は姫君達の爲に女らしく行きとどいた飾付をするなど、それぞれ趣をかへて一様ではなかつたのだが。

山里めきたる　新築の寢殿に使用する爲に。

絶え果てぬ　昔ながらに流れてゐるこの清水に、なぜ亡き人の面影をだけなりとうつしとめておかなかつた事だらう。

かの人は　あの人は、先頃匂宮邸にと聞いて居つたが、訪ねていきたいけれども、恥かしいやうな氣がしてまだ訪ねては見ませぬ。やはりあなたからはつきり私の意向を傳へて頂きたい。**忌たがふとて**　浮舟は方違の爲にあちこちうろついてゐられるやうです。只今もむさくろしい小家に隱れてゐられるのも氣の毒で、宇治がもう少し近かつたら、そこへ預けて安心してゐられるのですが、途中の山道がけはしくて簡單には出かけかねて居ります。

（薫）絶え果てぬ清水になどか亡き人（八宮や大君）の面影をだに留めざりけむ

涙をのごひつつ辨の尼君の方に立ちより給へれば、（辨は薫を）いと悲しと見奉るに、ただひそみにひそむ（泣顔をする）。長押に假初に居給ひて（薫が）、簾垂のつま（端）を引きあげて物語し給ふ（辨と）。（辨は）几帳に隱ろへて居たり。事（物語）のついでに、（薫）「かの人（浮舟）は、さいつ頃宮にと聞きしを、さすがにうひ〳〵しく覺えてこそ音づれ寄らね。なほこれより傳へ果て給へ」と宣へば、（辨）「一日、かの母君の文侍りき。『忌たがふとて、此處彼處になむあくがれ給ふめる。此頃も、あやしき小家に隱

まろこそ」私だけが昔に變らず
惜分けて訪ねて來るのです。
何ばかりの それもどれ程の固
縁があつてかと思ふと感慨無量
です。

宮にだに　中君の二條院へも。

ともかくも　かれこれと人が聞き傳へて噂をしたらわかるからうが。

愛宕の聖　河海抄は空也上人、花鳥餘情は柿本紀僧正眞濟を引いてゐるが、細流抄の說の如く「一利生方便の爲には山籠りの人も出る事のあると也」の意である。

深き誓ひを　山を出ないといふ深い誓ひを破つて人の願ひを叶へてやられるのこそ尊い事でせう。

例ならず　薫は人を疑ふやうな事のない穏かな人なのだが。

ろへ物し給ふめるもいと心苦しく(う)、すこし近き程ならましかば、そこにわたして心やすかるべきを、あらましき山道に、たはやすくもえ思ひ立たでなむ」と侍りし」と聞ゆ。「人々の斯く(の)・怖ろしくすめる道に、(を)まろこそ古りがたく分け來れ。何ばかりの契りにかと思ふはあはれになむ」とて、例の涙ぐみ給へり。「さらばその心やすからむ所に消息し給へ。みづからやはかしこに出で給はぬ」と宣へば、「仰言を傳へ侍らむことは易し。今更に京を見侍らむことは物憂くて、宮にだに參らぬを」と聞ゆ。「などてか。ともかくも人の聞き傳へばこそあらめ、愛宕の聖だに、時に隨ひては出でずやはありける。深き誓ひ(契り)をやぶりて、人の願ひを滿て給はむこそ尊からめ」と宣へば、「人わたすことも侍らぬに、聞きにくき事もこそ出でまうで・・・くれ」と、苦しげに思ひたれど、「なほよき折なるを」と、例ならず強ひて、「明後日ばかり車奉らむ。その旅の所たづねおき給

ゆめをこがましく　私は決して不都合な仕業など馬鹿げた事はしない積りですよ。

あぶなく　「あぶなからず」の意。薫は輕薄な危險人物ではないのだから、自然物自分の名譽の爲にも外聞などは憚られる事だらう。

近き程にこそ　浮舟の隱家はお邸(薫の三條宮)から近い所です。責めてお手紙でもやつておいて下さい。

ふりはへ　きうでないと私がわざ／＼出しやばつて自分の考へで媒するやうに侍に思はれるのも、今更伊賀姥のやうに見えようかときまりがわるくて。

伊賀たうめ　(細)伊賀たうめ也。國々にある也。たうめとは狐の名也と云々諸抄にみえたり、愛の心は媒を云也、媒のものをいふはきつねの人をばかすがことしといふ(闕)(前略)細、媒をいふとの御說可レ用レ之尼の身として今更に媒にやなり侍らんつゝましきとの儀也(湖月抄)

人の物いひ　人の口といふものはいやなものだから。

出で給ふ　薫は歸京された。

かひなからず　薫が女二宮に對する態度は、宮が薫の北方になされたかひがないといふ程ではなさうだが、敬遠してゐるやうな態度で、あまり親しくなさらないやうだ。

うちより　「聞え給へば」に續く。主上から、普通の人親が娘を心配するやうに、女二宮の事

へ。ゆめをこがましく(う)ひがわざすまじう(く)を」と、ほほゑみて宣へば、煩はしく、いかに思すことならむと思へど、あぶなくあは／＼しからぬ御心ざまなれば、おのづからわが御ためにも人聞きなどはつつみ給ふらむ、と思ひて、「さらば承りぬ。近き程にこそ。御文などを(も)・見せさせ給へかし。ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれ侍らむも、今更に(なる)・伊賀たうめ(のかたこ)・・・にや(と)・つつましくてなむ」と聞ゆ。「文(など)・・は易かるべきを、人の物いひいとうたてあるものなれば、「右大將は、常陸の守のむすめをなむよばふなる」なども取りなしてむをや。その守のぬし、いと荒々しげな(る)・めり」と宣へば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば、出で給ふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ給ひて、宮に御覧ぜさせ給ふ。かひなからずおはしぬべけれど、かしこまりおきたるさまにて、いたうも馴れ聞え給はずぞあめる。うちより、(いと)・・ただの親めきて、

薫を女三宮にお頼みしてあるので薫も女二宮を此上なく尊重してゐられた。**こなたかなたと** 薫は主上からも母宮からも大事にされてゐる。女二宮に忠勤を勵まねばならぬ外に、浮舟に對する厄介な戀心のきざしたのも苦しい事であつた。**宣ひしまだ** 男後日と約束された日の早朝、薫は睦まじく召使つてゐる下部一人と顔見知りのない牛飼とを用意して宇治に遣はされた。**御庄** 薫の領地。

斯くなむ 斯樣々々の仔細でやつて來ました。**しるべのをのこ** 辨に附添つて來た道案内の男を以て取次がせたので。**初瀬の** 浮舟が初瀬詣の時にお供した若女房。**親と聞えける** 辨を父宮のゆかりの人と思ふと親しい感じがするのであらう。**あはれに人知れず、** 心密かに一度お目にかかつて以來は、思ひ出して感慨に耽らない折とてはありませんが。

入道の宮にも聞え給へば、いとやんごとなき方は、限りなく思ひ聞え給へり。こなたかなたとかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むつかしき私の心の添ひたるも、苦しかりけり。

宣ひしまだつとめて、睦まじくおぼす下﨟のさぶらひ一人、顔知らぬ牛飼つくりいでて遣はす。「御庄の者どもの田舍びたる召出でて、附けよ」と宣ふ。必ず出づべく宣へりければ、いとつつましく苦しけれど、うちけさうじつくろひて乗りぬ。野山の氣色を見るにつけても、古へよりの故事ども思ひいでられて、ながめくらしてなむ來著きける。いとつれ〴〵に人目も見えぬ所なれば、心やすく引き入れて、「斯くなむ參り來つる」と、しるべのをのこして言はせたれば、初瀬の供にありし若人出で來ておろす。あやしき所を眺め暮しあかすに、昔語りもしつべき人の來たれば、嬉しくて呼び入れ給ひて。親と聞えける人の御あたりの人と思ふに、睦まじきなるべし。あはれに人知れず、見奉りしのちよりは、思ひいで聞えぬ折なけれど、世の中・かばかり・思ひ給へ捨てたる身にて、かの宮にだに參り侍らぬを、この大將殿の、あやしきまで宣はせしかば、「思ひ給へおこしてなむ」と聞ゆ。君も乳母も、めでたしと見おき聞えてし人の御さまなれば、忘れぬさまに宣ふらむもあはれなれど、俄に斯くおぼしたばかるらむとは思ひも寄らず。宵うち過ぐる程に、「宇治より人まゐれり」とて、門忍びやかにうちたたく。さにやあらむと思へば、辨・あけさせたれば、車をぞ引き入るなる。怪しとおもふに、「尼君にたいめん賜はらむ」とて、この近き御庄の預りの名のりをせさせ給へれば、戸口にゐざり出でたり。雨すこしうちそそぐに、風はいと冷かに吹き入りて、いひ知らずかをりくれば、かうなりけりと、誰も〳〵心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬ程なれば、心さわぎて、「い

この大將殿の あの薫君が、不思議に思はれる程お頼みになりましたので、思ひをつてやつて參りました。**この人の御事**

忘れぬさまに 薫が心に留めてゐるやうに仰しやつて下さるのも嬉しいが、急にかうした計畫があらうとは氣もつかない。浮舟は辨が薫の旨を受けて來た事を知らないのである。

さにやあらむ 辨は薫の使だらうと思つたので。

この近き御庄の 薫は自分の名を隱して宇治附近の領地の支配人の名をいはせたので。**かうなりけり** さては薫であつたのだ。**御けはひをかしければ** 辨はおもしろく思つて取次いだのである。宿家である。**用意もなく** 隱家では薫が訪ねて來られようとはまだ豫期しない時なので、用意をしてゐないで、むさくろしくしてゐたので。

いかに聞ゆべき　何と御返事申上げたものか。

しかおはしまし　あのやうに御出で下さいましたのですもの、其儘おかへし申す譯には參りませぬ。

かの殿にこそ　母君方へこの由を内々お知らせ申上げませう、近所の事ですから。

若き御どち　お若い同志がお話をなさるのは、直によい仲になられる譯のものでもないのですもの。それに薫は若いにも似合はず不思議な程氣のゆつくりした考へ深いお方ですから。

宿直人　この隣家の番人。

夜行うち　夜まはり。家。

巽　東南。

この人の御車　この御車は門内に引入れるんなら引入れて門をしめて下さい。「人の御車」で一語。

斯かる人の供人　かうした供人といふものは氣のきかぬものだ。「人の供人」で一語。

佐野のわたりに　萬葉三・新勅撰旅「苦しくも降りくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」

かなる事にかあらむ」といひあへり。「心やすき所にて、月頃の思ひあまる事も聞えさせむとてなむ」と言はせ給へり。いかに聞ゆべき事にかと、君は苦しげに思ひて居給へれば、乳母・・見苦しがりて、「しかおはしましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそ、斯くなむと忍びて聞えめ、近き程なれば」といふ。「・・うひうひしく、などてかさはあらむ。若き御・・どち物聞え給はむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを。・・怪しきまで心のどかに物深うおはする君なれば、よも人の・許しなくて打解け給はじ」などいふ程・、雨やや降りくれば、空はいと暗し。宿直人の・怪しき聲したる、夜行うちして、「・やかの巽の隅のくづれいと危し。この、人の御車入るべくば、引き入れて御門さしてよ。斯かる、人の・供人こそ、心はうたてあれ」などいひあへるも、むくつけく聞きならはぬ心地し給ふ。「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさ

さしとむる　この歌は催馬樂東屋「東屋のまやのあまりのその雨そそぎ、われ立ち濡れぬその殿戸開かせ」云々」によつた歌である。葎が繁つてゐて出入の路を閉ぢふさいでゐるのか、雨だれ落ちで待たされてゐる時間が餘り長い。アの頭韻で巧に調子がとつてある。

とざまかうざまに　何とか口實を設けて薫を其儘おかへしするすべもないので。

飛騨のたくみ　この隔ての遣戸を造つた大工が恨めしい。飛騨から多くの名匠が出たので飛騨たくみは大工の總名となつた。

かの人形の願ひも　大君の代りに浮舟をといふやうな豫ての希望も仰しやらずに。

語らひ給ふべき　自分は直接聞かないが多分、と地の文。

いとあはれと　薫は浮舟を大層可愛く思召した。

程もなう明けぬる　古今戀三「長しとも思ひぞ果てぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば」

びて、さとびたる簀子の端つかたに居給へり。

「さしとむる葎や繁き東屋のあまり程經る雨そそぎかな

と、うち拂ひ給へる追風、いとかたはなるまで、あづま・の里人も驚きぬべし。

とざまかうざまに聞えのがれむ方・なければ、南の廂に御座引きつくろひて入れ奉る。心やすく・もたいめんし給はぬを、これかれ押し出でたり。遣戸といふものさして、聊かあけたれば、「飛騨のたくみも恨めしき隔てかな。斯かるものの外には、まだ居ならはず」と愁へ給ひて、いかがし給ひけむ、入り給ひぬ。かの人形の願ひ・・も宣はで、ただ、「覺えなき、物のはざまより見しより、すずろに戀しきこと、さるべきにやあらむ、あやしきまで・ぞ思ひ聞ゆる」とぞ語らひ給ふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見劣りもせず、いとあはれと思しけり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路

いかにとか 何といつてゐるのか聞いたこともない賣り物を呼ぶ聲がして。かやうの朝ぼらけに 今日のやうなしらじら明けの薄暗い中で見ると頭に物を載せた物賣どもが鬼のやうに見えるといつてゐるのがお耳にはひる、それもかうした蓬の宿で丸寝をした事のない薫には面白くも感じられた。

九月にも 今は結婚を忌むといふ九月だのに、いやな事だ、どうしたといふのだらう。

おのづから 薫君に自然何かお考があるのでせう。氣づかひなさるな。九月といつても明日九月の節に入るのだと聞いて居ります。節分は季節の變り目で立春立夏立秋立冬の前。こたみは 今回は私は浮舟におそばで參りますまい。宮のうへ聞召さむ 中君の聞召す手前もありますのに、こつそり行つたり來たりするのもいやですし。私は中君をお訪ねしますの意。

近きところに、おほどれたる聲して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うちむれてゆくなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物いただきたる者の、鬼のやうなるぞかしと聞き給ふも、斯かる蓬のまろねにならひ給はぬ心地に、をかしうもありけり。宿直人も門あけて出づるおとす。おのおの入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して、車、妻戸に寄せさせ給ふ。かき抱きて乗せ給ひつ。誰も誰も、怪しうあへなき事を思ひさわぎて、「九月にもありけるを、心憂のわざや。いかにしつる事ぞ」と歎けば、尼君も、いといとほしく、思ひの外なる事どもなれど、「おのづから思すやうあらむ。うしろめたうな思ひ給ひそ。九月は明日こそ節分と聞きしか」といひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君、「こたみはえ參らじ。宮のうへ聞召さむこともあるに、忍びて行き返り侍らむもいとうたてなむ」と聞ゆれど、まだきこの事を聞かせ奉らむも、心

それはのちにも その事ならあとで中君におわびしてもすむ事でせう。宇治に行つても勝手知りのあなたが居なくては、たよりなくて困る。人一人や 誰でもよいから一人浮舟のお供をしなければなりませぬか。

近き程にや 近所に行くのかと思つたらさうではなくて。法性寺 拾芥抄下諸寺部に二十一寺の一で、貞信公の創建で九條河原にあつた。

いとあさましきに あまりの事にぼんやりして。石高きわたりは 高い石のごろごろして居る所は車ががたがたして苦しいものだ。車のなかに 車の前部に薫と浮舟、後部に辨と侍従と、その間を羅で假に仕切つたのである。

恥かしく覚え給ひて、「それはのちにも罪さり申し給ひてむ。かしこにもしるべなくてはたづきなき所を」とせめて宣ふ。「人一人や侍るべき」と宣へば、この君に添ひたる侍従と乗りぬ。乳母、尼君の供なりし童なども、おくれて、いと怪しき心地して居たり。近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛など引きかふべき心まうけし給へり。河原過ぎ、法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き人は、いとほのかに見奉りて、めで聞えて、すずろに戀ひ奉るに、世の中のつつましさも覚えず。君ぞ、いとあさましきに、物も覚えで、うつぶし臥したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱き給へり。羅の細長を、車のなかに引き隔てたれば、花やかにさし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなく覚ゆるにつけて、故姫君の御供にこそ、かやうにても見奉りつべかりしか、あり經れば、思ひか

いと憎く　辨の態度を大層憎く思つて。

物の初めに　このめでたい結婚の折に尼姿で同車するのも不吉と思ふのに、なぜからめそ〳〵して居るだらうと。やがて浮舟が出家する事を暗示するのである。

おろそかに　老人といふものは何といふ事なしに涙もろいものだと、侍從は委しい事情を知らないから、一通りの涙と思ふのであつた。

袖のかさなり　直衣の袖と紅の下著の袖と重なつた儘長々と下簾の外に垂れて居つたのが。

御直衣の花の　衣裳が濡つてゐるので直衣の地文の花が紅の下著にうつつて著しく目立つてゐるのを高い坂の所で見つけて。

形見ぞと　浮舟を大君の形見と思つて見るにつけても懸し涙に袖が濡れる。

心にもあらず　物の初であるので涙などいふ事は言忌すべきであるのに。

心ゆく道に　この嬉しい旅に涙でもあるまいと。

けぬ事をも見るかな、と悲しう覺えて、つつむとすれどうちひそみつつ泣くを、・・侍從はいと憎く、物の初めに、かたち異にて乘り添ひたるをだに思ふに、なぞ斯くいやめなると、憎く・をこにも思ふ。老いたるものは、すずろに涙もろにあるものぞと、おろそかにうち思ふなりけり。君も、見る人は憎からねど・、空の氣色につけても、きし方の戀しさまさりて、山深く入るままに・、霧立ちわたる心地し給ふ。うちながめて寄り居給へる、袖のかさなりながら長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御ぞの紅なるに、御直衣の花・・の、おどろ〳〵しううつりたるを、おとしがけの高き所に見つけて引き入れ給ふ。

「形見ぞと見るにつけても朝露の所せきまで濡るる袖かな」

と、心にもあらず獨りごち給ふを聞きて、いとどしぼるばかり尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、怪しう見苦しき世かな、「心ゆく道に、いとむつかしき事添ひたる心地す。忍びがたげなる

さすがに　悲しさの中にも浮舟の手前を斟酌して、紛らはしに浮舟に詞をかけたのである。

あまたの年頃　長年この道を幾度も〳〵往復した事を思ふと、何がなし感慨に堪へない。

をかしき程に　風情のある程度に扇で顔を隠しながら、恥かしさうにして外を見てゐられる目付などは。

おいらかに　おつとりしてあまり大やうすぎる點が頼りないやうな感じがする。

行くかたなき　古今戀一「わが戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

あはれ　あゝ、大君の亡靈が鼓に宿つて見てゐられる事だらう私は誰故にかうして氣もそぞろにうろつきあるいてゐるのでもない皆大君戀しさの故なのだ。

すこし心しらひて　浮舟を休息させる爲に氣をきかして。

鼻ずすりを聞き給ひて、我も忍びやかにうちかみ給ひて、さすが・に・いかが思ふらむといとほしければ、「あまたの年頃、この道を行きかふ度かさなるを思ふに、そこはかとなく物あはれなるかな。すこし起きあがりて、この山の色をも見給へ。いとうもれたりや」と、強ひてかき起し給へば、をかしき程にさし隱して、つつましげに見いだしたるまみなどは、いとよく思ひいでらるれど、おいらかに、あまりおほどき過ぎたるぞ心もとなかめる。いといたうこめいたるものから、用意の淺からず物し給ひしはやと、なほ行くかたなき悲しさは、むなしき空にも滿ちぬべかめり。おはし著きて、・・・・・・あはれ、亡き魂やどりて見給ふらむ、誰によりて斯くすずろに惑ひありくものにもあらなくに、と思ひつづけ給ひて、おりては、・・すこし心しらひ・・て・・立去り給へり。女は、母君の思ひ給はむことなど、いと歎

かしけれど、・・・艶なるさまに心深くあはれに語らひ給ふにも、思ひ慰めて出で給ひぬ。尼君はこなたに殊更にありて、廊にぞ寄するを、わざと思ふべきすまひにもあらぬを、用意こそあまりなれと見給ふ。御庄より、例の人々さわがしきまで参り集まる。女・の御臺・・は、尼君の方より・まゐる。道は繁かりつれど、この有様はいと晴れ〲し・。河の氣色も山の色も、もてはやしたる造りざまを見いだして、日頃のいぶせさ・慰みぬる・心地すれど、いかにもてなし給はむとするにかと、浮きて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。「なだなりあはぬ佛の御飾りなど見給へおきて、今日よろしき日なりければ、急ぎ物し侍りて、亂り心地のなやましきに、物忌なりけるを思ひ給へいでてなむ、今日明日ここにてつつしみ侍るべき」など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。打解けたる御有樣今すこしをかしくて、入りおはしたるも・

艶なるさまに　薫が花やかに愛情をこめて話されるので。
尼君は　……わざ〱と遠慮して車を廊に寄せておりたので。
わざと思ふべき　わざ〱そんなに御用心のいる住居でもないのにと……。
例の人々　例によつて支配人達がうるさい程集まつてくる。
女の御臺は　浮舟のお膳は尼君の方から差上げる。
この有様は　この御殿は……として大變明々しい。
河の氣色も　この御殿は宇治の山河の景色が引立つて見えるやうな構へでであるが、さういふ構への御殿からあたりの景色を眺めて……
まだなりあはぬ　佛前の御裝飾などがまだ十分整頓して居らぬ……を先に見ておいたので……
打解けたる　……してゐられるよりも打寛ろいでゐられる薫の御樣子が更に一段と引きつけるものがあつて。

恥かしけれど、もて隠すべくもあらで居給へり。女の御裝束など、いろ〱によくと思ひてしかさねたれど、すこし田舍びたることもうちまじりてぞ、昔のいとなえばみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひいでられて。髪の裾のをかしげさなどは、こま〲とあてなり。宮の御ぐしのいみじくめでたきにも劣るまじかりけり、と見給ふ。かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、只今ものものしげにて、かの宮に迎へすゑむも、音聞きびんなかるべし、さりとて、これかれあるつらにて、おほざうにまじらはせむは本意なからむ、暫しここに隠してあらむ、と思ふも、見ずばさう〲しかるべく、あはれに覺え給へば、おろかならず語らひ暮し給ふ。故宮の御事も宣ひいでて、昔物語、をかしうこまやかにいひたはぶれ給へど、只いとつつましげにて、ひたみちに恥ぢたるを、さう〲しう思す。あやまりても、かう心もとなきはいとよし、敎へつつ

いろ〱によくと　さま〲の色合のを配合のよいやうに仕立てかさねてはあるが、多少垢抜けのしない點もあつて。東國に住み馴れた母君の仕業故。
思ひいでられて　忘れられないといふやうな言葉が省かれてある。
かつは　浮舟の樣子を見て色々の惑が湧いてくる一方、その處置について、あれこれと思案するのである。「かつは……と思ふも」と續くのである。
これかれある　女三宮方に奉仕へてゐる女房のなみで。
見ずは　京と宇治と離れて居つて。
あやまりても　罷り間違つてもこんな風に手答へのないのは大變結構だ、ため直して連れ添つてゆかう。

形代不用ならまし　大君の身代にはなるまい。

琴箏　きんは七絃、箏は十三絃。

斯かることはたまして　それかといって、こんな事は一層出來ないだらう。

おどろ〳〵しく　徒らに大げさらしい彈き振りではなかったが、上品に面白くて人の心を動かす音色であつた。

すこしあはれは　も少し趣味が表はれたでせうに。

添ひ臥したる　脇息にもたれて横向いてゐる浮舟の顔様は。

つも見てむ、田舎びたるざれ心もてつけて、しな〴〵しからず、はやりかならましかばしも、形代不用ならまし、と思ひなほし給ふ。こゝにありける琴、箏のこと召しいでて、斯かることはたましてえせじかし、と口惜しければ、獨りしらべて、みやうせ給ひてのち、こゝにて斯かるものにいと久しう手觸れざりつかし、と珍らしく我ながら覺えて、いとなつかしくまさぐりつつ眺め給ふに、月さしいでぬ。宮の御琴の聲の、おどろ〳〵しくはあらで、いとをかし・、あはれに彈き給ひしはや、と思しいでて、「昔誰も〳〵おはせし世に、こゝに生ひ出で給へらましかば、今すこしあはれはまさりなまし。みこの御有様は、よその人だにあはれに戀しくこそ思ひいでられ給へ。などて、さる所には年頃經給ひしぞ」・と宣へば、いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはら目、いと限なう白うて、なまめいたる額髪のひまなど、いとよく思ひいでられてあはれ

まいてかやうの事は　一般の躾は申すに及ばず音樂なども薫の北方として相應しい程度に仕込んでやらう。

これはすこし　琴は少し稽古されたことがありますか。

あはれわがつまと　東國育ちのあなただから、いくら何でも吾妻琴といふものは彈かれた事でせう。吾妻琴は大和琴、和琴も同じ物。

その大和言葉だに　吾妻琴を大和琴ともいふから、和歌のあや。歌を詠むのさへ似合はしからぬ生活をしつけて來ましたから、まして東琴などは。

楚王の臺の　朗詠上冬「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」浮舟が白扇をまさぐつてゐたところから、ふと此句を誦じたのである。

かの弓をのみ　侍從は武ばかりを事とする東國に住み馴れた事故。

扇の色も　薫が吟じられた右の句は、漢の成帝の宮女班女が寵衰へて捨てられた事を白扇が夏珍重されて秋風に捨てられるのに比して詠んだものであるに、侍從は其故事を知らずに只管感心してゐるのは氣がきかないのだらう。

事こそあれ　吟誦すべき句もあらうに自分ながら妙な句を誦つたものだと。これも例の前表である。

なり。まいてかやうの事はつきなからず教へなさばや、と思して、「これはすこしほのめい給ひたりや。あはれわがつまといふこと・・・は、さりとも手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。「その大和言・葉だにつきなく・・ならひにければ、ましてこれは」といふ。いとかたはに心おくれたりとは見えず。こゝにおきて、え思ふままにもこざらむ事を思すが、今より苦しきは、なのめには思さぬなるべし。きんはおしやりて、「楚王の臺のうへの夜の琴の聲」とずんじ給へるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍從も聞き居たりけり。さるは扇の色も心おきつべき閨の古へをば知らねば、偏へにめで聞ゆるぞ、おくれたるなめるかし。事こそあれ、怪しくもいひ・・つるかな、と思す。尼君の方より菓子まゐれり。箱の蓋に、紅葉蔦など折り敷きて、故なからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれ

菓子急ぎ　薫の樣子が果物に早く手を出したがつてゐるやうに見えた。

宿木は　宿木巻の薫の歌「宿木と思ひ出でずば木のもとの旅寝もいかに淋しからまし」を受けた歌。大君と浮舟と人は違つてゐるけれども、今こゝに來てゐる薫は昔ながらの薫だから昔の事が思ひ出されるの意。

里の名も　宇治の里の名も即ち昔世を憂く思ふといふ里の名も昔と變らず、大君を失つた闇の中にさした月影即ち自分も昔のまゝに（昔は大君に容れられなかつた）世を憂く思つてゐるの義。「里の名も」とあるのだから、これと併せ指すものが無ければならないのに、「この「も」を解く事が忘れてゐる。」諸說皆誤である。

わざと　わざ〳〵返歌する積りでなしに口ずさまれた歌を侍從が辨に取次いだとか。

ば、目とどめ給ふ程に、菓子急ぎにぞ見えける。

辨　宿木は色かはりぬる秋なれど昔覺えてすめる月かな

と、ふるめかしく書きたるを、恥かしくもあはれにも思されて、

薫　里の名も昔ながらに見し人のおもがはりせる閨の月影

わざと返りごととはなくて宣ふを、侍從なむ傳へけるとぞ。

宮　匂宮今年二十八。
なほ　「思し忘るる世なし」を修飾する。
ほのかなりし　二條院の對での事。
女君をも　中君に對しても、斯様につまらぬ事の爲に、かうした方面（女に關する）の事で無闇に嫉妬なさる。浮舟を中君が隱したと邪推されたからである。
思はずに心憂し　こんなでないと思つてゐたのに、なさけない女だ。
やんごとなきさまに　薫が本妻の待遇はなさらないにしても、相當深く愛して隱しておかれた人なのに、餘計な口をきいてお知らせしたならば、宮は其儘聞き流しになさる筈の御氣質でもないやうだ。
さぶらふ人の　匂宮は女房達の中でも一寸手をつけて見たいと思ひ立たれた總ての女は、宮などのおいでになるやうな家でない所までもつけまはされると、いふ不體裁な御性質のだから、あれ程長い間思ひつめてゐられる浮舟に對して、まして必ず見苦しい事件を引起される事だらう。

宮、なほかのほのかなりし夕べを思し忘るる世なし。こと〳〵しき程にはあるまじげなりしを、人がらのまめやかにをかしうもありしかなと、・あだなる御心には、口惜しくてやみにし事と、ねたう思さるるままに、女君をも、かうはかなき事ゆゑ、あながちに斯かるすぢの物憎みし給ひけり。「思はずに心憂し」と、はづかしめ怨み聞え給ふ折々は、いと苦しうて、ありのままにや聞えてまし、と思せど、やんごとなきさまにはもてなし給はざなれど、あさはかならぬ方に心とどめて人の隱しおき給へる人を、物いひさがなく聞えいでたらむにも、さて聞きすぐし給ふべき御心ざまにもあらざめり、さぶらふ人のなかにも、はかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬる限りは、あるまじき里・までも尋ね・させ給ふ御さまよからぬ本性なるに、さばかり月日を經ておぼししむるあたりは、まして必ず見苦しきこと取りいで給ひてむ、ほかより傳へ聞き給はむはいかがはせ

防ぐべき人の　匂宮といふ人は一旦思ひ立たれた以上、他から思ひとまらせる事の出來る人ではないから、結局浮舟に本意を遂げられる事だらう。

よその人よりは　さうなれば自分は浮舟とは姉妹の事故、他人よりは一層外聞わるい目を見るだらう。

とてもかくても　どうあらうとも、自分の怠慢から破滅を招くやうな事はすまい。

いとほしながら　迷惑に思ひながらも。

おしこめて　心の中に收めて嫉妬してゐる世間普通の女になつてゐられた。

所せき身の程を　窮屈な御身の上だもの、適當な便宜がなくては手輕に通つて行ける道でない、神の禁止にあふよりももつとどうにもならぬ事情で通ふ事が出來なかつた。（伊勢物語「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」）

今いとよく　やがて浮舟を好遇する積りだ、あそこにおくのはもと〵〵宇治に行つた時の慰めにもとの考があつての事だもの。少し日數のかゝりさうな用事を拵へて、ゆつくり行つて見よう。

やう〵〵　「もどきあるまじく」にかゝる。漸次世間の非難を緩和させて。

む、いづかたざまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき、人の御心ざまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、わが怠りにてはもてそこなはじ、と思ひかへし給ひつつ、いとほしながらも聞えいで給はず、おしこめて物怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。

かの人は、たとしへなくのどかに思しおきてて、待ちどほなりと思ふらむ・・と、心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所せき身の程を、さるべきついでなくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、今いとよくもてなさ・・むとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日數も經ぬべき事ども作りいでて、のどやかに行きても見む、さて暫しは人の知るまじき住みどころして、やう〵〵さる方にかの心をものどめおき・・、わが爲にも人のもどきあるまじく、

なのめにてこそ　人目に立たぬやうにして我物にするが上策だらう。

俄に何人ぞ　薫は急に女を迎へられたが、あれは何人だらう、いつからの關係だらう。

又宮の御方の　又浮舟を京に引取つて八宮の時からの宇治をきつぱり捨てて昔の事を忘れたやうなと思ひすつるも、中君の手前本意ないやうな氣がする、などと冷靜な態度を取られるのも、例の暢氣すぎる薫の心故であらう。

すこし暇なき　薫は官位も進んで、今迄よりは多少政務繁忙にはなられたが、中君に對しては今も怠らず好意を寄せられる事昔と同樣である。

見奉る人も　それを見る女房も薫の親切を怪しむ者もあるが。

これこそは　薫のあの態度こそは、人情に厚い例でもあり、またいつまでも愛情の（大君に對して）衰へない、のみならずそれが相手の亡くなつた後までもこまやかな例もあると思ふと少なからず心を動かされる。

思はずなりける　自分は意外に不運な身の上であつたのだ、姉君のお考へに背いて薫君の妻にもならずに、かういつも心配して氣兼しなければならぬ（浮舟が實妹だから前文にあるやうに遠慮しなければならぬ）匂宮に身をまかせそめた事であるよ。

「物思ひ憚かる」　湖月抄に「物思はゝかる」とあつて「物思はしかる」とも讀みうる字體である。

なのめにてこそよからめ、俄に、何人ぞ、いつよりなど、聞きとがめられむも物さわがしく、初めの心にたがふべし、又宮の御方の聞きおぼさむことも、もとの所をきは〵〵しうゐて離れ・・、昔を忘れがほならむも、いと本意なし、など思ししづむるも、例のいとのどけさ過ぎたる心からなるべし。わたすべき所思しまうけて、忍びてぞ造らせ給ひける。すこし暇なきやうにもなり給ひにたれど、宮の御方には、なほたゆみなく心寄せ仕うまつり給ふこと同じやうなり。見奉る人も、あやしきまで思へ・・ど、世の中をやう〵〵おぼし知り、人の有樣を見聞き給ふままに、これこそは誠に昔を忘れぬ心ながさの名殘さへ淺からぬためしなめれと、あはれもすくなからず。ねびまさり給ふままに、人がらも世のおぼえも、さま殊に物し給へば、宮の御心のあまり頼もしげなき時々は、思はずなりける宿世かな、故姫君のおぼしおきてしままにもあらで、かく物思ひ憚かるべ

なほ〳〵しき 普通の平人こそさうした縁故があるといふのでその縁をたよつて親しみを續けるといふに相應しからう。(宮家の縁によつて出世を計らうとすからである)

なか〳〵 なまなか斯様に身分がいだけに並はづれた親しい交際ぶりであるなどと。

かぎりある程に 親しくするにも際限のある身分で。薫の身分ではこれ〳〵の親しみが最高の親しみであるのにそれを超えての意。

さりとても 中君の方でさうした態度ではあつても、薫はいつまでも昔の儘の心持が變らずに中君に好意を寄せてゐられたのであつた。

宮も 匂宮も、浮氣の御性質こそ氣に入らぬ點もあるが。

ほかには 中君以外の人の腹にはこんな若君は産れないのではないかと中君を第一夫人といふ心持で氣のはらない親しみのある點では六の君よりも一段上に置いて待遇されるので、中君も今迄よりは多少落着いた氣持で暮してゐられる。

正月の一日 匂宮二十八。若君二つ。

き方にしもかかりそめけむよ、と思す折々多くなむ。されど對(薫に)面し給ふことは難し。年月もあまり昔を隔てゆき、うち〳〵の(それから長い年月がたつてあまり昔の事になつた爲に中君未婚前の内々の深い事情を知らぬ人は)御心を深う知らぬ人は、なほ〳〵しき直人(ただびと)・(と)こそ、さばかりのゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬにつき〳〵(は)しけれ、なか〳〵、かう限りある程に、例にたがひたる有樣ぞ、(・・・・・・)など言ひ思はむも、つつましければ(中君は世間例を憚はれるので)、宮の絶えずおぼし疑ひたる(薫との間を)も、(に)いよ〳〵(中君はます〳〵)苦しうおぼし憚り給ひつつ、おのづから(中君の薫に對する態度が)うときさまになりゆくを、さりとても絶えず同じ心の變り給はぬなりけり。宮(匂宮)も、あだなる御本性こそ見ま憂き(中君にとつて)ふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすげ(かほゆく)給ふままに、ほかには斯かる人も出でくまじきにやと、やんごとなきものに思して、打解けなつかしき方には人にまさり(中君を六の君に)てもてなし給へば、ありしよりは、すこし物思ひしづまりて過ぐし給ふ。

正月(むつき)の一日過ぎたる頃わたり(匂宮が中君方へ)給ひて、若君の年まさり給へるを、

包み文 書狀の一形式。藥物などを包むやうに薄紙に包んで細封にしてある文で艶書などは包み文にするのが常である。

鬚籠 竹などを編み殘した端の鬚の如くなる籠。

立文 書狀の一形式。本紙を禮紙で包み、その上を更に白紙で包んで、その上下を裏へ折りこむ。

大輔のおとど 中君の女房。

もて煩ひ侍りつるを 使者がどうして渡してよいやら分らなくて、持ち惱んでゐましたのを。

例のお前にて 例によつて中君の御前で御覧にならうと思召すことと存じまして私が受取りました。

金を造りて この鬚籠は銅で拵へて鍍金で彩つた物であつた。

我もてはやしてむ 私もその鬚籠の品を稱美しよう。

大輔のさりげなく 薫が自分のらしく見えないやうによそほつた文かも知れぬ、宇治からというてよこしたのもそれらしいと感づかれて。

さすがにそれならむ それが本當に薫からの文であつたらと思召すとさすがに匂宮はきまりがわるい。きまりがわるいから一應一「あけて見むよ云々」とことわられたのである。

もてあそびうつくしみ(愛してゐられる)給ふ晝つかた、小さき童、緑の薄樣なる包み文の大きやかなるに、小さき鬚籠(ひげこ)を小松につけたる、又すく〳〵(無趣向な)しき立文(たてぶみ)取り添へて、あぶなく(無考へにも)走り參る。女君(中君)に奉れば、宮(匂宮)、「それはいづくよりぞ」と宣ふ。(童)「宇治より大輔のおとどにとて、もて煩ひ侍りつるを、例のお前にてぞ御覧ぜむとて、取り侍りぬる」といふも、いとあわただしき氣色にて、(童)「この籠は、金(かね)を造りて、色どりたる籠(こ)なりけり。松もいとよう似て(實物そのまゝ)造りたる枝ぞとよ」と、ゑみて(童が)いひつづくれば、宮も笑ひ給ひて、(匂)「いで、我ももてはやしてむ」と召すを、女君(中君)、いと傍痛く(浮舟の文を見られるのが恥)おぼして(かしくて)、(中君)「文は大輔がり(へ)・(とこ)・やれ」と宣ふ御顔の赤みたれば、宮、大將のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきづきし、と思し寄りて、この文を取り給ひつ。さすがに(匂宮の心)、それならむ時に、と思すに、いとまばゆければ、(匂)「あけて見むよ。怨(ゑん)じやし(恨めしく思召すか)給はむとする」と宣へば、(中君)「見苦しう、何かは、その

女どちのなかに書きかよはしたらむ打解け文をば御覽ぜむ」と宣ふが、さわがぬ氣色なれば、「さば見むよ。女の文がきはいかがある」とてあけ給へれば、いと若やかなる手にて、「おぼつかなくて年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ、峯の霞も絶間なくて」とて、端に、「これ・若君のお前に。あやしう侍るめれど」と書きたり。殊にらう〳〵じき節も見えねど、覺えなきを、御目立ててこの立文を見給へば、げに女の手にて、「年改まりて・何事かさぶらふ。御わたくしにも、いかに頼もしき御喜び多く侍らむ。こゝには、いとめでたき御すまひの心深きを、なほふさはしからず見奉る。斯くてのみつく〴〵と眺めさせ給ふよりは、時々はわたりまゐらせ給ひて、御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、つつましく怖ろしきものに思し懲りてなむ、物憂きことに歎かせ給ふめる。若君のお前にとて、卯槌まゐらせ給ふ。大きお前の御覽ぜざらむ程に御覽ぜさせ給へ」

おぼつかなくて　御無沙汰の間に年も暮れてしまひました。
山里のいぶせさこそ　宇治の鬱陶しさは、心のみか峯の霞も晴れる間がなくて。
端に　文の端に。
殊にらう〳〵じき　格別巧者な所もない手紙だが、誰の手紙か見當がつかないので、宮は不審の目を立てて。
年改まりて　新年御機嫌よろしう。以下右近から大輔への文の詞。
御わたくしにも　中君におかせられても。
こゝには　當方はよく注意の行屆いた結構な御住居ではございますが、それでもやはり御親切にそぐはないやうに存ぜられます。
つつましく怖ろしき　匂宮の事ゆゑに。
卯槌　玉・犀角・象牙又は桃の木を四角に作り五色の長い組糸をさげた物で、惡鬼を避けるまじなひとして正月初卯の日に糸所から獻進する。

と・なむ・こま〳〵と言忌もえしあへず、物歎かしげなるさまのかたくなしげなるも、打返し〳〵怪しと御覽じて、「今は宣へかし。たがぞ」と宣へば、「昔かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、此頃かしこに侍るとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、おしなべてつかうまつるとは見えぬ文がきを、と心得給ふに、かの、「煩はしきこと」とあるに思しあはせつ。卯槌をかしう、つれ〴〵なりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山橘造りてつらぬき添へたる枝に、

「まだふりぬ物にはあれど君が爲深き心にまつと知らなむ

と、殊なることなきを、かの思ひわたる人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、「返りごとし給へ。なさけなし。隱い給ふべき文にもあらざめるを、」など御氣色のあしき。まかりなむよ」とて立ち給ひぬ。女君、少將などして、「いとほしくもありつるかな。」をさなき人の取りつらむを、人はいかでか見ざ

言忌もえしあへず　めでたい新年に不吉な言葉も避けずに。
昔かの山里に　以前に宇治の山莊に仕へて居つた人の娘で、仔細あつて彼處に居るのだとの事です。
おしなべて　並々の奉公人の手紙とは思はれぬ書きぶりなるものを、と。
煩はしきこと　浮舟の手紙中に煩はしい事がある故中君方に行く事を厭ふといふ意味が書いてあるので、さては浮舟かと思ひ當られた。
卯槌　正月上卯日に内裏に獻るが本で、一般民間にも贈物にしたるものらしい。湖月抄（抄）卯杖卯槌大かたは同じやうにて聊其姿もかはれるなべし、にて糸所より獻るは槌也、糸などにてかざりたる物也、何も同時に獻ずるとは見えたり。精魅をおひ邪氣をはらふ事はおなしき歟。
またぶり　椏極。二股の枝。
山橘造りて　作り物の藪柑子を付けてある二股の松の枝を卯槌につき通して添へてあつて、その枝に歌が結びつけてある。
まだふりぬ　この木はまだ古くならぬ若木ですが、若君の爲に心から千年の長壽を期待してゐると御承知願ひます。まだ古りぬにまたぶりを響かしてある。
なさけなし　返歌しなくては。
隱い給ふべき　秘密の手紙ではないのに、私が見たからといつて何で機嫌がわるいのです。もう降りませう。
をさなき人の　この手紙は童女

つるぞ」など、忍びて宣ふ。「見給へましかば、いかでかは參らせまし。すべてこの子は、心地なうさしすぐして侍り。生ひ先見えて人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、「あなかま。をさなき人な腹立てそ」と宣ふ。こぞの冬、人の參らせたる童の、顏はいとうつくしかりければ、宮もいとらうたくし給ふなりけり。

わが御方におはしまして、怪しうもあるかな、宇治に大將の通ひ給ふことは、年頃絶えずと聞くなかにも、『忍びて夜とまり給ふ時もあり』と人のいひしを、いとあまりなる人の形見とて、さるまじき所に旅寢し給ふらむ事と思ひつるは、かやうの人隱しおき給へるなるべし、と思し得ることもありて、御書のことにつけて使ひ給ふ大內記なる人の、かの殿に親しきたよりを思しいでて、御前に召す。參れり。韻塞すべきに、集どもえり出でて、こなたなる厨子に積むべきことなど宣はせて、右

が受取つたのだらうに、なぜ女房達は知らなかつたのですか。

この子　文を受取つた童女。

生ひ先見えて　末はさこそとおもはれるやうに大やうなのが子どもは奥ゆかしいものです。

こぞの冬　以下この童女の經歴を說明するのである。

わが御方に　匂宮がわが居間におかへりになつて。

いとあまりなる　いくら大君の形見の地だからとて、泊るべからざる所へ泊るのはあまりだと思つて居つたが、それはかうした愛人を隱しておかれたのだらう、と領かれる事もあつて。

大內記　大內記式部大輔なる人で道定と名のる男である。

韻塞　詩戲。

大將の宇治へいますること、なほ絶え果てずや。寺をこそいとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」と宣へば、「いとかしこくいかめしく造られて、不斷の三昧堂など、いと尊くおきてられたりとなむ聞き給ふる。通ひ給ふことは、こぞの秋ごろよりは、ありしよりもしばしば物し給ふなり。下の人々の忍びて申ししは、「女をなむ隱しすゑさせ給へる。けしうはあらず思す人なるべし。あのわたりに領じ給ふ所々の人、皆仰せにて參り仕うまつる、宿直にさしあてなどしつつ、京よりも、いと忍びてさるべき事など問はせ給ふ。いかなるさいはひ人の、さすがに心細くて居給へるならむ、となむ、ただこの十二月の頃ほひ申す」と聞き給へし」と聞ゆ。いと嬉しくも聞きつるかな、とおもほして、「たしかにその人とはいはずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひ給ふと聞きし」。尼は廊になむ住み侍りける。この人は、今建てられたる・になむ、きたなげなき女

いかでか　ぜひとも見たいものだ。

不斷の三昧堂　常住不斷の念佛堂。

下の人々　下々の者ども。

けしうはあらず　薫が憎からず思召す女でございませう。

あのわたりに　宇治界隈の薫の領地の支配人で薫の命を奉じて山莊に參り御用をつとめてゐる人達を宿直に當らせたりなどして。

京よりも　薫の本邸からも內密に然るべき面倒は見てゐられます。

さすがに　幸福ではありながらさすがに不自由な淋しい山住ひをしてゐるのだらう。

たしかに　はつきり誰それとその女の名を語らなかつたか。

今建てられたる　新築の寢殿に。

口惜しからぬ　相當立派な生活をして居ります。

何の心ありて　一體薫はどういふ料簡で、どういふ身分の女をそんなにもてかこつておかれるのだらう。

猶いと氣色ありて　薫はやはり一癖ある人なみはづれた人だ。

げに　成程夕霧のいはれる通り薫はなぜあゝも佛いぢりにこそ〳〵あるきまはつて居るのだらう。今も猶大君の形見の宇治を忘れかねてゐると聞いて居つたのだが、實はかうした内證事があつたのだ。

この人は　この大内記は薫に親しく仕へてゐる大藏大夫仲信の婿であつたので、薫の秘密をも聞くのであらう。一三〇頁參照。

かの君の　薫がそれ程大事にして隠しておくのは、平凡な並々の女ではあるまい。

このわたりには　中君とはどうして疎々しくないのだらう。

房などもあまたして、口惜しからぬけはひにて居て侍る」と聞ゆ。「をかしき事かな。何の心ありて、いかなる人をかはさてすゑ給ひ（へ）つらむ。猶いと氣色ありて、なべての人に似ぬ（人の）御心なりや。左（右）のおとどなど、「この人のあまり道心に進みて、山寺に夜さへともすれば泊り給ふなるかろ（る）〴〵しき」ともどき給ふと聞きしを、げになどかさしも佛の道には忍びありくらむ。なほかの古里に心をとどめたるとなむ聞きし、斯かることこそはありけれ。いづら、人よりはまめなるとさかしがる人しも、殊に人の思ひいたるまじき隈ある構へよ」と宣ひて、いとをかしと思いたり。この人は、かの殿にいと睦まじく仕うまつる家司の婿になむありければ、隠し給ふことも聞くなるべし。御心のうちには、いかにしてこの人を、見し人かとも見さだめむ、かの君のさばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりには、いかでか疎からぬにか・あらむ（は）、心を

ただその事を　匂宮は此頃は浮舟の事のみを思ひつめてゐられる。

賭弓　正月十八日に天皇弓場殿に臨御して近衞兵衞四府の舍人どもの競射をみそなはすのである。

内宴　正月廿一・二・三日の間に子の日に當つた日仁壽殿で行はれるうち〳〵の節會で、文人ども題を賜はつて詩を作り御前で誦ぜられ、一二獻の後親王公卿に若菜のあつものを賜ふ。

司召（細）親王は巡給にあづかりて人をこそすゝめ給ふ事はあれ、吾身の昇進などには心をもかけたまはざると也（師）春の除目をばあがためしといへども、つかさめしは慾名なればかくもいふ也（抄）春の除目は縣召也其内にも、京官を任ずる事はある也（發略）（湖月抄）

いとびんなき　實は甚だ不都合な話なのだがね。

早うほのかに　以前に私が一寸逢つた事のある女でその後行方知れずになつて居つたその女が。

聊か人に　少しも感づかれずに宇治へゆくにはどう工面したものだらう。

あな煩はし　うるさい相談だなと内記は思つたが。

殊に程遠くは　格別遠いといふ程ではございませぬ。

かはして隠し給へりけるも、いとねたう覺ゆ。ただその事を此頃はおぼししみたり（る）。賭弓、内宴など過ぐして、心のどかなるに、司召などいひて人の心つくすめる方は何ともおぼさねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみ思しめぐらす。この内記は、望むことありて、夜晝いかで御心に入らむと思ふころ、例よりはなつかしう召使ひて、「いと難きことなりとも、わが言はむことはたばかりてむや」など宣ふ。かしこまりてさぶらふ。「いとびんなき事なれど、かの宇治に住むらむ人は、早うほのかに見し人の行くへも知らずなりにしが、大將に尋ね取られにけり（る）と聞きあはする事こそあれ。たしかには知るべきやうもなきを、ただ物よりのぞきなどして、それがあらぬかと見定めむとなむ思ふ。聊か人に知らるまじき構へは、いかがすべき」と宣へば、あな煩はしと思へど、「おはしまさむことは、いと荒き山越えになむ侍れど、殊に程遠くはさぶらはずなむ。

夕つかた出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし著きなむ。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむことは、ただ御供にさぶらひ侍らむこそは。それも深き心はいかでか知り侍らむ」と申す。「さかし。昔も一度二度通ひし道なり。かろがろしきもどき負ひぬべきが、物の聞えのつつましきなり」とて、返す返すあるまじき事にわが御心にも思せど、かうまでうちいで給ひつれば、え思ひとどめ給はず。御供に、昔もかしこのあないも知れりし者二三人、この內記、さては御乳母子の藏人よりかうぶり得たる若き人、睦まじき限りをえり給ひて、「大將今日明日よもおはせじ」など內記によくあないきき給ひて、出で立ち給ふにつけても、古へを思ひ出づ。怪しきまで心を合せつつゐてありきし人のためにうしろめたきわざにもあるかな、と思し出づることもさまざまなるに、京のうちだに、むげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえし給はぬ御身に

亥子の時 夜の十時から十二時迄の間には著けませう。そして明早朝お歸りになるがよろしからう。
人の知り侍らむ 人に知れる事は、只お供の人に知れるだけで他に知れる氣遣はございませぬ。
それも深き心は お供の者とても深い事情は知る筈もございませぬ。
かろがろしき 輕率といふ非難を受けさうなのが外聞上憚られるのだ。
かうまで かうまで口に出してしまはれたからには思ひ止まることはお出來にならない。
かうぶり得たる 叙爵した。出羽守時方の事。
古へを 中君に通つた當時を。
怪しきまで 昔は不思議な位私の味方になつて中君に手引してくれた薫の爲に後暗い事だなあ。
さまざまなるに 薫に對し濟まぬと思つたり、浮舟を見たく思つたりする意。
むげに人知らぬ まるで人に知られぬお忍びあるきは、いくら何でもお出來なさらぬ御身分であるのに。

しも、あやしきさまのやつれ姿して、御馬にておはする心地も、物怖ろしくややましけれど、物のゆかしき方は進みたる御心なれば、山深うなるままに、いつしか、いかならむ、見あはする事もなくて歸らむこそさうざうしく怪しかるべけれ、と思すに、心もさわぎ給ふ。法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。內記、あないよく知れるかの殿の人に、問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣しこめたる西おもてを、やをらすこしこぼちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御すまひなれば、たどたどしけれど、人繁うなどしあらねば、寢殿の南おもてにぞ、火ほの暗う見えて、そよそよと音する。參りて、「まだ人は起きて侍るべし。ただこれよりおはしまさむ」としるべして、入れ奉る。やをらのぼりて、格子の隙あるを見つけて寄り給ふに、伊豫

物のゆかしき 人一倍好奇心の強いお氣質故。
いつしかいかならむ 首尾はどうだらう、顏も見あはないで歸るやうな結果になつたら、心淋しくもあり變な事になつてしまふだらう（こんなにまでして來たのに）と宇治が近くなると早速そんな事を考へておいでになる。「いつしか」は「思すに」を修飾する。
法性寺 九條河原にあつて貞信公の建立。
內記 大內記は、昵懇の間柄なる薫の家來に「山莊の勝手を委しく尋ね聞いてあつたので、夜番の居る所には立寄らないで。
我もさすがに 勝手は聞いて置いたものの、自分もまだ見た事のないお屋敷故。
參りて 內記が匂宮の待つてゐられる處に來て。
ただこれより 構はず此處からお入りになるが宜しからう。
やをらのぼりて 匂宮が寢殿の緣に。
隙あるを 粗雜な造り故。

誰かは来て見む　誰がこんな所へ来て覗く者があらうと油斷して。

うちかけて　奥をかくすには布を垂れておかなければならないのに、几帳の手に垂布を打懸けて閑に押しやつてある。

うちつけ目か　二條院で見たのは無用意に見たのだから、そのせいで今似てゐるやうに思ふのかと。

君　浮舟。

對の御方に　中君に大層よく似て居る。

物折るとて　着物に折目をつけようとして。

かくてわたらせ　浮舟が母と共に石山詣をする約束のあつた前夜故斯くいふ。

折しも　薫の来られた時にお留守では、隠れたやうで見苦しいです。

むかひたる人　右近に對座して居る女房。

斯くなむわたり給ひ　石山詣に出かけられたと薫へ御通知申上げておかれるが宜しからう。

簾は、さら〳〵と鳴るもつゝまし。新しう淸げに造りたれど、さすがに荒々しくて隙ありけるを、誰かは來て見むと打解けて、穴もふたがぬなるべし。几帳の帷子うちかけておしやりたり。火あかうともして、物縫ふ人三四人居たり。童のをかしげなる、糸をぞよる。これが顏、まづかの火影に見給ひしそれなり。うちつけ目かと、なほ疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は腕を枕にて、火を眺めたるまみ、髮のこぼれかかりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとよう覺えたり。この右近、物折るとて、「かくてわたらせ給ひなば、とみにしもえ歸りわたらせ給はじを、「殿は、この司召の程過ぐして、朔日頃には必ずおはしましなむ」」と、昨日の御使も申しけり。御文にはいかが聞えさせ給へりけむ」といへど、いらへもせず、いと物思ひたる氣色なり。「折しも這ひ隱れさせ給へるやうならむが見苦しさ」といへば、むかひたる人、「それは、斯くなむ

かる〳〵しう　何で沙汰なしに隠れるやうなかる〳〵しい眞似が出來ませう。

やがてわたり　京の母君の方には行かずに眞直にお渡り遊ばせ。

かくて　此儘此處にじつとして居つて。

このおとどの　あの乳母殿があまり性急なもんだから、こんなに俄に石山詣などをお勸めなさつたのでせう。

物念じして　辛抱強い氣の長い人が最後の幸福を得るのです。

などこのまゝを　なぜあのお乳母を此處に引きとめておかなかつたのでせう。お婆さんといふものは厄介な考へを持つてゐるものです。

げに憎き者　さう〳〵あの時邪魔した憎いお婆さんが居つたつけ。

わたり給ひぬると、御消息聞えさせ給へらむこそよからめ。かる〳〵しういかでかは音なくては這ひ隱れさせ給はむ。御物詣ののちは、やがてわたりおはしましねかし。かくて心細きやうなれど、心にまかせて、安らかなる御すまひにならひて、なかなか旅心地すべしや」などいふ。又あるは、「なほ暫し斯くて待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかにさまよかるべきや。京へなど迎へ奉らせ給へらむのち、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとどのいと急に物し給ひて、俄にかう聞えなし給ふなめりかし。昔も今も物念じしてのどかなる人こそ、さいはひは見果て給ふなれ」などいふなり。右近、「などてこのままをとどめ奉らずなりにけむ。老いぬる人は、むつかしき心のあるにこそ」と憎むは、乳母やうの人を譏るなめり。げに憎き者ありきかし、と思しいづるも、夢の心地ぞする。傍痛きまで打解けたる事どもをいひて、「宮のうへこそいとめでたき御さいはひ

左の大殿　夕霧が、あれ程すばらしい御威勢を以て、大騒ぎして匂宮を大事にしていらつしやるけれども、中君に若君がお生れになつてからは、六君よりもずつとうは手でいらつしやる。
かかるさかしら人　中君には浮舟の乳母のやうなでしやばり者が附いて居ないので、あせらずにうまくたちまはつていらつしやるのでせう。
殿だに　薫の、眞の御愛情さへ變らなかつたら、浮舟の幸福も中君に劣るものではありませぬ。
よその人にこそ　他人との優劣を考へるのは構はないが、中君の事は決して口にしてくれるな。
何ばかりの　浮舟と中君とはどの程度の親族關係なのだらう。
心恥かしげにて　氣がおける深みがあつて上品な點は。
らうたげにこまかなる　可憐で情味のこまやかな點が興味を引く。
よろしう　いゝ加減な不十分な點を浮舟に見付けたら、とて、あれ程心から見たがつてゐられた女だもの、浮舟たる事をつきとめただけでその儘にしておかれる匂宮の御性質ではないから。

なれ。左(右)の大殿(おほいどの)の、さばかりめでたき御いきほひにて、いかめしうののしり給ふなれど、若君うまれ給ひてのちは、こよなくぞおはしますなる。かかるさかしら人どものおはせで、御心のどかに、かしこうもてなしておはしますにこそはあめれ」といふ。女房「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふこと變らずば、劣り聞え給ふべきことかは」といふを、(浮舟)君すこし起きあがりて、浮舟「いと聞きにくき事。よその人にこそ、劣らじともいかにとも思はめ。(中君に)かの御事なかけても言ひそ。漏り聞ゆるやうもあらば傍痛からむ」などいふ。(以下匂宮の心)何ばかりの親族(しぞく)にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかな、と思ひくらぶるに、心恥かしげにてあてなる所は、(中君は)かれはいとこよなし。(浮舟)これは只らうたげにこまかなる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる人を、それと見てさてやみ給ふべき御心ならねば、(すつかり見届けられた以上)まして隈もなく見給ふに、いかでか

物へ行くべき　以下匂宮の心。浮舟は物詣に出かけるのだと見える。
いかで此處ならで　此處でなくては又と尋ねあふ事が出來るものではない、といつて今晩中には何とも仕樣がない。
御車は　母君からのお迎への車は。
君のあと近く　浮舟の足の方近く。
又せむやうも　といつて別に爲すべきすべもないので。
殿の　薫の御入來かと。
覺えなき　思ひがけない時のおいででいらつしやいますこと。
物へわたり　以下薫の眞似をしていふのである。

これをわが物にはなすべきと、わりなく(理も非もなく悲へなやんでゐられる)おぼし惑ひぬ。物へ行(い)くべきなめり、親(おや)はあるべし、いかで(浮舟がよそへ出かけては)此處ならで又は尋ねあふ(は)べき、今宵の程には又いかがすべき、と心も空になり給ひて、なほ(浮舟を)まもり給へば、右近、「いとねぶたし。(昨夜も何がなしに)よべもすずろに起きあかしてき。(明早朝)つとめての程にも、これは縫ひてむ。いそがせ給ふとも、御車は日たけてぞあらむ」といひて、しさしたる物ども(とりまとめて)取り具して、几帳に打懸けなどしつつ、うたたねのさまに寄(に)り臥しぬ。(浮舟)君もすこし奥に入りて臥す。右近(は)北おもてにいきて、暫しありてぞ來たる。君のあと近く臥しぬ。(右近のさま)ねぶたしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を(匂宮が)見給ひて、又せむやうもなければ、忍びやかにこの格子をたたき給ふ。右近聞きつけて、(誰)「たぞ」といふ。(匂宮がせきばらひなさると)こわづくり給へば、(上品なあの咳払ひは薫のと)あてなるしはぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて、(右近が)起きて出でたり。匂「まづ(この戸を)これあけよ」と宣へば、右近「あやしう覺えなき程にも侍るかな。

仲信　大藏大夫で大內記道定の舅。
いとこそ　暗い山道をひどい難儀をしてやつて來た。
思ひも寄らず　匂宮とは知らずに。
道にて　燈火を消させようとの匂宮の策略。盜賊にあつたやうに言つたのである。
來たりとて　私が來たからといつて人を起すな。
いとらうらうじき　匂宮は機轉の利くお方故。
ただかの御けはひに　薫そつくりの樣子に。
ゆゆしき事のさま　「わりなく怖ろしき事」とあつた事。
近う寄りて　匂宮が浮舟に。
馴れがほに　薫を裝つて。
例のおましに　いつもの御寢所に。
物も宣はず　匂宮は聲變をおそれて。
御ふすま參りて　浮舟に夜具をかけてあげて。

夜はいたう更けて侍・・らむものを」といふ。「物へわたり給ふべかなりと仲信がいひつれば、おどろかれつるままに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづあけよ」と宣ふ聲、いとようまねび似せ給せて、忍びたれば、思ひも寄らずかい放・つ。「道にて、いとわりなく怖ろしきことのありつれば、あやしき妻になりてなむ。火暗うなせ」と宣へば、「あないみじ」とあわてまどひて、火は取りやりつ。「われ人に見すなよ。來たりとて、人おどろかすな」と、いとらうらうじき御心にて、もとより・ほのかに似たる御聲を、ただかの御けはひにまねびて入り給ふ。ゆゆしき、事のさまと宣へ・る、いかなる御姿ならむ、といとほしくて、我も隱ろへて見奉る。いとほそやかになよなよと裝束きて、香のかうばしきことも劣らず。近う寄りて、御ぞども脫ぎ、馴れがほに打臥し給へれば、「例のおましにこそ」などいへど、物も宣はず。御ふすま參りて、寢つる人々おこし

御供の人など　薫が來られる時には、お供の人などはいつも侍從の方にあつて、浮舟の方では侍はぬ事になつてゐるので。
あはれなる　こんなに夜おそくおいで下さるとはありがたい事だ。
さざめくしもぞ　さゝやき聲が却つてやかましい。
つつましかりし　人前のある二條院に於てすら無理わざをなさらうとした御料簡なのだから。
ひたぶるに　遠慮する人もない今の場合、まるつきり話にならない。
その折の　二條院で浮舟が冷淡であつた事や、それ以後ずつと思ひ續けてゐる趣を、だんだんと仰しやるので。
又猛きこと　外によい手段がないので。
なかなかにて　今後容易に逢へさうもない事を豫想すると、なまなかの逢瀨がつらくてお泣きになる。

て、すこししぞきて皆寢ぬ。御供の人など、例のここには知らぬならひにて、「あはれなる、夜のおはしましざまかな。かかる御有樣を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま給へ。夜聲は、ささめくしもぞかしかましき」などいひつつ寢ぬ。女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。いとつつましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。初めよりあらぬ人と知りたらば、聊かいふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうやう、その折のつらかりしこと、年・頃思ひわたるさま宣ふに、この宮と知りぬ。いよいよ恥かしく、かのうへの思さむことなど思ふに、又猛きことなければ、限りなう泣く。宮もなかなかにて、たはやすくあひ見ざらむことなどを思すに、泣き給ふ。

夜はただ明けに明く。御供の人來てこわづくる。右近聞きてま

出て給はむ　匂宮は歸る氣にもなれず。

京には　京では自分が所在不明で騷がれようとも、今日だけは此儘此處に留まらう。

生ける限りの　拾遺戀一「戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲こそ人は見まくほしけれ」

をのこども　お供の者どもはこの附近に人目に立たないやうにして何候せよ。

時方　出雲の權守とて源氏の家司。九〇頁。

山寺へ　匂宮は山寺へ忍びの參籠だとふさはしいやうに答へておけ。

いとあさましく　右近は初めて匂宮と知つたのである。

心もなかりける　不注意から起つた昨晩のわが失態を思ふと氣も狂ひさうなのを。

今はよろづに　かうなつたからにはいくらあわて騷いでも仕方がないばかりか却つて騷ぐのは失體だ。

怪しかりし　二條院で變な孤目で見られ深く思ひこまれた時に斯樣に避け得ぬ宿命であつたのでもあつた。決して人間の犯した過失ではないのだ。

御迎へに　石山詣の爲に母君から御迎へにといふ事でございましたのに。どうなさらうといふお積りですか。

ゐれり。出で給はむ心地もなく、飽かずあはれなるに、又おはしまさむことも難ければ、京には求めさわがるとも、今日ばかりは斯くてあらむ、何事も、生ける限りの爲・こそあれ、只今出でおはしまさば、誠に死ぬべくおぼさるれば、この右近を召寄せて、「いと心地なしと思はれぬべけれど、今日はえ出づまじうなむある。をのこどもは、このわたり近からむ所に、よく隱ろへてさぶらへ。時方は京へ物して、『山寺へ忍びてなむ』と、つきづきしからむさまに、・・いらへなどせよ」と宣ふに、いとあさましくあきれて、心もなかりける、夜のあやまちを思ふに、心地も惑ひぬべきを、思ひしづめて、今はよろづにおぼほれ騷ぐともかひあらじものから、なめげなり、怪しかりし折に、いと深うおぼし入れたりしも、かうのがれざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは、と思ひ慰めて、「今日御迎へにと侍りしを、いかにせさせ給はむとする御ことにか。かう

折こそ　丁度お生憎の折でございます。

物思ひつるに　浮舟を思ひ續けてその爲にぼけてしまつてゐるから、人の誹りも分らない、向ふ見ずの氣持になつてゐる。

思はば、かからむ人の　河内本は「思ひはばからむ人の」と讀むのであらう。

御返りには　迎へが來たらその返事には。

人に知らるまじき　浮舟の爲又私の爲に、誰にも感づかれぬやう工夫せよ。

他事は　今の私には外の事は何といつても駄目だ。

音なふ人に　歸京を促してゐる大内記に。

斯くなむ　匂宮は今日は歸らぬと仰しやいますが。

あさましう　聞いたこともないやうな餘りな御仕打は、宮がさう思召しても、貴方がたお供の人々の御胸の中にあることと思ひます。宮を宇治までお連れ申すといふやうな考へのない事がありますか。

なめげなる　無禮な口をきく山賤などあつたらどうならう。

のがれ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍らむかたなし。折こそいとわりなく侍れ。・今日はいでおはしまして、御志侍らば、のどかにも」と聞ゆ。およすげてもいふかなと思して、「我は月頃物思ひつるに、ほれ果てにければ、人のもどかむも・・知らず、ひたぶるに思ひなりにたり。すこしも身のことを思はば、かからむ人の斯かるありきは思ひ立ちなむや。御返り・・には、「今日は物忌など」いへかし。他事はかひなし」人に知らるまじきことを、たが爲にも思へかし」と宣ひて、この人の、世に知らずあはれに思さるるままには、よろづの誹りも忘れ給ひぬべし。右近出でて、この音なふ人に、「斯くなむ宣はするを、『なほいとかたはならむ』と・を申させ給へ。あさましう珍らかなる御有樣は、さ思召すとも、かかる御供の人どもの御心にこそあらめ。いかで斯う心をさなうはゐて奉り給ひしぞ。なめげなることを聞えさする山賤なども侍らま

さなむ　左樣々々と宮が仰しゃいました。
かうがへ給ふ　あなたのお叱りが怖ろしいので、宮の仰せがなくとも逃げて歸ります。
まめやかには　實の所。
身を捨てて　我身の事は顧みずにお供したのです。
人に知らすまじうは　どういふやうにしたら人に知らさないですむだらう。
殿は　薫は子細があつて。匂宮を薫といひなすのである。
夜さり忍びて　今夜ひそかに持參するやう京にいひ遣されました。
御達　女房達。
御さきも　先驅もお連れにならず。
心地おそろし　さういうて右近は内心ひや／＼してゐる。

しかば、いかならまし」といふ。内記は、げにいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり。「時方と仰せらるるは誰にか。さなむ」と傳ふ。笑ひて、「かうがへ給ふことどもの怖ろしければ、さらずとも、逃げてまかでぬべし。まめやかには、おろかならぬ御氣色を見奉れば、誰も／＼身を捨ててなむ。よし／＼、宿直人も皆起きぬなり」とて、急ぎ出でぬ。右近、人に知らすまじうはいかがはたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、道にていみじきことのありけるなめり。御ぞどもなど、夜さり忍びてもて參るべくなむ仰せられつる」などいふ。御達、「あなむくつけや。木幡山はいと怖ろしか・なる山ぞかし。例の御さきも追はせ給はず、やつれておはしましけむよ。あないみじや」といへば、「あなかま、あなかま。下衆などの塵ばかりも・・聞きたらむに、いといみじからむ」といひ居たる、心地・・

あやにくに　意地わるく薫から使が來たら何といひのがれよう。
石山に今日　實は今日は浮舟を石山に參詣させる爲に母君から迎へが來る事になつて居つたのだ。
さらば今日　薫が御滯在では今日は石山詣は出來さうありませんね。
物忌など　物忌の折には小さい木札に物忌と書いて簾垂などに附けておくのである。
夢見さわがし　昨晩夢見がわるかつたから謹愼しなければならぬと虚構するのであつた。
御手水など　右近は薫の時と同じやうにして御手水など差上げたのだが。
まかなひめざましう　その世話を餘りの事と思つて。浮舟が自ら手水の世話をしたから「まかなひめざましう」といつたのである。器物が揃はぬと解くべき理由はない。秘密にする爲に給仕の人を近づけないのである。
時のまも　片時も見ずに居ては焦れ死にするだらうと思ひこがれてゐられる匂宮を見ては。
怪しかりける　不思議な運命を持つた自分だ。

おそろし。あやにくに・・殿の御使のあらむ時、いかに言はむと、「初瀬の觀音、今日、事なくて暮し給へ」と、大願をぞ立てける。石山に今日まうでさせむとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆精進し、清まはりてあるに、「さらば今日はえわたらせ給ふまじきなめりな。いと口惜しきこと」といふ。日高くなれば、格子などあげて、右近ぞ近く・仕うまつりける・。母屋の簾垂は皆おろしわたして、物忌など書かせて附けたり。母君もやみづからおはするとて、夢見さわがしかりつ、といひなすなりけり。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・御手水など參りたるさまは、例のやうなれど、まかなひめざましう思されて、「そこに洗はせ給はば」と宣ふ。女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時のまも見ざらむは死ぬべし、と思しこがるる人を、志深しとは斯かるをいふにやあらむ、と思ひ知らるるにも、怪しかりける身

誰も　母君始め中君なども、私と宮との關係が知れたら。

御心を思ひいできこゆれど　[illegible]の一なびきたるを」に續く。湖月抄には「きみゆれど」とある。

知らぬを　宮は浮舟の種姓を知らないので。

いみじき　貴女がどんな下賤の身でも。

他事は　身分や種姓以外の事は。

迎への人　母君方から。

しな／＼しからぬ　上品ならぬ樣子をして東國調でしやべりながらやつて來たので。

傍痛がり　賤しい東國武士を恥ぢて宮(實は匂宮)の手前をきまりわるがつたのである。

あなたに隱れよ　宮(實は匂宮)の目に觸れぬやう。

殿なむ　薫が來てゐられる故に石山詣は出來ませぬと斷つてやつたならば。

京にさばかりの　廣い京でも薫程の身分の方の在不在は、自然彼方此方聞き傳へて母君方にもよく分つてゐるといふ虞がある。「おはしおはせず」は「隱れなき」に續く。

かな、誰も、物の聞えあらば、いかに思さむと、まづかのうへの御心を思ひいできこゆれど、知らぬを、「返す／＼いと心憂し。なほあらむままに宣へ。いみじき下衆といふとも、いよいよなむあはれなるべき」と、わりなう問ひ給へど、その御いらへは絶えてせず。他事は、いとをかしくけ近きさまにいらへ聞えなどして、なびきたるを、いと限りなうらうたしとのみ見給ふ。日高くなるほどに、迎への人來たり。車二つ、馬なる人々の、例の荒らかなる七八人、をのこども多く、例のしな／＼しからぬけはひ、さへづりつつ入り來たれば、人々傍痛がりつつ、「あなたに隱れよ」と言はせなどす。右近、「いかにせむ、殿なむおはするといひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞きかよひて、隱れなき事もこそあれ、と思ひて、この人々にも殊にいひあはせず、返りごと書く。「よべより、けがれさせ給ひて、いと口惜しきことを思し歎くめりしに、今

物の妨げの　魔物の爲に邪魔されたのかと存じます。

わたり給はぬ　浮舟は石山詣にお出かけになりませぬ。

暮れゆくは　日の暮れてゆくのはつらい（歸りが近づくから）事だとそればかり氣にやんでゐられる匂宮に引かれて。

見れども　いくら見てゐても浮舟に此處ぞ不足と思はれる缺點もなく。古今戀四「春霞たなびく山の櫻花見れども飽かぬ君にもあるかな」

大殿の君　夕霧の息女六君。

こよなかるべき　話にならない程劣つてゐる筈の浮舟を。この句「まだ知らずをかしと」に續く。

こよなく　匂宮の方が格段でいらつしやつたのだと。

宵夢見さわがしく見えさせ給へれば、今日ばかり愼しませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返す／＼口惜しく、物の妨げのやうに見奉り侍る」と書きて、人々に物などくはせてやりつ。尼君にも、「今日は物忌にて、わたり給はぬ」といはせたり。例は暮しがたくのみ霞める山ぎはを眺めわび給ふに、暮れゆくはわびしくのみ思しいらるる人に引かれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。まぎるる事なくのどけき春の日に、見れども見れども、飽かずその事ぞと覺ゆる隈なく、愛敬づきなつかしくをかしげなり。さるはかの對の御方には劣りたり。大殿の君のさかりに匂ひ給へるあたりにては、こよなかるべき程の人を、たぐひなく思さるる程なれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女は又、大將殿を、いと清げに、又斯かる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ、清らなることは、こよなくおはしけりと見る。硯引きよせて、手習など給ふ。いとをかしげに書きす

思ひも　愛情が薫を離れて匂宮に移つてしまひさうだ。
心よりほかに　思ひながらも私が逢ひに來られぬ間はこの繪を見てるなさい。

長き世を　行末かけて變らぬ約束はしても、明日の命が皆目分らぬといふ事は矢張悲しい事であつたのだ。
心に身をも　思ふ儘にも出來ずいろ〳〵と貴女に逢ふ工夫をして居る間に、本當に死んでしまひさうな氣がします。「誠に」は歌の「明日知らぬ命」を受ける。
なか〳〵　なまなか尋ねなかつたらよかつた。なまじか逢つた爲に抑つて悲みがまさるの意。
心をば　不定なものは命だけだと思ふのでしたら、男心の不定を悲しむ歎きはあるまいに、不定なのは命ばかりではないので。
いかなる人の　誰に捨てられた經驗があつてそんな事をいはれるのですか。
大將の　薫が浮舟を此處に連れてこられた當初の事情を返す〴〵も知りたがつて尋ねられるけれども。

さび(み)、繪などを見どころ多くかき給へれば、若き心地には、思ひも移りぬべし。「心よりほかに見ざらむ程は、これを見給へよ」とて、いとをかしげなる男女、もろともに添ひ臥したるかたをかき給ひて、「常に斯くてあらばや」など宣ふも、涙落ちぬ。

「長き世を頼めても尙悲しきはただ明日知らぬ命なりけり

いとかう思ふこそゆゆしけれ。心に身をも更にえまかせず、よろづにたばからむ程、誠に死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有樣を、なか〳〵何に尋ね・・けむ」など宣ふ。女、濡らし給へる筆を執りて、

心をば歎かざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

とあるを、變らむをば恨めしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。「いかなる人の心がはりを見ならひて」など、ほほゑみて、大將のここにわたしそめ給ひけむ程を、返す〴〵

え言はぬ　いへない事ですものそんなに仰しやつて。
いはせまほしきぞ　浮舟の口から聞きたいとは困つたものだ。
京へつかはし　時方を京へ遣した事は九八頁にある。大夫は五位。時方の叙爵の事は九〇頁。
左のおとども　夕霧も匂宮の出あるきを苦情いはれて。
すべてうちなどに　一體この事が主上のお耳に入つても、私自身の不注意といふ事になつて甚だつらい。
東山に　匂宮は東山に僧にあひに行かれたと人前は取繕つておきました。
すずろなるけそうの　何でもないお供の自分達をまでも困らせて、「嘘まで」つかせなさる。「けそう」は見出、顯證又眷屬の字音であると。
聖の名をさへ　浮舟に聖といふ名をおつけになつたのは大出來です。
いと怪しき御心の　こんなけしからぬたくらみをどうして修行されたのでせう。

ゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりて、「え言は・ぬことを、かう宣ふこそ」と、うちゑ・じたるさまも、・・若びたり。おのづからそれは聞き出で・む、と思すものから、いはせまほしきぞわりなきや。

夜さり、京へつかはしつる大夫參りて、右近にあひたり。「后の宮よりも御使參りて。左のおとど・もむづかり聞えさせ給ひて、「人に知ら・させ給はぬ御ありきは、いとかる〳〵しく、なめげなる事もあるを、すべてうちなどに聞召さむことも、身・・の爲なむいとからき」といみじく申させ給ひけり。東山に聖御覧じにとなむ人には物し侍りつる」など語りて、「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すずろなるけそうの人をさへ惑はし給ひて、空言をさへせさせ給ふよ」といへば、「聖の名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにて滅ぼし給ふらむ。誠にいと怪しき御心の・・・・、げにいかでなら

かねて斯う 前以ておいでの旨を承つたにしても、「それはあまり勿體ない事ですから」何とか工夫してお逢はせ致しませうものを。無考へな御忍びありきです。

參りて 右近が匂宮の御前に罷り出て時方の詞を申上げると。

げにいかならむ 明石中宮や夕霧などの立腹を想像するのである。

かうつつむべき 浮舟故には、憚るべき人目も憚られさうもない。

さるべき程とは 薫と自分とは親しかるべき間柄とはいひながら。薫と匂宮とは叔父甥の間。

斯かる心の隔て 浮舟を横取りした事が薫に知れたら恥かしく。

怨みられ給はむ 浮舟が薫から怨まれることまでも心配する。

袖のなかにぞ 古今雜下「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する」

はせ給ひけむ。かねて斯うおはしますべしと承らましにも、いと忝ければ、たばかり聞えさせてましものを。あぶなき御ありきにこそは」と、あつかひ聞ゆ。參りてさなむとまねび聞ゆれば、げにいかならむと思しやるに、「所せき身こそわびしけれ。かろらかなる程の殿上人などにて暫しあらばや。如何すべき。かうつつむべき人目も憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はむとすらむ(と)。さるべき程とはいひながら、怪しきまで昔より睦まじきなか(なる)に、斯かる心の隔ての知られたらむ時、恥かしう、又いかにぞや世のたとひにいふ事もあれば、待ちどほなるわが怠りをも知らず、怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られ給ふまじきさまにて、ここならぬ所にゐて離れ奉らむ」とぞ宣ふ。今日さへ斯くてこもりゐ給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、袖のなかにぞとどめ給へらむかし。明け果てぬさきにと、人々しはぶきおどろかし聞ゆ。妻戸にも

世に知らず 別れの悲しさのみか先に立つ涙も歸りの道を眞暗にして、どう往つていいやら分らず、世に類もない程私はまごついてゐる。

涙をも このいやしい私の狹い袖では涙さへ包みきれず、溢れ出るのを止めかねてゐるのですもの、どうしてあなたをおとめ申す餘裕がありませう。

おのがきぬぎぬも 後朝といふ語を衣々即ち二人銘々の衣の意にはたらかしたもの。古今戀三「しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」

いとたはぶれにくし 戯談ぢやない。

五位二人 時方と大内記。

昔もこの道に 中君に通つた當時の事。

あやしかりける 宇治と自分との間には不思議な因縁があつたのだと宮は思召す。

心やすき方に 氣樂なわが居間で寢られたのだが。

ろともにゐておはして、え出でやり給はず。

世に知らず惑ふべきかな先に立つ涙も道をかきくらしつつ

女も、限りなくあはれと思ひけり。

涙をも程なき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ」

風のおともいと荒ましう(く)霜深き曉に、おのがきぬぎぬも冷かになりたる心地して、御馬に乗り給ふほど、引きかへすやうにあさましけれど、御供の人々、いとたはぶれにくしと思ひて、ただ急がしに急がしいづれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人なむ御馬の口にはさぶらひける。さかしき山越え果てて(い)ぞおのおの馬には乗(り)(け)る。汀の氷を踏み鳴らす馬の足音さへ、心細く物悲し。昔もこの道にのみこそは斯かる山踏はし給ひしかば、あやしかりける里の契りかな、と思す。二條の院におはしましつきて、女君のいと心憂かりし御物隠しもつらければ、心やすき方に大殿籠りぬる(た)に、ねられ給はず、

いとよく似たる　中君と浮舟とは異母姉妹故。

女君も　中君をも御帳の中に。

まろは　私がいくら貴女を愛して居つても、私が死んだら直に貴女は薫の方へ心變りなさるだらう。人の一念といふものは必ずとほるものですから。

かう聞きにくき　そんな人聞のわるいお詞がもし薫の耳に入りましたらば、私がどういふやうに作つてお話したことやらと薫も疑はれるだらうが、それは心外です。

心憂き身には　つらい我身にとつては、何でもない冗談でも大變苦しみます。

誠につらしと　私が本氣で貴女をつらく思ふ事でもあつたら貴女は何と思ひますか。

いと淋しきに、物思ひまされば、心弱く對にわたり給ひぬ。何心もなく、いと清げにておはす。珍らしくをかしと見給ひし人よりも、又これはなほありがたきさまはし給へりかし、と見給ふものから、いとよく似たるを思ひ出で給ふも胸ふたがれば、いたく物おぼしたるさまにて、御帳に入りて大殿籠る。女君もゐて入り聞え給ひて、「心地こそいとあしけれ。いかならむとするにかと心細くなむある。まろは、いみじくあはれと見おいて奉るとも、御有様はいと疾く變りなむかし、人の本意は必ずかなふなれば」と宣ふ。けしからぬ事をも、まめやかにさへ宣ふかな、と思ひて、「かう聞きにくき事の漏り聞えたらば、いかやうに聞えなしたるにかと、人も思ひ寄り給はむこそあさましけれ。心憂き身には、すずろなる事もいと苦しく」とて、そむき給へり。宮もまめだち給ひて、「誠につらしと思ひ聞ゆる事もあらむは、いかが思さるべき。まろは御ためにはおろかなる

ありがたし　あんなに妻を大事にする人は滅多にないなどと私を非難する程なのです。など　それもさるべきに　それも尤もだと宮然のやうにも考へられるが。

隔て給ふ　私に隠しだてをなさる"御心の深いのが甚だ面白くない"浮舟の事をいふ。

宿世の　どんなに隠されてゐても"因縁が淺からねばこそ浮舟に逢ふ事が出來たのだ。

まめやかなるを　匂宮の眞顔なのを見て、迷惑な薫との事についてどんな事を聞きこまれたのだらう。

物はかなき　正式の儀式もなしに私と結婚されたので、萬事につけて自分をうすつぺらな女と考へてゐられるのだらう。中君が簡單に薫に許すものと宮が推量なさるだらうの意。

すずろなる人を　縁もゆかりもない者を頼つて、その好意を受入れ始めたりなどしたそれだけの失錯故に宮から輕く見られるのだ。

ことさまに思はせて　實は浮舟の事を話しながら全く別な事のやうな風に思はれるので。

ただ「思すに」を修飾する。眞の事をむきになつて仰しやるのだと一途に思ひこんでゐられるので。

ありやなしや　實否をたしかめね間は宮に顔を合せるのも恥かしい。

人かは。人も「ありがたし」など咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとし給ふべかめり。それもさるべきにこそはとことわらるるを、隔て給ふ御心の深きなむいと心憂き」と宣ふにも、宿世のおろかならで尋ね寄りたるぞかしと思しいづるにも、涙ぐまれぬ。まめやかなるを、いとほしういかやうなる事を聞き給へるならむと驚かるるに、いらへ聞え給はむこともなし。物はかなきさまにて見そめ給ひしに、何事をもかろらかに推し量り給ふにこそはあらめ、すずろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知り始めなどしたるあやまちばかりに、覺え劣る身にこそ、と思しつづくるも、よろづ悲しくて、いとどらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたりとは、暫し知らせ奉らじと思せば、ことざまに思はせて怨み給ふを、ただこの大將の御事をまめ〳〵しく宣ふと思すに、人や空言をたしかなるやうに聞えたらむ、など思す。ありやなしやを聞かぬまは、見え

あなたに　匂宮がわが居間に帰られた。

さわがれ〔主上や中宮に〕。

右大将まゐり〔薫が匂宮方へ〕。なやましげに　あなたが御病氣と承りましたので中宮も大層心配していらつしやいます。どんな御病氣ですか。

見るからに　匂宮は薫を見るなり、脛に傷持つ身の一層胸騒ぎがするので。

聖だつと〔薫がいかにも清僧振するとはいへ〕、あんな可憐な女を捨ておいて、呑氣な顔して長い間待ちわびさせて居るよ。

こよなかりける　とんだ山伏心だ。「聖だつ」を嘲つた挿入句である。「山伏」といつたのは山里の宇治での出來事であるからである。

さしもあらぬ　何でもない折にも薫が實直顔したり自家廣告したりなさるのをいま〳〵しがられていろ〳〵攻擊してゐられたのだもの、こんな秘密を見あらはしたからには、どんなに仰しやらうとなさるだらう。

奉らむも恥かし。うちより大宮の御文あるに、驚き給ひて、なほ心解けぬ御氣色にて、あなたにわたり給ひぬ。「昨日のおぼつかなさを、いと惱ましくおぼされたなる。よろしくば參り給へ。久しうもなりにけるを」などやうに聞え給へれば、さわがれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地もたがひたるやうにて、その日は參り給はず。上達部などあまた參り給へど、御簾のうちにて暮し給ふ。

夕つかた右大將まゐり給へり。「こなたにを」とて、打解けながら對面し給へり。「なやましげにおはしますと侍りつれば、宮にもいと覺束なく思召してなむ。いかやうなる御なやみにか」と聞え給ふ。見るからに心さわぎのいとどまされば、言少なにて、「聖だつといひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人をおきて、心のどかに、月日を待ちわびさすらむよ」と思す。例は、さしもあらぬ事のついでにだに、

ふびんなる　それはいけませんですね、大した事はないながらも長引くのは大變わるい事です

御かぜ　お風邪を十分に御養生なさい。

恥かしげなる　薫という人は深みのある人だ、浮舟は自分のやうながさつ者を薫と比べて何と思つた事だらう。

さま〳〵　中君を見れば浮舟をおもひ、薫を見れば浮舟をおもひそれ〳〵の緣故に感じて浮舟の事がおもはれる。

かしこには　浮舟の方では石山詣も中止になつて大層淋しい。

御文には　匂宮からのお手紙には

それだに　手紙でもまだ安心が出來ず、時方とおよびになつた五位の人の家來で、事情も知らないのを使として宇治に遣された。

右近が古く　私の昔馴染の男で先達薫のお供をして此處で見つけたのが、又縒りを戻して親切に使をよこすのです。

我はまめ人ともてなし名のり給ふをねたがり給ひて、よろづに宣ひやぶるを、斯かる事見あらはいたるを、いかに宣はまし。されど、さやうのたはぶれごともかけ給はず、いと苦しげに見え給へば、「ふびんなるわざかな。おどろ〳〵しからぬ御心地のさすがに日かず經るは、いとあしきわざに侍る。御かぜよくつくろはせ給へ」など、まめやかに聞えおきて出で給ひぬ。恥かしげなる人なりかし、わが有樣をいかに思ひくらべ給ひ、など、さま〳〵なる事につけつつも、ただこの人を時のまも忘れず思し出づ。

かしこには、石山もとまりて、いとつれ〴〵なり。御文には、いといみじき事を書き集め給ひてつかはす。それだに心やすからず、時方と召しし大夫の從者の、心も知らぬしてなむやりける。「右近が古く知れりける人の、殿の御供にて尋ねいでたる、さらがへりて、ねんごろがる」と友だちにはいひ聞かせ

かう思し　匂宮は斯樣にいらいらした氣持でゐられるけれども。**かうのみ**　こんなに浮舟の事ばかりを思ひつめて居ては、とても長生きは出來ないと思ふ。**すこしのどかに**　大方公事もすんで閑になつた頃。

ここには「歩み入り給ふ」云々に續く。**忍びたれど**　薰は微行ではあるが匂宮程には無闇に地味にはならず。**いかで見え奉らむ**　とても合せる顏がないと。**あながちなりし**　熱情的の匂宮の御有樣がまざまざ目に見えてくる矢先へ又も薰に逢ふのかと考へるとなさけなくなる。**我は年頃見る**　私は年來の愛人をも皆捨てて貴女にのりかへてしまひさうな氣がする。**いづくにも**　どこでもかしこでも。**又いかに聞きて**　又今晩薰が來られた事を匂宮が聞いて何と思召す事だらう。

たり。よろづ右近ぞ空言しならひける。

月もたちぬ。かう思しいらるれど、おはします事はいとわりなし。かうのみ物を思はば、更にえながらふまじき身なめり、と心細さを添へて歎き給ふ。大將殿すこしのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛などをがみ給ふ。御誦經せさせ給ふ僧に、物賜ひなどして、夕つ方、ここには、忍びたれど、これはわりなくもやつし給はず、ゑぼうし直衣の姿、いとあらまほしく淸げにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意殊なり。女、いかで見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく怖ろしきに、あながちなりし人の御有樣うち思ひ出でらるるに、又この人に見え奉らむを思ひやるなむ、いみじう心憂き。「我は年頃見る人をも、皆思ひかはりぬべき心地なむする」と宣ひしを、げにそののち御心地苦しとて、いづくにもいづくにも、例の御有樣ならで、御修法など騷ぐなるを聞くに、又いかに、聞きて

久しかりつる程の　久しい無沙汰のお詫などを申されるにも。**おりたたねど**　戀し悲しといふのにかゝりきつてはゐないが。**いとあはれと**　浮舟が深く動かされてしまひさうな魅力を持つてゐられる人柄である。**艶なる方は**　優艶といふ點は勿論のこと、浮舟が末長く賴るに足りさうな性格などは、格段にすぐれてゐられる。**思はずなる**　とんでもない不料簡。即ち匂宮との事。**あやしう**「あはれと思ふも」を修飾する。**あやしう**　不思議にも盲目的な戀に身も世もないといつた匂宮に心引かれるのも、それは實にけしからぬ輕々しい事だ。

忘れ給ひなむ　薰に捨てられた時の心細さは、骨身にしみ通りさうなので、その事を浮舟が煩悶してゐる樣子を見て。**月頃にこよなう**　この數月來に浮舟は非常に世情が分つて來て大人になつたものだ、退屈な毎日を送つて居ては、物思ひの限りを盡す事だらう。**造らする所**　浮舟を引取る爲に建築中の京の家。

思さむと思ふも、いと苦し。この人はたいとけはひ殊に心深くなまめかしきさまして、久しかりつる程の怠りなど宣ふも、言多からず、「戀し悲し」とおりたたねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、さまよき程にうち宣へる、いみじく、いふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめ給へる人がらなり。艶なる方はさるものにて、行末ながく人の頼みぬべき心ばへなどこよなくまさり給へり。思はずなるさまの心ばへなど、漏り聞かせたらむ時(も)、なのめならずいみじくこそあるべけれ、あやしう、うつし心もなうおぼしいらるる人をあはれと思ふも、それはいとあるまじくかろき事ぞかし、この人に憂しと思はれて、忘れ給ひなむ心細さは、いと深うしみぬべければ、思ひみだれたる氣色を、月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり、と見つれづれなるすみかの程に、思ひ殘す事はあらじかし、と見給ふも心苦しければ、常よりも心とどめて語らひ給ふ。「造ら

する所、やう〳〵よろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、さこよりはけ近き水に、花も見給ひつべし。三條の宮も近き程なり。明暮おぼつかなき隔てもおのづからあるまじきを、この春の程に、さりぬべくばわたしてむ」と思ひて宣ふも、かの人の、「のどかなるべき所、思ひまうけたり」と昨日も宣へりしを、斯かることも知らで、さ思すらむよと、あはれながらも、そなたに靡くべきにはあらずかし、と思ふからに、ありし御さまの、面影におぼゆれば、我ながらもうたて心憂の身やと、思ひつづけて泣きぬ。薫「御心ばへの斯からでおいらかなりしこそ、のどかに嬉しかりしか。人のいかに聞え知らせたる事かある。すこしもおろかならむ志にては、かうまで參りくべき身の程道の有樣にもあらぬを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く臥して眺めいだし給へり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、かた

け近き　親しみやすい川のほとりで花も眺められます。

おぼつかなき　無沙汰をする事も自然あるまいから。

さりぬべくは　都合がついたら移轉させよう。

のどかなる　閑靜な隱家を用意してある。

思ふからに　我と我心を比つて見るはたから、先頃の匂宮のお姿が目先にちらつくので。うたて心憂の　愛相のつきたいやな身だ。

御心ばへの　今迄貴女はこんな氣質ではなく大やうであつたからこそ私も氣樂で嬉しかつたのです。

すこしも　一寸でも私がおろそかに思ふやうなら、かうまで苦心して通つて來られる輕い身分でも又道の遠さでもないのだのに。

今より添ひたる　薫の上に又匂宮といふ人が出來て。かたみに　それ〴〵別々の物思ひをしてゐる。

みに物思はし。山の方は霞み隔てて、寒き洲崎に立てる鵲の姿も、所がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはる〴〵と見わたさるるに、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど、ほかにては目馴れぬ事どものみ取集めたる所なれば、見給ふ度ごとに、なほそのかみの事の只今の心地して、いと斯からぬ人を見かはしたらむだに、珍らしき、中のあはれ多く添ひぬべき程なり。まいて戀しき人によそへられたるもこよなからず、やう〳〵物の心知り、都馴れゆく有樣のをかしきも、こよなく見まさりしたる心地し給ふに、女は、かき集めたる心のうちに催さるる涙、ともすれば出で立つを、慰めかね給ひつつ、

薫「宇治橋の長き契りは朽ちせじをあやぶむ方に心騒ぐな

今見給ひてむ」と宣ふ。

浮舟　絶間のみ世には危き宇治橋を朽ちせぬものとなほ頼めとや

さき〴〵よりもいと見捨てがたく、暫しも立ちとまらまほしく

鵲　鷺の事。かささぎの昔から鷺の意に用ひたのである。

そのかみの事の　大君在世當時の事が只今のやうに思はれて。いと斯からぬ　浮舟（大君に似た）のやうでない人と對坐してゐてでも、二人の間には新らしい愛情が多分に出てきさうな場面である。

都馴れゆく　都の手振りになじんでゆく姿の心を引くにつけても。

宇治橋の　貴女との縁は永久に盡きる筈はないのだから、あぶながつてくよ〳〵なさるな。今見給ひてむ　私の本心は直に分りませう。

絶間のみ　杜絶えがちで今でも不安なのですもの、それでも堅く盡きぬ縁と信頼せよと仰しやるのですか。當時宇治橋は朽ちてゐて、板がところ〳〵拔けてゐたものらしい。

見捨てがたく　浮舟を見捨てて歸りがたく。

人の物いひ　拾遺雜秋「こゝにしも何匂ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に」

心安きさまにて　京に引取った上で氣樂にあはう。

梅が枝　催馬樂、呂、梅枝「梅が枝に來居る鶯や、春かけて、はれ、春かけて鳴けども未だや雪は降りつつ、あはれ、そこよしや、雪は降りつつ」

御宿直所　禁中にての御居室。

闇はあやなし　古今春下「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るる」—闇の中でも香は隱れないといつたかたちで、薫は名にも呼ばれて居る程香氣の高い人であつた。

衣片敷き　浮舟が私を待つて居る事だらう。古今戀四「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」

思さるれど、人の物いひの安からぬに、今更なり、心安きさまにてこそ、など思しなして、曉に歸り給ひぬ。いとようも大人びたりつるかなと、心苦しくおぼし出づること、ありしにまさりけり。

二月の十日の程に、うちに詩作らせ給ふとて、この宮も大將も參りあひ給へり。折にあひたる、物の調べどもに、宮の御聲はいとめでたくて、「梅が枝」など謠ひ給ふ。何事も人よりはこよなうまさり給へる御さまにて、すずろなる事思しいらるるのみなむ罪深かりける。雪俄かに降り亂れ、風など烈しければ、御遊び疾くやみぬ。この宮の御宿直所に、人々參り給ふ。物まゐりなどして、うち休み給へり。大將、人に物宣はむとて、すこし端近く出で給へるに、雪のやう〳〵積り、星の光におぼおぼしきを、闇はあやなしと覺ゆる匂ひ有樣にて、「衣片敷き今宵もや」とうちずじ給へるも、はかなき事を口ずさびに宣へるも、怪しくあはれなる氣色添へる人ざまにて、いと物深げなり。

事しもこそ　歌ふべき歌もあらうに、あれでは浮舟を深く思つて居るのだらう。

おろかには　薫が浮舟をおろそかには思はぬのだらう。

片敷く袖を　浮舟が待つて居つてくれるだらうとは私のみの推量だと思つて居つたに、薫も同様だとはさうだつたかなあ。それにしてもつらいなあ、これ程愛してくれる最初からの愛人をさしおいて、私の方を餘計に思つてくれる筈はない。

詩奉り　昨夜作つた詩を御覽に入れようと主上の御前に罷り出た匂宮の御容姿は。

今二つ三つ　實は薫は匂宮に一年の弟。

本　手本。

御門の御婿にて　薫は主上の御婿として不足はない。

公々しき方　政事上の實務。

詩講じ　詩の披講がすんで。

いかなる心地にて　どんな心の餘裕があつて詩なぞが作れるのだらうと、心も空で浮舟の事ばかり思ひつめてぼけたやうになつて居られた。

事しもこそあれ、と宮は寢たるやうにて御心さわぐ。おろかには思はぬなめりかし、片敷く袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり、わびしくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかでか附くべきぞ、とねたう思さる。

つとめて、雪のいと高う積りたるに、詩奉り給はむとて、御前に參り給へる御かたち、此頃いみじく盛りに清げなり。かの君も同じ程にて、今二つ三つまさるけぢめにや、すこしねびまされる氣色用意などぞ、殊更にも作りたらむやうに、あてなる男の本にしつべく物し給ふ。「御門の御婿にて飽かぬことなし」とぞ世の人もことわりける。詩講じ果てて皆人まかで給ふ。宮の御ふみを、すぐれたりとずじののしれど、何とも聞き入れ給はず、い

かなる心地にて斯かる事をもしいづらむと、空にのみ（ま）思ほし憧れたり。

かの人の御氣色にも、いとどおどろかれ給ひければ、あさましう（く）たばかりておはしましたり。京には友待つばかり消え殘りたる雪、山深く入るままに、やや降り（う）つみたり。常よりもわりなき稀の細道を分け給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり怖ろしう煩はしき事をさへ思ふ。しるべの内記は、式部の少輔をなむかけたりける。いづ方も〳〵、事々しかるべきつかさながら、いとつき〴〵しく引きあげなどしたる姿も、をかしかりけり。かしこには、おはせむとありつれど、斯かる雪にはと打解けたるに、夜更けて右近に消息したり。あさましうあはれと君も思へり。右近・（は）いかになり果て給ふべき御有樣にかと、かつは苦しけれど、今宵はつつましさも忘れぬべし。言ひかへさむ方もなければ、同じやうに睦まじくおぼいたる若き人の、心ざま

かの人の 匂宮は薫の様子を見て一層警戒の念が強くなったので餘りにも無理な工面をして。

友待つばかり 跡から降り續いて來る雪を待つ程に僅に。（花）其の雪を待伴とは詩にも作れり。（湖月抄）或は引歌があるのかも知れない。

常よりも 雪が深い爲にいつもよりも人通りのない難儀な細道を。

煩はしき 何か事件でも起きたら大變だと思ふ。

いづ方も 本官も兼官も共に重職ではありながら打つてつけの供人然と指貫を引上げたりしてゐる姿も滑稽であつた。

おはせむと 匂宮御來訪の由豫め沙汰はあつたもの。

消息したり 匂宮御入來の由を通じた。

君も 右近は勿論。

かつは 御親切は感謝しながらも

つゝましさも あたりへの氣兼も忘れて歡待する氣にもなりさうだ。

同じやうに 自分同樣浮舟がかはいがつてゐられる女房で氣立もあぶなげのないのを味方につけて。

・あぶなからぬを語らひて、「いみじく（う）わりなき事。同じ心にもて隱し給へ」といひてけり。もろともに入れ奉る。道の程に濡れ給へる御ぞの香の、所せう匂ふも、もて煩ひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむもてまぎらはしける。夜の程に・立ちかへり給はむも、なか〳〵なるべければ、ここの人目もいとつつましさに、時方にたばからせ給ひて、河よりをちなる人の家に、ゐておはせむと構へたりければ、先立てて遣したりける、夜更くる程に參れり。「いとよく用意してさぶらふ」と申さす。こはいかにし給ふことにかと、右近もいと心あわただしければ、寢おびれて起きたる心地もわななかれて、あやし童べの雪遊びしたるけはひのやうにぞ、ふるひあがりにける。「いかでか」なども言ひあへさせ給はず、かき抱きて出で給ひぬ。右近はここの後見にとどまりて、侍從をぞ奉る。いとはかなげなるものと明暮見いだす小さき舟に乘り給ひて、さしわたり給

同じ心に 私と一緒になつて人前を取繕つて下さい。

もて煩ひぬ 人前を取繕ふ上に邪魔になりさうであるが、薫の様子に似せてごまかした。

なか〳〵なる 却つて來ぬがましな位なので。

ここの人目も 山莊内に居る人々の手前も憚られるので。

先立てて 前以て準備の爲に遣しておいた所の時方が。

こはいかに これは一體どうなさるのかと浮舟は勿論右近も氣が氣でないので。浮舟をつれ出さうとした事に對しての驚き。

あやし童べ 河内本が穩かである。

いかでか 「いかでか參らむ」などの意。

ここの後見に 山莊の留守居に居殘つて。

つとつきて　匂宮にぴつたり寄添うて。

橘の小嶋　宇治から一町程川下にあつた島であるといふ。平等院の良橋の小嶋が崎と平家物語にはある。

ざれたる　洒落れた恰好をした橘の木が茂つてゐる。

年經とも　千年の綠を持つ橘の小嶋が崎で契るのだから二人の仲は永久に變るものではない。

珍らしからむ　見馴れた所ながら。

橘の小嶋は　貴方のお心は變りますまいが、どちらに身を寄せてよいか分らぬ浮舟のやうな自分は、身の行末が分りませぬ。

折から人のさまに　沈みわたつた有明の月、それに照らされた浮舟の美しい姿を見ては。

助けられつつ　匂宮自身も人から介錯されつつ。

時方が　その用意の家といふのは。

荒々しきに　未完成故。

ふ程、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細く覺えて、つとつきて抱かれたるも、いとらうたしと思す。有明の月すみのぼりて、水のおもても曇りなきに、「これなむ橘の小嶋」と申して、御船暫しさしとどめたるを見給へば、大きやかなる岩のさまして、ざれたる常磐木の蔭しげれり。「かれ見給へ。いとはかなけれど、千年も經べき綠の深さを」と宣ひて、

年經ともかはらむものか橘の小嶋の崎にちぎる心は

女も、珍らしからむ道のやうに覺えて、

橘の小嶋は色もかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

折から人のさまに、をかしくのみ何事も思しなす。かの岸にさしつきており給ふに、人に抱かせ給はむはいと心苦しければ、抱き給ひて、助けられつつ入り給ふを、いと見苦しく、何人を斯くもて騷ぎ給ふらむ、と見奉る。時方が叔父の因幡守なるが領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだいと荒々しき

殊にさはらず　隙間だらけ故風も十分には防がれず。

垂氷　今いふつらら。

宮も所せき　匂宮も人に見られてならぬ窮屈な道中故、微行に必要な程度の略服である。

引きつくろふ　浮舟は身づくろひもせず投げやりにしてあるわが姿を恥かしく感じ。

まぎれむ　狹い家故隱れる所もない。

なつかしき程なる　着馴れて糊氣の稍落ちた白い御衣だけを五枚程、袖口や裾のかさなりまでいろつぽく。

常に見給ふ　匂宮が始終見馴れてゐられる中君でも。

斯かるさへぞ　氣に入つた女のあるとて斯かる打解け姿までが。

これさへ　右近ばかりか侍從までが匂宮との關係をすつかり知る事よと。

これは　そこにゐるのは又誰だ。

わが名　古今墨滅「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へよわが名洩らすな」

に、網代屛風など、御覽じも知らぬしつらひにて、風も殊にさはらず、垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇りて降る。日さしいでて、軒の垂氷の光りあひたるに、人の御かたちもまさる心地す。宮も、所せき道の程に、かるらかなるべき程の御衣どもなり。女も、ぬぎすべさせ給ひてしかば、ほそやかなる姿つき、いとをかしげなり。引きつくろふ事もなく打解けたるさまを、いと恥かしく、まばゆきまで淸らなる人にさし向ひたるよと思へど、まぎれむ方もなし。なつかしき程なる白き限りを五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、いろいろにあまたかさねたらむよりも、をかしう着なしたり。常に見給ふ人どもも、かくまで打解けたる姿などは見ならひ給はぬを、斯かるさへぞなほ珍らかにをかしう思されける。侍從も、いとめやすき若人なりけり。これさへ斯かる(事)を殘りなう見るよ、と女君はいみじと思ふ。宮も「これは又誰ぞ。わが名漏らすなよ」と

ここの　この家の留守居番の男が時方を主人と思つて尊敬しているので、時方は匂宮たちのおいでになる部屋の遣戸を隔てゝ得々として居つた。

声引きしじめ　声を落して恐縮しつつ。宿守が時方を尊敬するさま。

をかしと　匂宮のゐられるのを知らずに自分の如きを尊敬してゐるから、をかしくて返事も出来ない。

いと怖ろしく　厳重に潔斎せねば怖ろしい結果になると陰陽師が占つた物忌故に。

斯くて見えけむ　今と同じ様に打解けて逢つただろう。

語り給ふ　薫と浮舟との間をさく為に。

かの耳とどめ　詩会の夜の薫の口ずさみ。一一六頁一三行。

憎きや　宮の卑劣な態度を地から評した詞。

いみじくかしづかる　時方をひやかしての詞。えらく大事にされるお客様よ。そんなことして見つけられるなよ。

大夫　時方は五位故いふ。

見やり給ふ　匂宮が。これを浮舟がと見る説もあるが、敬語が用ひてあるから、これを浮舟の動作と見ることは出来ない。

口がため給ふを、いとめでたしと思ひ聞えたり。ここの宿守にて住みけるもの、時方を主と思ひてかしづきありければ、このおはします遣戸を隔てて、所得顔に居たり。声引きしじめ、かしこまりて物語しゐたるを、いらへもえせず、をかしと思ひけり。「いと怖ろしくうらなひたる物忌により、京のうちをさへ去りて慎むなり。ほかの人寄すな」といひたり。人目も絶えて心やすく語らひ暮し給ふ。かの人の物し給へりけむに、斯くて見えけむかし、と思しやりて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやんごとなくて持ち奉り給へる有様なども語り給ふ。かの耳とどめ給ひし一言は、宣ひいでぬぞ憎きや。時方、御手水御菓子など、取次ぎてまゐるを御覧じて、「いみじくかしづかるめる客人のぬし、きてな見えそや」と誡め給ふ。侍従、色めかしき、若人の心地に、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、かのわが住む方を見やり給へ

道　京と宇治との間の道。

あはれ多う　同情を引くやうに潤色して。

峯の雪　峯の雪や汀の氷を踏分けて一方ならぬ艱難はしつつも道にはまごつきませんが貴女には盲目になつて居ります。

木幡の里に　拾遺雑恋「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば」—

降り乱れ　降り乱れ汀に凍る雪よりもはかなく、地上にも届かないうちに中空で私は消えてしまふ事でせう。

この中空を　「中空にて」の詞を匂宮が気にかけられた。匂宮と薫との中間に挟まつて迷つてゐるやうに聞えるので、それが匂宮には不満であつたのである。

御物忌二日と　匂宮は物忌の為宇治滞在は二日間と京の方を取繕つてあるので。

いひまぎらはし　他の女房達の手前うまい具合に取繕つて。

あはひ　かさねの色の取合せも面白く。

ば、雪の絶え絶えに、梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きらきらと夕日に輝きたるに、よべ分けて来し道のわりなさなど、あはれ多う添へて語り給ふ。

「峯の雪みぎはの氷踏分けて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召出でて手習し給ふ。

「降り乱れ汀に凍る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

と書き消ちたり。この「中空」を咎め給ふ。げに憎くも書きてけるかなと、恥かしくて引きやりつ。さらでだに見るかひある御ありさまを、いよいよあはれにいみじと人の心にしめられむと、尽し給ふ言の葉気色、いはむ方なし。御物忌二日とたばかり給へれば、心のどかなるままに、かたみにあはれとのみ深くおぼしまさる。右近は、よろづに例のいひまぎらはして、御ぞなど奉りたり。今日は乱れたる髪すこしけづらせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく著かへて

褶　上裳で主人などに侍する時着る。
あざやぎたれば　あざやかな衣裳に着かへたので。
姫宮に　女一宮に浮舟を侍女としてあげたならば大事に寵愛なさる事だらう。
かばかりの　浮舟程の美してゐるのはあるまい。
その程　私が迎み出す迄の間に薫に逢つたら容赦せぬ。
いとわりなき　それは本當に迷惑な事だと浮舟は思つて、返事も出來なかつた。
目の前にだに　今の一時だけすら薫を自分に思ひかへる心はないのだらうと悲しく思召す。
恨みても泣きても　古今戀五「恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして」
これより別れて　家の内にも入らず妻戸の所からすぐに歸京なさるにつけても。

居給へり。侍從も「あやしき褶着たりしを、あざやぎたれば、」御手水まゐらせ給ふ。姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにし給ひてむかし、いとやんごとなききはの人多かれど、かばかりのさましたるは難くや、と見給ふ。かたはなるまで遊びたはぶれつつ暮し給ふ。忍びてゐて隱してむ事を返す〴〵宣ふ。「その程、かの人に見えたらば」と、いみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、いらへもやらず、涙さへ落つる氣色、更に目の前にだに思ひ移らぬなめりと、胸痛うおぼさる。恨みても泣きても、よろづ宣ひあかして、夜ぶかくゐて歸り給ふ。例の抱き給ふ。「いみじく思すめる人は、かうはよもあらじよ。見知り給ひたりや」と宣へば、げにと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふも、飽かずいみじと思さる。

かやうのかへさは　かうした忍びありきから歸られた折には、まだ中君のゐる二條院に休息してゐられて參内はなさらぬ。
御文　匂宮から浮舟への。
かのさかしき乳母　二條院で匂宮が浮舟に迫つた時邪魔した乳母の事。東屋四三三頁。
出でたりける　暇を頂いてむすめの方へ行つて居たその乳母が。
かくあやしき　こんなみすぼらしい住居ではあるが、薫が世話して下さるのを將來の樂しみに思ひそれを期待して母君も心を慰めて居つたところへ。
やう〳〵人求め　母君が次々と女房を探し求め小綺麗な童女などを迎へて浮舟方へ送つてこられた。
それこそは　薫に引取られるのが本當だと最初から待ち續けてゐたのだ。
いとうたてある　自分ながらもいやらしくなる程である。

かやうのかへさは、なほ二條の院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて、物なども絶えて聞召さず、日を經て青み痩せ給ひ、御氣色かはるを、うちにもいづくにも思ほし歎くに、いとど物さわがしくて、御文だにこまかには書き給はず。かしこにも、かのさかしき乳母、むすめの子生む所に出でたりける、歸り來にければ、心やすくもえ見ず。かくあやしきすまひを、ただかの殿のもてなし給はむさまを、ゆかしく待つ事にて母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまながらも、近くわたしてむ事を思しなりにければ、いとめやすく嬉しかるべき事に思ひて、やう〳〵人求め、童のめやすきなど迎へておこせ給ふ。わが心にも、それこそはあるべき事に初めより待ちわたれ、とは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひいづるに、恨み給ひしさま、宣ひし事ども、面影につと添ひて、聊かまどろめば、夢に見え給ひつつ、いとうたてあるまで覺ゆ。

雨降りやまで日頃多くなる頃、いとど山路おぼし絶えて、わりなく思されければ、親のかふこは所せきものにこそ、とお(も)・ぼすもかたじけなし。盡きせぬ事ども書き給ひて、

ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるる頃のわびしさ

筆にまかせて書き亂り給へるしも、見どころあり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心地に、いと(ど)・斯かる心を思ひもまさりぬべけれど、初めより契り給ひしさまも、さすがにかれはなほいと物深う、人がらのめでたきなども、世の中を知りにし初めなればにや、かかる憂き事聞きつけて、思ひうとみ給ひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもて煩はれめ、かく心いられし給ふ人、はた(いと)・あだなる、御心の本性とのみ聞きしかば、かかる程こそあらめ、又かうながらも京に(も)・隱し据ゑ給ひ、ながらへても思しかずまへむにつけては、かのうへの思さむこと、

いとど　只でさへ主上や母宮から出あるきを制せられてゐる所へ數日來の長雨故。

親のかふこは　拾遺戀四人麻呂「たらちねの親のかふこの繭ごもりいぶせくもあるか妹にあはずて」

ながめやる　眺めやる宇治の方の雲も見えぬ迄に心のみか空までが眞暗になつてゐる此頃の悲しさよ。「ながめ」に長雨がひゞかしてある。

殊にいと重く　格別重々しいといふやうな所はない浮舟の若い心にかうした手紙を見て一層戀も募りさうであるが。「斯かる心」は匂宮の心と解かなければなるまいが、それならば「御心」となるべきである。今は河内本による。

世の中を　男女の仲といふものを經驗した最初の相手であるからであらうか。「初めなればにや」の下に「あらむ」が省略してある。

いかでかあらむ　とても生きてはゐられぬ。

いつしかと　早く薫の手で京に引取つて貰ひたいと氣を揉んでゐる母親からも。

かく心いられ　かう身も世もあらぬやうに自分を愛してゐられるとはいへ、かうして愛情のさめない間こそともかくも、間もなく忘れられてしまふだらう。匂宮は根が浮氣者と始終聞いてゐるから。

又かうながらも　よしや又今め

よろづ隱れなき世なりければ、怪しかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出で給ふめり、ましてわが有樣のとかくもあらむを、聞き給はぬやうはありなむや、と思ひたどるに、わが心も疵ありてかの人にうとまれ奉らむ、なほいみじかるべし、と思ひ亂るる折しも、かの殿より御使あり。これかれと見るも、いとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥し給へれば、侍從右近見あはせて、なほ移りにけり(な)・と、いはぬやうにていふ。侍從「ことわりぞかし。殿の御かたちを、たぐひおはしまさじと見しかど、この御有樣はいみじかりけり。うち亂れ給へる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを見る〳〵、え斯くてあらじ。后の宮にも參りて、常に見奉りてむ」といふ。右近、「うしろめたの、御心の程や。殿の御有樣にまさり給ふ人は誰かはあらむ。(御)・かたちなどは知らず、御心ばへけはひなどよ。なほこの御事は、いと見苦しきわざかな。いかがならせ給はむとす

愛情がつゞいて、私を京にかくまつておかれて、長く一人前にお世話下さるにつけては。

かのうへの　かのうへの思さむことゝいかゞあらむの意。これから薫に對する話に移る。

よろづ隱れなき云々

怪しかりし　二條院で夕暮にけしからん事のあつたその原因だけですら匂宮はかうして搜し出しもなさつたやうだ、まして薫は。

わが心も疵ありて　自分にも缺陷があつて薫に嫌はれるだらうそれは。

これかれと　あれこれと雙方からの手紙を見るのも具合がわるいから。

言多かりつる　長々と書き續けた匂宮の御文を。

ことわり　思ひ移られるのも御尤もだ。

かばかりの　これ程愛して下さるのを知りつつ此儘じつとしてゐる事は出來ませぬ。

后の宮にも　明石中宮の御方へも奉公に參つて。

御心ばへけはひなどよ　お氣立やら態度やらそんなやうな點は申分ない方だ。

らむ」と、二人して語らふ。心一つに思ひしよりは、空言もたより出で來にけり。のちの御文には、「思ひながら日頃になる事。（を）時々はそれよりもおどろかい給はむこそ、思ふさまならめ。おろかなるにやは」など端書に、「水まさる遠の里人いかならむ晴れぬながめにかきくらす頃常よりも思ひやり聞ゆることまさりてなむ」と、白き色紙にて立文なり。御手もこまかにをかしげならねど、書きざま故々しく見ゆ。宮はいと多かるを、小さく結びなし給へる、さまざまをかし。「まづかれを、人見ぬ程に」と聞ゆ（れは）。「今日はえ聞ゆまじ」と、恥ぢらひて、手習に、「里の名を我身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き」宮のかき給へりし繪を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじき事ぞと、とざまかうざまに思ひなせど、ほかに絶えこもりてやみなむは、いとあはれに覺ゆべし。

心一つに　右近一人で氣を揉んで居つた時よりも侍從といふ相談相手が出來たので。
のちの　あとから來た。
思ひながら　氣にかけながら久しく御無沙汰して居ります。
おろかなるに　御無沙汰がちなのも、あなたを疎々しく思ふからではありません。
水まさる　晴れやらぬ物思に心までも眞暗になつてゐる頃、長雨に宇治川の水もまさる宇治の里人（浮舟）はどうして暮してゐる事だらう。
立文　艶書めかさず、すくすくしき立文である。立文は儀禮的な表沙汰に用ひる樣式である。
宮は　匂宮は長文の手紙を殊更小さく結文にされた。
里の名を　宇治のう（憂）といふ事を私の身の上に感じて居りますので、山城の宇治のあたりは一人住み憂く思ひます。この歌は新拾遺集中に「題知らず紫式部」として入る。
宮のかき　男女の繪。一〇四頁。
ほかに　薫に引取られて匂宮に逢へなくなるのは。

「かきくらし晴れせぬ峯の雨雲にうきて世を經る身をもなさばやまじりなば」と聞えたるを、宮はよよと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらむかしと思しやるにも、物思ひて居たらむさまのみ、面影に見え給ふ。まめ人はのどかに見給ひつつ、あはれ（に）・いかにながむらむと思ひやりて、いと戀し。

「徒然と身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて」とあるを、うちもおかず見給ふ。

女宮に物語など聞え給ひてのついでに、「なめしともや思さむと、つつましながら、さすがに年經ぬる人の侍るを、あやしき所に捨ておきて、いみじく物思ふなるが心苦しさに、近う呼びよせて（む）・と思ひ侍る。昔より異樣なる心ばへ侍りし身にて、世の中を、すべて例の人ならで見過ぐしてむと思ひ侍りしを、かく（て）・見奉るにつけて、ひたぶるにも捨てがたければ、ありと人にも知らせざりし人のうへさへ、心苦しう罪（も）・得ぬべき心地し」

かきくらし　落着かぬ氣持で生きてゐる我身を涙の雨雲にして、いつそ火葬の煙となつてしまひたい。即ち死んでしまひたいの意。
まじりなば　花鳥引歌「白雲の晴れぬ雲居にまじりなば何れかそれと君は尋ねむ」
まめ人は　生眞面目な薫は。
徒然と　わが身のつらさを知る雨（涙）がつれづれと絶間なく降るので、宇治川のみか袖まで一層水嵩が增して堪へがたい。古今戀四・伊勢物語「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」古今戀三・伊勢物語「つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし」上二首を本歌とした歌。
さすがに　「心苦しさに」にかゝる。
昔より　私は若い時から人と違つて遁世の志を持つて居りました。
かく見奉る　貴女と結婚したので、一般にも世を捨てがたくて。
ありと人にも　生きて人並に夫婦暮しをすると、今までその存在を人にも知らせなかつた隱し妻の事まで氣の毒になつて、捨てて置くのは罪になるやうに思はれて、こちらに引取らうかと思ひます。

いかなる事に　どんな事に對して氣兼ねするものかも知らないのに、私に斟酌は入りませぬ。

うちなどに　浮舟を引取つたならば、主上にあしざまに告口する人もあらうかと心配してゐます。一體世間の口といふものは實におもしろくもないけしからぬものですよ。

斯かる料　さては隱し妻を引取る爲の家であつたのだ。

内記が知る人の　内記の妻の親なる大藏の大夫仲信。八八頁及九六頁參照。大藏丞で五位に敍せられた人を大藏大夫といふ。

聞きつぎて　内記の妻の口を通じて。

繪師ども　室内裝飾の繪をかく繪師。

さすがに　假初の隱家ながらもさすがに念を入れてかかせなさる。

ずらう　受領。

下つ方　下京。

いと忍びたる人　秘密の女を當分隱しておきたいから家を貸して下さい。

大事と　匂宮が重大事と思召して御頼まれるので斷るのも畏れ多いから。

て」など聞え給へば、「いかなる事に心おくものとも知らぬを」といらへ給ふ。「うちになど、あしざまに聞召さする人や侍らむと、世の人の物いひぞ、いとあぢきなくけしからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。遣りたるところに渡してむと思し立つに、「斯かる料なりけり」など、花やかにいひなす人やあらむなど、苦しければ、いと忍びて、障子張らすべき事など、人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに、睦まじく心やすきままに、宣ひつけたりければ、聞きつぎて、宮には隱れなく聞えけり。「繪師どもなども、御隨身どものなかにある睦まじき殿人などをえりて、さすがにわざとなむせさせ給ふ」と申すに、いとど思し騷ぎて、わが御乳母の、遠きずらうの妻にて下る家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人暫し隱いたらむ」と語らひ給ひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思した

かくなむと　浮舟をこれ〱の場所へ引取らうと思ふ。決して人に知られぬやうに用意せよ。

うちに　河内本には、うちの右傍に宇治の字をあててある。

乳母いとさかし　例の邪魔だてした乳母がさしでしやばつて浮舟を番してゐるのでも出る事はむづかしからうといふ意を。

さそふ水あらば　古今雜下「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」

浮きたる　腹がきまらぬから。

思ひめぐらす程　思案をきめる間取分そこに居たいと。

少將の妻　常陸介の繼二女。

殿より　京への引越しについて家から女房達の衣裳まで委細御配慮を頂きました。

いかで淸げに　引越しについては何かから何まで綺麗にしたいと思つて居りますけれども、私一人の計らひでは、ほんのみすぼらしい事しか出來ませぬ。ままは乳母の意。

思ひ給ふれど　湖月抄も河内本も「思給れど」

るに、かたじけなければ、「さらば」と聞えけり。これをまうけ給ひて、すこし御心のどめ給ふ。この月の晦日がたにくだるべければ、やがてその日渡さむと思しかまふ。「かくなむと思ふ。ゆめ〱」といひやり給ひつつ、おはしまさむ事はいとわりなく、ここにも、乳母いとさかしければ、難かるべきよしを聞ゆ。

大將殿は、卯月の十日となむ定め給へりける。さそふ水あらば、とは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御もとに暫しわたりて、思ひめぐらす程あらむ、とおぼせど、少將の妻、子生むべき程近くなりぬとて、修法讀經など隙なくさわげば、石山にもえ出で立つまじ。母ぞこちわたり給へる。乳母「殿より、人の裝束なども、こまかに思しやりてなむ。いかで淸げに何事もと思ひ給ふれど、ままが心一つには、あやしくのみぞしいで

八重だつ山に　河海抄引歌「白雲の八重だつ山にこもるとも思ひたちなば尋ねざらめや」

今日も宣へるを　今日も手紙で仰しやつて來たのだもの。

日頃あやしくのみなむ　此頃中妙な事ばかりです。

いかなる御心地ぞと　この「と」は「物怪などにやあらむ」との「と」と共に「思へど」に續く。「姙娠か」と疑つた言葉である。姙娠かと尋ねたのであることは、次に女房が石山も云々と注意してゐるので明かである。

有明の空を　匂宮と舟にのつて川を渡つた夜の事。

さるべき事も　のつぴきならぬ心配をもしておいでになつた間に。

侍らむかし」などいひさわぐが心地よげなるを見給ふにも、君は、けしからぬ事どもの出で來て人笑へならば、誰も〳〵いかに思はむ、あやにくに宣ふ人はた、八重だつ山にこもるとも、必ず尋ねて、我も人もいたづらになりぬべし、なほ心やすく隱れなむことを思へ、と今日も宣へるを、いかにせむ、と心地あしくて、臥したまへり。「などか斯く例ならず、いたく青み痩せ給へる」とおどろき給ふ。「日頃あやしくのみなむ、はかなき物も聞召さず、惱ましげにせさせ給ふ」といへば、「怪しきことかな。物怪などにやあらむ」と、「いかなる御心地ぞ」と思へど、「石山もとまり給ひにきかし」といふも、傍痛ければ伏目なり。暮れて月いと明かし。有明の空を思ひいづる、涙のいととゞめがたきは、いとけしからぬ心かなと思ふ。母君、昔物語などして、あなたの尼君呼びいでて、故姫君の御有樣、心深くおはして、さるべき事も思し入れたりし程に、目

おはしまさまし　大君御存生ならば、大君は薫の夫人として中君と音信しあつて、淋しい境遇であつた御二人は昔とかはつて此上もないお仕合せでございましたでせうに。

わがむすめは　わが娘の浮舟とても中君等と何の違ひがあらう、同じ八宮の女だ。思ひ通りの運が今後も續いたならば中君にも劣るまいものを。

世と共に　浮舟の事については常住心配ばかりして居りましたが、形勢も少しく緩和されて、かうして薫の側に引越していつてしまふやうですから、これから後は、わざ〳〵思ひ立つて、此處に來られるかどうか分りますまい。

こまやかに　とつくり浮舟にお目にかゝる事も。

うち捨てて　浮舟が私をおいて京へお引越しなさつたならば心細うございませうが。

かかる御すまひは　浮舟がこんな山の中においでになる事は、將來を思ふと氣のもめる事とばかり考へて居りましたのに、それは嬉しく思ひます。

世に知らず　薫が又とないほどに行儀を愼んでいらつしやる方と存じ上げてをりますが、さうした御身の上で、かうまで探出してまでいたゞきましたのだから、並大抵の思召ではあるまいと嘗て申上げておきましたが、決していゝ加減な事を申したのではありませぬ。

に見す〳〵消え入り給ひにし事など語る。「おはしまさましかば、宮の上などのやうに、聞えかよひ給ひて、心細かりし御有樣どもの、いとこよなき御さいはひにぞ侍らましかし」と思ふにも、わがむすめは他人かは、思ふやうなる宿世のおはし果てば、劣らじを、など思ひ續けて、「世と共に、この君につけては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、すこしうちゆるびて、斯く渡り給ひぬべかめれば、此處にまゐりくること、必ずしも殊更にはえ思ひ立ち侍らじ。かかる對面の折々に、昔の事も心のどかに聞え承らまほしけれども」など語らふ。「ゆゆしき身とのみ思ひ給へしみにしかば、こまやかに見え奉り聞えさせむも、何かはとつつましくて過ぐし侍りつるを、うち捨ててわたらせ給ひなば、いと心細くなむ侍るべけれど、かかる御すまひは、心もとなくのみ見奉るを、嬉しくも侍るべかめるかな。「世に知らずおも〳〵しくおはしますべかめる殿の御有樣にて、

宮のうへの　中君が勿體なくも浮舟を二條院に引取つて可愛がつて下さいましたが。

中空に　身の置き所もないやうで肩身のせばい身の上だと。

心ばせあらむ　心ある若い女房は居にくがつて居ります。

大方は　一體が大層結構な御殿ですが、さうした筋の事で中君から身の程を辨へないと睨まれるのがたまらない。

大輔がむすめ　右近。四二頁に見える女房で宇治の右近とは別人。

まして　右近ですらさうだから、まして妹の私は中君に憚らねばならぬ。

むくつけや　氣味のわるい。

かく尋ね聞えさせ給ひしも、おぼろけならじ」と聞えおき侍りにし、浮きたる事にやは侍る」などいふ。「のちは知らねど、只今は斯く思し離れぬさまに宣ふにつけても、ただ御しるべをなむ思ひいで聞ゆる。宮のうへの、忝くあはれに思したりしも、つつましき事などのおのづから侍りしかば、中空に所せき御身なりと、思ひ歎き侍りて」といふ。尼君うち笑ひて、「この宮の、いとおわがしきまで、色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ。「大方はいとめでたき御有様なれど、さる筋のことにて、うへのなめしと思さむなむわりなき」と大輔がむすめの語り侍りし」といふにも、さりや、まして、と君は聞き臥し給へり。「あなむくつけや。御門の御むすめを持ち奉り給へる人なれど、よそよそにて、あしくもよくもあらむはいかがはせむと、おほけなく思ひなし侍る。よからぬ事を引きいで給へらましかば、すべて身には悲しくいみじ

遂に聞きにくき　とどのつまりは外聞のわるい事が起るだらう。

この水の　水の音が耳につくのも入水を暗示するのである。

斯からぬ　同じく川でもこんなに怖しくない川もあるものだ。

世に似ず　又となく荒々しい所に永年住んでいらつしやるのだもの、孫が可愛さうに思召すのも尤もなわけのものだ。

うまごのわらは　孫なる小童。

誰も〳〵　母君を始め薫や匂宮など。

あへなくいみじ　あつけなく悲しいと思召すのもほんの一時だけの事ですむが。

ながらへて　生きてゐて、つらい事でも起きて、人の物笑ひになるやうなことになつたら、その物思ひは永久に盡きる時はないのだ。

さはりどころも　自殺の決行に邪魔になるものもなささうで、萬事がさつぱりするやうに感ずるけれども。

と思ひ聞ゆとも、又見奉らざらまし」など、いひかはす事どもに、いと心膽もつぶれぬ。なほわが身を失ひてばや、遂に聞きにくき事は出で來なむ、と思ひ續くるに、この水のおとの怖ろしげに響きて行くを、「斯からぬ流れもありかし。世に似ずあらましき所に年月を過ぐし給ふを、あはれと思しぬべきわざになむ」など、母君したりがほに言ひゐたり。昔よりこの河の早く怖ろしきことをいひて、「さいつ頃、渡守がうまごのわらは、棹さしはづして落ち入り侍りにける。すべていたづらになる人多かる水に侍り」と、人々もいひあへり。君は、さてもわが身行くへも知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじと暫しこそ思ひ給はめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、いつかその物思ひの絶えむとする、と思ひかくるにはさはりどころもあるまじう、さわやかによろづ思ひなさるれど、うち返しいと悲し。親のよろづに思ひいふ有様を、寢たるやうに

御手洗川に　戀故の悩みであるのに、母君はさうとも知らずに色々と心配する。「伊勢物語」「戀せじと御手洗川にせし御禊神は受けずもなりにけるかな」

よくさるべからむ　然るべき家庭を詮索して信用のおける侍女を雇入れ、新參の氣心の分らぬ者はつれてゆかないで此處へ殘しておきなさい。

やんごとなき　身分のいい同志では、ご本人こそおだやかに御理解下さりもしようが、不和になると、侍女達の間からうるさい事も起るでせう。

かしこに煩ひ　常陸介の次女即ち少將の妻。

又あひ見でもこそ　これきり母君にはあはずに死ぬのかも知れぬ。

暫しも　當分の間なりと母君の所へ行って來たい。

かしこも　常陸介方も次女の出產で。

この人々も　侍女達も私方では一寸した引移りの準備も出來ない程手狹ですから。

武生の國府に　あなたがいくら遠方に行かれても私は忍んであひに行きませうものを。催馬樂道の口「道の口武生の國府に我はありと、親には申したべ、心あひの風や、さきんだちや」武生は越前。

てつくづくと思ひみだる。惱ましげにて痩せ給へるを、乳母にもめひて、さるべき御祈りなどせさせ給へ、祭祓などもすべきやうなどいふ。御手洗川に御禊せまほしげなるを、斯くも知らでよろづにいひさわぐ。「人ずくななめり。よくさるべからむあたりを尋ねて、今參りはとどめ給へ。やんごとなき御中らひは、正身こそ何事もおいらかに思さめ、よからぬ中となりぬるあたりは、煩はしきこともありぬべし。かいひそめて、さる心し給へ」など、思ひいたらぬ事なく、いひおきて、「かしこに煩ひ侍る人も、おぼつかなし」とて歸るを、いと物思はしく、よろづ心細ければ、又あひ見でもこそ・・・と思へば、「心地のあしく侍るにも、見奉らぬがいとおぼつかなく覺え侍るを、暫しも參りこまほしくこそ」と慕ふ。「さなむ思ひ侍れど、かしこもいと物さわがしく侍り。この人々も、はかなき事などえしやるまじく、せばくなど侍ればなむ。武生の國府に

惱ましと　御病氣の經過御容體如何。

みづからと　自身がお見舞に參上したいと思ひますが、餘儀ない差支が多くて。

この程の　貴女を引取るとなると、一日の日が長いやうな氣がして、樂しいといふよりも却つて苦しい。

風の靡かむ方も　誰の方へ靡くのではないかと心配で。伊勢物語。古今戀四「須磨の海人の鹽燒く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」後拾遺戀二實方「浦風になびきにけりな里のあまのたく藻の心よわさに」

雨降りし　長雨の頃。一二七頁參照。

かの少輔　大内記兼式部少輔。

私に　主人の御用ではなく。

かうの君　出雲權守時方。

うつろひ給ふとも、忍びては參りきなむを、なほなほしき身の程は、斯かる御ためこそいとほしく侍れ」など、打泣きつつ宣ふ。殿の御文は今日もあり。「惱ましと聞えたりしを、いかが」ととぶらひ給へり。「みづからと思ひ侍るを、わりなき障り多くてなむ。この程の暮しがたさこそ、なかなか苦しく」などあり。宮は、「昨日の御返りもなかりしを、いかに思しただよふぞ。風の靡かむ方もうしろめたくなむ、いとどほれまさりてながめ侍る」など、これは多く書き給へり。雨降りし日來あひたりし御使どもぞ、今日も來たりける。殿の御隨身、かの少輔が家にて時々見るをのこなれば、「まうとは何しにここには度々參るぞ」と問ふ。「私にとぶらふべき人のもとに、まうでくるなり」といふ。「私の人にや艶なる文はさし取らする。氣色あるまうとかな。物隱しはなぞ」といふ。「誠は、このかうの君の御文、

おの〳〵　薫の使も匂宮の使もそれ〳〵主人の所へ歸つていつた。

左衞門の大夫　時方。

式部の少輔　大内記道定。

さまで尋ねむ　匂宮の知識の足りない下部は、これ程先方が注意して目をつけてゐるとは思はず、自分に事情をも深く知らなかつたので。

舍人の人　隨身の事。隨身は近衞府の舍人が務める。

殿　薫の三條の宮。

御前　前驅の人。

御文まゐらする人に　薫に御文を取次がせる人に、隨身がいふには。

この人　隨身はこの取次の人が聞くのも憚つて默つた儘畏まつてゐる。薫も樣子をけどつて家を出られた。

女房に奉り給ふ」といへば、事たがひつつ怪しと思へど、ここにて定めいはむも異樣なるべければ、おの〳〵參りぬ。かどかどしき者にて、供にある童を、「このをのこに、さりげなくて目つけよ。左衞門の大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に參りて、式部の少輔になむ御文は取らせ侍りつる」といふ。さまで尋ねむものとも、劣りの下衆は思はず、事の心をも深う知らざりければ、舍人の人に見あらはされにけむぞ口惜しきや。殿に參りて、今出で給はむとする程に御文奉らす。直衣にて、六條の院に后の宮出でさせ給へる頃なれば、參り給ふなりけり。事々しく御前なども數多もなし。御文まゐらする人に、「怪しきことの侍りつる。見給へ定めむとて、今までさぶらひつる」といふを、ほの聞き給ひて、歩み出で給ふままに、「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の聞かむもつつましと思ひて、かしこまりてをる。殿も、しか見知り給ひて出で給ひぬ。

宮たち　明石中宮腹の皇子達。

殊なる事も　御病氣は格別の事もない。

政官なれば　太政官の役人だから。太政官は詔書勅書宣命などの公務が多端であるから。

この御文も　浮舟からの返事を匂宮に。

せちに思す　深く愛する女からの手紙らしいなと。

文に心入れて　匂宮は手紙に氣を取られて直には薫の方へお向きなさらずにゐる所へ。

おとど出で給ふ　夕霧が出て來られた、と咳拂ひで匂宮にお知らせ申された。

引隱し　匂宮が手紙を隱されたとたんに夕霧が顏を出された。

例の御じやけの　いつもの御邪氣が久しく起らなくて喜んで居つたのに、怖ろしいものですね。

宮例ならず惱ましげにおは・・すとて、宮たちも皆參り給へり。上達部など多く參りつどひて、さわがしけれど、殊なる事もおはしまさず。かの内記は政官なれば、おくれてぞ參れる。この御文も奉・・・るを、宮、臺盤所におはしまして、戸口に召寄せて取り給ふを、大將、お前の方より・出で給ふ側目に見とほし給ひて、せちに・思すべかめる文の氣色かなと、をかしさに、立ちとどまり給へり。引きあけて見給ふ。紅の薄樣に、こまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れて、とみにも向き給はぬに、おとども立ちてとざまにおはすれば、この君は、障子より出で給ふとて、「おとど出で給ふ」と、打ちしはぶきて、驚かい奉り給ふ。引き隱し給へるにぞ、おとどさしのぞき給へる。驚きて御紐さし給ふ。殿もついゐ給ひて、「まかで侍りぬべし。例の御じやけの久しく起らせ給はざりつるを、怖ろしきわざなりや。山の座主只今請じにつかはさむ」と、いそがしげにて立

宮を先に立て　匂宮の御後について。

あなたに　夕霧邸に。

隨身氣色ばみつる　出がけに隨身がわけありげな樣子をして居つたのが怪しいと薫は思召したので。

御前など　前驅の人などが薫の前を引きさがつて松明をつける間に。

しかじか問ひ　斯樣々々問ひただしました所が。

その返りごとは　宇治からの返事はどのやうにして使に渡したか。

異方より　私の居た所とは別の所から渡しました。

ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。おとどは、宮を先に立て奉り給ひて、あまたの御子どもの上達部君だち・引きつづけて、あなたにわたり給ひぬ。この殿は、おくれて出で給ふ。・隨身氣色ばみつる怪し、と思しければ、御前などおりて火ともす程に、隨身召寄す。「申しつる事は何事ぞ」と問ひ給ふ。「今朝、かの宇治に、出雲の權守時方の朝臣のもとに侍る男の、紫の薄樣にて、櫻につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取らせ侍りつる、見給へつけて、しかじか問ひ侍りつれば、ことたがひつつ、空言のやうに申し侍りつるを、「いかに申すぞ」とて、童べをして見せ侍りつれば、兵部卿の宮に參り侍りて、式部の少輔道定の朝臣になむその返事は取らせ侍りける」と申す。君あやしと思して、「その返りごとは、いかやうにしてか出だしつるぞ」。「それは見給へず。異方より出だし侍りにける。下人の申し侍りつるは、赤き色紙のいと清らなる」となむ申し侍。

たがふ事なし　六條院で見た文に相違ない。

さまで見せつらむ　さうまで見屆けさせた事を機轉の利いた仕方と。

田舍びたる　宇治は田舍で遠方の事故、かうした筋合の間違はあり得ない事と思ひこんで居つたのは幼稚な考へであつた。

さても　それにしても、匂宮はさうした色事も、私にかかはりのない人に仰しやるならよい。

しるべし　中君へ御案内してお連れ申したその宇治に、さういふ事情のある宇治だのに。

うしろめたく　そんなうしろぐらい思ひつきをするといふ法はない。

それは今始めて　中君に對するわが戀は今始まつた道ならぬ戀といふ不體裁のものでもなく、かつて一夜添寢をしたといふ事が動機でもあるが、只わが心中にやましい所があるといふ事は、中君に取つては勿論自分に取つても心苦しく思はれるので遠慮してゐるのだが、それはばかげた事であつたのだ。

りつる」と聞ゆ。思しあはするに、たがふ事なし。さまで見せつらむを、かどかどしと思せど、人々近ければ、くはしくも宣はず。道すがら、なほいと怖ろしく隈なくおはする宮なりや、いかなりけむついでに、さる人ありと聞き給ひけむ、いかでいひ寄り給ひけむ、田舍びたるあたりにて、かやうの筋のまぎれは、えしもあらじと思ひけるこそをさなけれ、さても、知らぬあたりにこそさるすきごとをも宣はめ、昔より隔てなくて、怪しきまでしるべして、ゐてありき奉りしみにしも、うしろめたく思し寄るべしや、と思ふに、いと心づきなし。對の御方の御事を、いみじく思ひつつ年頃過ぐすは、わが心のおもさはこよなかりけり、さるは、それは今始めてさまあしかるべき程にもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、只心のうちの隈あらむは、わが爲も苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るもをこなるわざなりけれ、此頃かくなやましくし給ひて、例よりも人

いかではる／＼と　匂宮はどうして遥い宇治の浮舟の所へ文をやられるのだらう、もう通ひ始められたのぢやなからうか。
さやうの事に　匂宮は浮舟との関係に煩悶なさつて。
えおはせざりし　中君の所へ行き得なかつた時の匂宮の歎きは実に氣の毒なものであつた。
片端心得そめて　その理由の一端が分つて來てからはいろ／＼ととり合せて考へて見られるに。
この宮の　あの浮舟は好色な匂宮のつれあひには大變よい相手だ。
のく心地　自分は手を引きたい氣持はなさるが。
やんごとなく　本妻にする積りで関係し始めた女ならばともかく、さうではないのだから、やはり今迄通り單なる愛人としておかう。
今はとて　と言つてこれきり縁を切つてしまふのも戀ひしくも思はれるだらう。
人のため　匂宮といふ人は、女に對して後に氣の毒な目をする事なども別に考へてはゐられまい。

しげきまぎれに、いかではる／＼と書きやり給ひつらむ、おはしやそめにけむ、いと遥なる懸想の道なりや、怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、さやうの事に思し亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔を思しいづるにも、えおはせざりし程の歎きは、いといとほしげなりきかし、とつく／＼と思ふに、女のいたく物思ひたるさまなりしも、片端心得そめ給ひては、よろづ思しあはするに、いと憂し。ありがたきものは人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にては、いとよきあはひなり、と思ひも讓りつべく、のく心地し給へど、やんごとなく思ひそめ・・し人ならばこそあらめ、なほさるものにておきたらむ、今はとて見ざらむ、はた戀しかるべし、と人わろくいろ／＼心のうちに思す。われすさまじく思ひなりて捨ておきたらば、必ずかの宮呼び取り給ひてむ、人の

さやうに思す　最初愛して後に飽いた女を一品宮の御方へ二三人もあげておかれるのだ。
さて出で立ち　浮舟が同じ目にあつて宮仕に出てゐるを見たり聞いたりするのが氣の毒だ。
御みづから　薫御自身人のゐない時に随身を。
道定　大内記兼式部少輔で仲信の婿。
道定も　道定も浮舟に懸想もするだらう。
人に見えでを　誰にも見つからぬやうにして宇治へ行け。人に知られては阿呆らしい。
少輔が常に　道定が始終薫の動靜を聞合せ浮舟の事を尋ねたりした事を随身はさうだつたかと分つたけれども。
下衆に　随身如き下々の者に内情を委しくは知らせたくないのでお尋ねにもならない。
波越ゆる　私を待つて居つてくれるものと貴女の事を思つて居りましたのに外の男に心變りしてゐるとも知らずに。何といふばかな私であらう。古今東歌「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」

ため、のちのいとほしさをも殊にたどり給ふまじ、さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に・人二三人參らせ給ひたンなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ・いとほしく、など、なほ捨てがたく、氣色見まほしくて、御文つかはす。例の御隨身召して、御みづから人間に召寄せたり。「道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」。「さなむ侍る」と申す。「宇治へは常にやこのありけむをのこはやるらむ。かすかにてゐたる人なれば、道定も思ひかくらむかし」と、うちうめき給ひて、「人に見えでをまかれ。をこなり」と宣ふ。かしこまりて、少輔が常にこの殿の御事案内し、かしこの事問ひしも思ひあはすれど、物馴れて、え申し出でず。君も、下衆にくはしくは知らせじと思せば、問はせ給はず。かしこには、御使の例より繁きにつけても、物思ふことさま／＼なり。ただ斯くぞ宣へる。

「波越ゆる頃とも知らず末の松まつらむとのみ思ひけるかな

御返りごとを　この歌の意味が分つたやうな顔で御返事申上げるのも憚られるし、何かの間違ひでもあつたら妙な事であるから。

さすがにいたくも　匂宮のしつけだけにさすがに巧者ないひのがれをしたものだ、曾て見た事のない機轉だ。

まほならねど　薫の手紙は露骨ではないが匂宮の事をほのめかしてあるので。

けしからず　人前に出せないやうな妙な事になつてしまひさうだ。

ゆゆしく　手紙を見ずに其儘返すといふ事は不吉な忌むべき事でございますのに。

僻事の　間違ひがあるやうに思はれたので、おかどちがひかと思つて。

怪しと　何故手紙を其儘返すのか不思議であつたので。

人に笑はせ給ふな」とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。御返りごとを心得顔に聞えむもいとつつましく、僻事にてあらむもあやしければ、御文はもとのやうにして、「所たがへのやうに見え侍ればなむ。あやしく悩ましくて何事も」と、書き添へて奉りつ。見給ひて、さすがにいたくもしたるかな、かけて見及ばぬ心ばへよ、とほほゑまれ給ふも、憎しとはえ思し果てぬなめり。

まほならねどほのめかし給へる氣色を、かしこにはいとど思ひ添ふ。終にわが身は、けしからず怪しくなりぬべきなめり、といとど思ふところに、右近來て、「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゆしく忌み侍るなるものを」といへば、「僻事のあるやうに見えつれば、所たがへかとて」と宣ふ。怪しと見ければ、途にてあけて見けるなりけり。よからずの右近がさまやな。見つとはいはで、「あないとほし。苦しき御事ども

物の氣色　例の秘密を感づかれたのでせう。

文見つらむ　右近が途中で文を見たとは思はないから。

他樣にて　手紙以外に、薫の様子を知つてる人が右近に語つたのに違ひないと思ふと。

誰かさいふぞ　誰がそんな事をお前に告げたのか。

人二人　二人の男に關係したのですが。

程々に云々斯くぞかし　挿入の句。上も下も皆同じ事ですよ。

これも劣らぬ　これも匂宮と薫との場合のやうに、二人の男の愛情に甲乙がないので、迷つて居りました間に。

それにねたみて　前からの男が嫉妬して遂に後の男を殺してしまひました。そして自分も通はぬやうになつてしまひました。

あやまちしたる　殺人罪を犯した男も。

女のたい〴〵しき　右近の姉がよくないのだ。

館　常陸介の館。

にこそ侍れ。殿は、物の氣色御覽じたるべし」といふに、おもて赤みて、物も宣はず。文見つらむとは思はねば、他樣にて、かの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、「誰かさいふぞ」などもえ問ひ給はず、この人々の見思ふらむこともいみじく恥かし。わが心もてありそめし事ならねども、心憂き宿世かな、と思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して、「右近が姉の、常陸にて人二人見侍りしを、程々につけては、ただ斯くぞかし、これもかれも劣らぬ志にて、思ひ惑ひて侍りし程に、女は、今のかたに今すこし心寄せまさりてぞ侍りける。それにねたみて、終に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にも、いみじきあたらつはもの一人失ひつ。又このあやまちしたるも、よき郎黨なれど、『かかるあやまちしたる者を、いかでか使はむ』とて、國の内をも追ひ拂はれぬ。『すべて女のたい〴〵しきぞ』とて、館のうちにもおいたまへらざりしかば、

まま　浮舟の乳母で右近姉妹の母。

見給ふれ　湖月抄「み給れ」

ゆゆしきついでの　今こんな事を申上げるのは緣起でもないやうですが。

御命までには　御命にかかはる程ではなくとも、そんな事は身の程相應にさうした苦勞はあるものです。

なか〳〵　下々の者よりも却つて。

一方に　薫か匂宮か。

さばかりうへの　あれ程母君が大事になさるのに、乳母が浮舟の病氣の斟酌もしないで、このお引越に熱中してさわいでゐるにつけても。

それよりこなたに　それ以前に自分方に引取らうと仰しやる匂宮こそ薫よりも一入御いぢらしくも御氣の毒にも思はれる。

うたておそろしきまで　浮舟の御前で、そんないやな、聞いてゐても怖ろしいやうな仰しやり方はなさるな。

さるべきに　さうなるべき運命として御定めなさいまし。

いと忝く　誠に勿體ないお悲しさうな御樣子であつたので、薫がこんなに急いでおいでになつても、その方には氣が向かないのです。

あづまの人になりて、ままも今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。ゆゆしきついでのやうに侍れど、上も下も、かかる筋のことは、思し亂るるはいとあしきわざなり。御命までにはあらずとも、人の御程々につけて侍ることなり。死ぬるにまさる恥ぢなる事も、よき人の御身には、なか〳〵侍るなり。一方におぼし定めてよ。宮も、御志まさりて、まめやかにだに聞えさせ給はば、そなたざまにも靡かせ給ひて、物ないたく歎かせ給ひそ。瘦せ衰へさせ給ふも、いとやくなし。さばかりうへの思ひいたづき聞えさせ給ふものを、ままがこの御いそぎに心を入れて、惑ひ居て侍るにつけても、それよりこなたにと聞えさせ給ふ御事こそ、いと苦しくいとほしけれ」といふに、今一人、「うたておそろしきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にて(は)こそ・あらめ。只御心のうちにすこし思し靡かむかたを、さるべきに思しならせ給へ。いでや、いと忝くいみじき御氣色

暫しは　當分は人目を避けて居てでも、餘計に愛してゐられる匂宮の方へお靡きなさいましと私は思ひます。

ぶだう　無道か。落窪物語にも「衞門の督のぶだうなるやうなれど」とある。河内本は「ふてう」の傍に不調と漢字をあててある。

内舍人　(花)内舍人帶レ劒具ニ兵杖一、武勇者也、餘ニ坂東掾一也。

右近の大夫　右近將監で五位に敍せられた者。

よろづの事を　宇治山莊の警固萬端の事を。

物の心得ぬ　考へなしの田舍者どもが番人として交替で番をしてゐるのですから。

聊かなる　些細な過失もないやうになどと思ふので間違も起りませう。

ありし夜の　先夜川向ひの家に行かれた時は本當に氣味わるい感じがしました。

なりしかば、人の斯くおぼし急ぐめりし方に(も)・心も寄らず。暫しは隠ろへても、御思ひのまさらせ給はむに寄らせ給ひねとぞ思ひ侍る」と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちにいふ。右近「いざや、右近は、とてもかくても、「事なく過ぐさせ給へ」と、初瀨石山などに、願をなむ立て侍る。この大將殿の御庄の人々といふものは、いみじきぶだう(て)の者ども・にて、一類この里に滿ちて侍るなり。大方この山城大和に、殿の領じ給ふ所の人なむ、皆この内舍人といふもののゆかりかけつつ侍るなる。それが婿の右近の大夫といふものをもととして、よろづの事をおきて仰せられた(る)・なるなり。よき人の御中どちは、なさけなき事しいでよと思さずとも、物の心得ぬ田舍人どもの、宿直人にて代り〳〵さぶらへば、おのが番にあたりて聊かなることもあらせじなど、あやまちもし侍りなむ。ありし夜の御ありき(など)・・は、いとこそむくつけく思ひ給へられしか。宮はわりな

さるもの　「物の心得ぬ田舎人ども」の事。
我を宮に　自分が匂宮に氣のあるものと思つて侍女達は噂してゐる、それは。
心地には　自分の心では薫と匂宮とどちらがよいとも思はず。
いみじくいられ給ふ　ひどくいらいらしてゐられる匂宮を、なぜかうまでとは思ふけれども。
げによからぬ　右近の話したやうに不祥事の起りでもしたらどうしようと。
安らかに思しなせ　氣樂に思つていらつしやるやうにと思つて色々申上げるのです。
おぼしぬべき　今迄は心配遊ばさなければならぬ事でも平氣で鷹揚らしくしていらつしやいましたのに、匂宮との關係の御出來になつた後は、ひどく氣を揉んでいらつしやいますので。

くつつませ給ふとて、御供の人もゐておはしまさず、やつれてのみおはしますを、さるものの見つけ奉りたらむは、いといみじくなむ」といひつづくるを、君、猶我を宮に心寄せ奉りたると思ひてこの人々のいふ、いと(と)・恥かしく、心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじくいられ給ふをば、など斯くしもとばかり思へど、(この事により)・・・・・頼み聞えて年頃になりぬる人を、今はともて離れむと(は)・思はぬによりこそ、かくいみじと物(を)も思ひ亂るれ、げによからぬ事も出で來たらむ時、とつくづくと思ひ居たり。「まろは(われは)・、いかで死なばや(と)・。世づかず心憂かりける身かな。かく憂き事あるためしは、下衆などのなかにだにも多くやはあなる」とて、うつぶし臥し給へば、「斯くな思召しそ。安らかに思しなせとてこそ聞えさせ侍れ。おぼしぬべき事をも、さらぬがほにのみ、のどかに見えさせ給へるを、この御事ののち、いみじく心いられをせさせ給へば、

おのが心をやりて　滿足して。
今參り童　新參の童女。
かかる人御覽ぜよ　こんな召使を雇ひ入れました。お氣に召すか御覽下さい。
殿よりは　薫からは浮舟が手紙を返して以來何の消息もなしに數日たつた。
このおどしし内舍人　右近が怖ろしげに語つたあの人。一四七頁八行。
殿に召し侍りし　薫からお召がありましたので。
かくておはします　以下薫の命令を内舍人が自分の詞としていふのである。
なにがしら斯くて　拙者がかうして山莊を警固してゐるので心配はないと薫は思召して、番人をわざわざ京からさし遣はされる事もないのですが。
女房の御もとに　浮舟方へ匂宮がといふべきをわざと斯くいふのである。

いと怪しくなむ見奉る」と、心知りたる限りは、皆かく思ひ亂れ騷ぐに、乳母、おのが心をやりて、物染めいとなみ居たり。今參り童などの目安きを呼び取りつつ、「かかる人(を)・御覽ぜよ。怪しくてのみ臥させ給へるは、物怪などの妨げ聞えさせむとするにこそ」と嘆く。

殿よりは、かのありし返りごとをだに宣はで、日頃經ぬ。(か)このおどしし内舍人といふものぞ來たる。げにいと荒々しく、ふつつかなるさましたる翁の、聲枯れ、さすがに氣色ある、「女房に物取り申さむ」といはせたれば、右近しもあひたり。「殿に召し侍りしかば、今朝參り侍りて、只今なむまかり歸り侍りつる。雜事ども仰せられつるついでに、かくておはします程に、夜中曉の事にも、なにがしら斯くてさぶらふと思ほして、宿直人わざとさし奉らせ給ふこともなきを、此頃聞召せば、女房の御もとに、知らぬ所の人・(々)かよふやうになむ聞召すことある、たい

宿直にさぶらふ 番をしてゐる者はその事情を問ひただした事だらう。知らずに居る筈はない。

さるべきをのこ 然るべき下部の者どもは。

用意してさぶらへ 注意して番をせよ、不都合な事でもあつたら厳重に罰するぞといふ旨を。

さりや それ御覧なさいまし。何もかも私が申上げた通りなのをお聞き遊ばせ。薫が様子をけどられたのでございませう。だから御手紙もありませぬは。（一四五頁右近の詞）

いと嬉しく 乳母は事情を知らないから盗人などの用心にかと思ふのである。

だいしき事なり。「宿直にさぶらふ者どもは、そのあ・ない問ひ聞きたらむ。知らではいかが・さぶらふべき」と問はせ給へるに、承らぬ事なれば、「なにがし・は身の病おもく侍りて、宿直仕うまつる事は、月頃怠りてはべ・れば、あ・ないもえ知り侍らず。さるべきをのこどもは、懈怠なく催しさぶらはせ侍るを、さの如き非常の事のさぶらはむをば、いかで承らぬやうは侍らむ」となむ申させ侍りつる。用意してさぶらへ、びんなき事もあらば、おもく勘當せしめ給ふべきよしなむ仰言侍りつれば、いかなる仰言にかと、おそれ申し侍る」といふを聞くに、梟の鳴かむよりも、いと物怖ろし。いらへもやらで、「さりや。聞えさせしにたがはぬ事どもを聞召せ。物の氣色御覽じたるなめり。御消息も侍らぬよ」など歎く。乳母はほのうち聞きて、「いと嬉しく仰せられたり。盗人おほかなるわたりに、宿直人も初めのやうにもあらず、皆、「身の代りぞ」といひつつ、あやし

夜行 夜廻り。

げに只今いとあしく 「げに」は右近が心配してゐたのを受けていふ。

苔の亂るる 新勅撰戀二讀人知らず「君にあはむ其日をいつと松の木の苔の亂れて物をこそ思へ」この歌の上句の意を取つて用ひたのである。

懸想ずる人の 萬葉九・十六・大和物語等に見える櫻兒や菟原處女などをさすのであらう。

あまたの子ども 大勢の子供を世話するのに紛れて自然私の事は忘れてしまはれるだらう。

け高う 東國生活をして居つた爲にけ高く（俗事を知らぬ意）世間知らずに育てられた人故。

おずかるべき 自殺といふやうな氣强い事を。

むつかしき反古 あとに殘つては困るやうな厄介な文殻。

き下衆をのみ參らすれば、夜行をだにせぬに」と喜ぶ。君は、げに只今いとあ・しくなりぬべき身な・めり、と思すに、宮よりは、「いかに〳〵」と・・、苔の亂るるわりなさを宣ふ。いと煩はしく・なむ。とてもかくても、一方々々につけて、いとうたてある事は出で來なむ、わが身一つの無くなりなむのみこそ目安からめ、昔は、懸想ずる人の有樣のいづれとなきに、思ひ煩ひてだにこそ身を投ぐるためしもありけれ、ながらへば必ず憂きことと見えぬべき身の、亡くならむは、何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き・・給はめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘草・摘みてむ、ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさる物思ひなるべし、など思ひなる。こめきおほどかに、たを〳〵と見ゆれど、け高う世の有樣をも知る方すくなくておほし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべき事を思ひ寄るなりけむかし。むつかしき反古などや

おどろ〳〵しく　一度に燒いて人目につくやうな大層らしい始末のしかたはしないで。
御達　女房達。
物へわたり　薫に引取られて京へ移られる筈だから、長い徒然の生活の間に何といふことなしに書いておかれた詠草などを破り棄てられるのだらう。
あはれなる　戀仲に心をこめて贈答なさつたお手紙は。
何かむつかしく　何の厄介な殘すやうな事をしよう。
さかしらに　こんな手紙を大袈裟にしまひこんでおくなんて、せんでもいい事をしたものだなどと薫から聞かれるのが恥かしい。
え思ひ立つまじき　とても決行しかねる譯のものであつた。
罪深くなる　河内本によるべきである。

りて、おどろ〳〵しく一たびにもしたためず、燈臺の火に燒き、水に投げ入れさせなど、やう〳〵失ふ。心知らぬ御達は、物へわたり給ふべければ、つれ〳〵なる月日を經て、はかなくし集め給へる手習などを、やり給ふなめり、と思ふ。侍從などぞ、見つくる時は、「など斯くはせさせ給ふ。あはれなる御中に、御心とどめて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底におかせ給ひて御覽ずるなむ、程々につけては、いとあはれに侍る。さばかりめでたき御紙づかひ、忝き御言の葉を盡させ給へるを、斯くのみやらせ給ふ、なさけなき事」といふ。「何かむつかしく。長かるまじき身にこそあめれ。落ちとどまりて、人の御ため・もいとほしからむ。さかしらにこれを取りおき・・けむよなど、漏り聞き給はむこそ恥かしけれ」など宣ふ。心細きことを・思ひもてゆくには、まだえ思ひ立つまじきわざなりけり。親をおきて亡くなる人は、いと罪深くな

かの家あるじ　匂宮の乳母の夫なる受領。宮に家を貸す約束をした事が一三〇頁に見える。
その夜必ず　浮舟への文の詞。
よく氣色見ゆまじき　樣子をけどられないやう十分注意しなさい。私の方からは決して漏れる筈はあるまい。
さて　「さても」の意。
あるまじきさま　危險を冒して忍んで來られても、守りが嚴しくて、もう一度の話も出來ず對面もしないでお歸へし申す事よ。
例の面影離れず　いつものやうに匂宮の御俤が目先にちらついて。
あが君　人を親しみ呼ぶ時の對稱代名詞。
かうかかづらひ　そんなに拘泥なさらずに然るべく御返事遊ばせ。
右近侍らば　私が附いて居りましたら、大それた工面を致しましたら、こんなに小さい御身ですもの、宮は空からでもお連れだしなさいますでせう。「右近侍らば」と「おほけなき……侍らば」とは同格。

るものをなど、さすがにほの聞きたる事をも思ふ。廿日あまりにもなりぬ。かの家・あるじ、廿八日にくだるべし。宮は、「その夜必ず迎へむ。下人などに、よく氣色見ゆまじき心づかひし給へ。こなたざまよりは、夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」など宣ふ。さてあるまじきさまにておはしたらむに、今一たび物をも・聞えず、おぼつかなくて返し奉らむ事よ、又時のまにても、いかで・ここには寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむさまなどを思ひやるに、例の面影離れず、絶えず悲しくて、この御文を顏におしあてて、暫しはつつめども、・いと・いみじく泣き給ふ。右近、「あが君、かかる御氣色遂に人見奉りつべし。やう〳〵、怪しなど思ふ人も・侍るべかめり。かうかかづらひおもほさで、さるべきさまに聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事もたばかりいだし侍らば、かばかり小さき御身一つは、空よりもゐて奉らせ給ひなむ」といふ。

わりなく　「宣へば」を修飾する。こんな風に（「その夜必ず迎へむ」といふやうに獨合點して）頼りきつてゐるもののやうに匂宮が無闇に仰しやるので、どんな事をしでかすお積りなのかと思ふにつけて。

斯くのみ　以下匂宮の心。浮舟がまだ一向承知する様子もなくて、返事までしないがちになるのは、薫が尤もらしく說き聞かせて、それで多少とも無理のない（世間から見て）薫の方に決心したのだらう。

ことわりと　それが當然だと匂宮は思召しながらも甚だ殘念でいまいましくて。

あひ見ぬとだえに　暫く逢はなかつた間に侍女達が說き聞かせるまゝに薫の方に附くのであらう。

ゆく方知らず　古今戀一「わが戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

いざとげなり　早く目を覺すこと。

心知りのをのこ　山莊の事情を知つてゐる男を邸内に遣した所が、その男をまでも咎める。

かりためらひて、「かくのみいふこそいと心憂けれ。さもありぬべき事と思ひかけばこそあらめ。あるまじき事と皆思ひ取るに、わりなく、かくのみ頼みたるやうに宣へば、いかなる事をしいで給はむとするにかなど思ふにつけて、身のいと心憂きなり」とて、返りごとも聞え給はずなりぬ。

宮、斯くのみなほ受け引く氣色もなくて、返りごとさへ絶え絶えになるは、かの人のあるべきさまにいひしたためて、すこし心やすかるべき方に思ひ定まりぬるなめり、ことわりと思すものから、いと口惜しくねたく、さりとも我をばあはれと思ひたりしものを、あひ見ぬとだえに、人々のいひ知らする方に寄るならむかし、などながめ給ふに、ゆく方知らずむなしき空に滿ちぬる心地し給へば、例のいみじく思し立ちておはしましぬ。

蘆垣の方を見るに、例ならず、「あれは誰そ」といふ聲々、いざとげなり。立ちのきて、心知りのをのこを入れたれば、それ

京より　京なる浮舟の母君の所から急用の手紙です。

右近が從者　右近の召使の名を呼んでその召使に面會した。守りが嚴重で右近に直接對面が出來ぬのである。

さるべきさまに　うまい具合に工面せよ。

さかしがりだちたる　餘計な用心までしてゐる時でどうにもならないのです。

お前にも　浮舟が心を痛めてばかりゐられるのも、匂宮に無駄足を踏ませる事の勿體なさを心配してゐられるのだとお痛はしく存じてをります。

人氣色見侍りなば　誰か來たことを番人が見ましたならば。

やがて　「ここにも人知れず云々」の句を修飾する。

さも御心づかひ　浮舟を京へお迎へ遊ばさうといふ晩に當方からも人知れず工夫してお知らせ申しませう。

おはします道の　匂宮のおいでになる途中も一通りならずつきつめた御樣子なのに、對面も出來ないといふやうなあつけない事を申上げるのは罰が當る。

をさへ問ふ。さき〴〵のけはひにも似ず、煩はしくて、「京よりとみの御文あるなり」といふ。右近が從者の名を呼びて逢ひたり。いと煩はしくいとどおぼゆ。「更に今宵は不用なり。いみじく忝き事」といはせたり。宮、など斯くもて離るらむ、とおぼすに、わりなくて、「まづ時方入りて、侍從にあひて、さるべきさまにたばかれ」とて遣はす。かど〳〵しき人にて、とかくいひ構へて、尋ねて逢ひたり。「いかなるにかあらむ、かの殿の宣はする事ありとて、宿直にある者どもの、さかしがりだちたる頃にて、いとわりなきなり。お前にも、物をのみいみじくおぼしためるは、斯かる御事の忝きを思し亂るるにこそはと、心苦しくなむ見奉る。更に、今宵は人氣色見侍りなば、なか〳〵にいとあしかりなむ。やがてさも御心づかひせさせ給ふべからむ夜、ここにも人知れず思ひ構へてなむ聞えさすべかめる」。乳母のいざとき事なども語る。大夫、「おはします道

人ずくなに 供まはりも少くやつれた御忍びありき故、うつけ者が飛び出して來たらどうなる事かと、供人一同心配した。

髮脇より 垂れ髮を脇下から前へまはして。歩行の爲である。

馬に乘せむと 時方が侍從を。

衣の裾を取りて 地上を歩みやすいやうに侍從の衣の裾を時方が持つて相並んで行く。

わが沓を 時方が自分の沓を侍從にはかせて。

あふり 障泥。馬の鞍の下に兩側に覆ひ垂れて騎手の衣に泥のかかるのを防ぐ馬具。

の、おぼろげならず、あながちなる御氣色に、あへなく聞えさせむ事なむたい〳〵しき。さらば、いざ給へ。共にくはしく聞えさせ給へ」といざなふ。侍從「いとわりなからむ」といひしろふ程に、夜もいたく更けゆく。宮は、御馬にてすこし遠く立ち給へるに、里びたる・・・犬どもの出で來てののしるも、いと・怖ろしく、人ずくなにいと怪しき御ありきなれば、すずろならむ者の走り出で來たらむも、いかさまにかと、さぶらふ限り、心をぞ惑はしける。時方「なほ疾く〳〵參りなむ」といひさわがして、この侍從をゐて參る。髮、脇よりかいこして、樣態いとをかしき・・人なり。馬に乘せむとすれど、更に聞かねば、衣の裾を取りて、立ち添ひて行く。わが沓をはかせて、みづからは、供なる人の怪しきものをはきたり。參りて斯くなむと聞ゆれば、語らひ給ふべきやうだになければ、山賤の垣根の、おどろ葎の蔭に、あふり・といふ物を

心弱き人 氣の弱い侍從は。

え聞えさすまじきか 浮舟と話をする事は出來まいか。

斯かるぞと 「ぞ」の「と」は次の「やうあるべし」の「と」と共に「宣ふ」に續く。

有樣くはしく 侍從が事情を委細匂宮に申上げて。

さおぼしめさむ日を 浮舟を引取らうと思召す日を前以てそのやうに工面遊ばせ。

斯く添き事ども 危險を冒しても宇治に來られる熱心さ。

我も人目を 匂宮自身も人目を切に憚つて杜絶えがちにしてゐられたのであるから、浮舟ばかりを冷淡だと恨むやうもない。

敷きておろし奉る。わが御心地にも、あやしき有樣かな、斯かる道にそこなはれて、はか〴〵しくはえあるまじき身なめり、と思し續くるに、泣き給ふこと限りなし。心弱き人は、ましていと・いみじく悲しと見奉る。いみじきあた・を鬼に作りたりとも、おろかに見捨つまじき人の御有樣なり。ためらひ給ひて、「只一言もえ聞えさすまじきか。いかなれば、今更に斯かるぞ。猶人々のいひなしたるやうあるべし」と宣ふ。有樣委しく聞えて、「やがておぼしめさむ日を、かねて・・・さべきさまにたばからせ給へ。斯く添き事どもを見奉り侍れば、身を捨てても思ひ給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。我も人目をいみじくおぼせば、一方に恨み給はむやうもなし。夜はいたく更けゆくに、この物咎めする犬の聲・絶えず、人々追ひさけなどするに、弓引き鳴らし、怪しきをのこどもの聲・・して、「火危し」などいふも、いと心あわただしければ、歸り給ふ程、いへ

ば更なり。「何處にか身をば捨てむと白雲のかからぬ山も泣く〳〵ぞ行く さらばはや」とて、この人を返し給ふ。御氣色なまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御香のかうばしさなど、たとへむ方なし。泣く〳〵ぞ歸り來たる。

右近は、いひきりつるよし、いひ居たるに、君はいよ〳〵思ひ亂るゝこと多くて臥し給へるに、入り來て、ありつるさま語るに、いらへもせねど、枕のやう〳〵浮きぬるを、かつはいかに見るらむとつゝまし。つとめても、怪しからむまみを思へば、無期に臥したり。物はかなげに帶打懸けなどして、經讀む。親に先立ちなむ罪失ひ給へ、とのみ思ふ。ありし繪を取り出でて見て、書き給ひし手つき、顏の匂ひなどの、向ひ聞えたらむやうに覺ゆれば、よべ一言をだに聞えずなりにしは、猶今ひとへまさりていみじと思ふ。かの、「心のどかなるさまにて見む」と、行

何處にか　匂宮の歌。泣きながら京に歸つてゆく。「何處にか身をば捨てむ」と「知らぬ」の「白」にいひ懸けた序詞であるが、同時に我が心持を表現したものである。「白雲のかからぬ山も」は「泣く〳〵」の序詞で、「なく」に「無く」をいひ懸けた序詞でもある。

いひきりつるよし　きつぱりお斷りして匂宮をお歸し申した旨を浮舟に語る。

かつは　一方悲しさに泣かずにはゐられないが、また一方右近等が浮舟の思はくを推測されるのが恥しいと思ふ。

怪しからむまみ　泣きあかした目もとの見苦しさを苦にしていた。

帶打懸け　經を讀む時に肩に掛ける帶で所謂掛帶である。

ありし繪　匂宮のかかれた繪。一〇四頁三行參照。

末遠かるべき事を宣ひわたる人も、いかゞおぼさむといとほしう。うきさまに言ひなす人もあらむこそ思ひやり恥かしけれど、心淺くけしからず人笑へならむを聞かれ奉らむよりは、など思ひつゞけて、

「歎きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむ事をこそ思へ」

親もいと戀しく、例はことに思ひ出でぬはらからの醜やかなるも戀し。宮の上を思ひ出で聞ゆるにも、すべて今一たびゆかしき人多かり。人は皆おのおの物染めいそぎ、何やかやといへど、耳にも入らず。夜となれば、人に見付けられず出でてゆくべき方を思ひまうけつゝ、寢られぬまゝに、心地もあしく、皆たがひにたり。明けたてば、河の方を見やりつゝ、羊の歩みよりも程なき心地す。宮はいみじき事どもを宣へり。今更に人や見むと思へば、この御返りごとをだに、思ふまゝにも書かず。

憂きさまに　死後にいやな評判をする人もあらうのが、今から考へて見ても恥しいけれども、生きてゐて非難されたりするのを耳にするよりは、それへの心の無い女だと思はれる方がまだしもましだと思ひつづけて。

歎きわび　身を捨てて亡くなつても、死後に浮き名を流す事を惜んで辭世で、身は亡くなつてもいやな評判が殘つて聞えるのは氣の毒だ。「流す」は川の縁語で入水しようと覺悟してゐるから用ひたのである。

人は皆　女房たちは出京の準備で

皆たがひにたり　いつもとはすつかり別な氣持になつてしまつた。(抄)かやうの所へたよりて物のよりたる也(湖月抄)。

羊の歩み　河海抄「歩々近二死地一人命亦如レ是」(涅槃經文)屠所の羊の歩みの事也。唐土には羊を飼ひて食時に望みて屠所へ相具して殺す也、とあり。一歩々々に死地に近づいてゐる羊よりも命の殘りは死の間近に迫つてゐる。

からをだに 亡き骸をすらこの憂世の中に留める事なく跡形なくうせてしまつたならば、宮も恨み所がありますまい。

離れぬ御中 薫と匂宮とは叔父甥の間柄故。

いかになりけむと どうなつてしまつたやらと誰にも分らずに終りたいものだ。

いとさわがしくて 貴女のわるい夢を見たので、無事安穩のお經をあちこちに依頼しました。

やがて 「寢られざりつる」を修飾する。

人の忌むといふ事 「河海抄」に「辨夢書曰夢見二病人一必死」。

時々立寄らせ 薫のゆかりの人即ち女二宮の嫉妬も怖ろしく。

夢の斯かるを こんなわるい夢を見たのでいろ／＼心配して居ります。

少將の方 左近少將の妻即ち常陸介の次女。

片時も立ち去る 一寸でも側を離れてはならないとやかましくいはれますので參られませぬ。

からをだに憂世の中にとどめずば何處をはかと君も恨みむ

とのみ書きていだしつ。かの殿にも、今はの氣色見せ奉らまほしけれど、處々に書きおきて、離れぬ御中なれば、遂に聞きあはせ給はむこと、いと憂かるべし。すべていかになりけむと、誰にもおぼつかなくてやみなむと思ひかへす。京より母の御文もて來たり。「寢ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし侍るを、やがてその夢ののち、寢られざりつるけにや、只今晝寢して侍る夢に、人の忌むといふ事なむ見え給ひつれば、驚きながら奉る。よく愼ませ給へ。人ばなれたる御すまひにて、時々立寄らせ給ふ人の御ゆかりもいと怖ろしく、惱ましげに物せさせ給ふ折しも、夢の斯かるを、よろづになむ思ひ給ふる。參りでまほしきを、少將の方の、なほいと心もとなげに、物怪だちて惱み侍れば、片時も立ち去る事と、いみじくいはれ侍りてなむ。

その料 誦經の料即ち布施。

文 僧への依頼狀。

寺へ人やりたる 布施や依頼狀を持たせて使を寺に遣したひまに。

のちに又 はかない今生の夢のやうなつまらない出來事には迷はずに、來世で再會するやうに斷つて下さい。

鐘のおとの 鐘の音の消えゆく餘韻にわが泣く音を添へつつ死んで行つたと母に傳へて下さい。

くわんじゆ 卷數。讀誦した經卷や陀羅尼などの名目や度數を記して木の枝につけて願主に送る文書。

さかしがるめれど あんなに乳母が餘計な世話を燒いてゐるけれども、年をとつてきたなくなつて、私が死んだらどこで生きていくだらう。

世の中に 天命を全うし得ない事情を。

その近き寺にも御誦經せさせ給へ」とて、その料の物、文など書き添へてもて來たり。限りと思ふ命の程を知らで、かくいひ續け給へるも、いと悲し、と思ふ。寺へ人やりたる程、返りごと書く。いはまほしき事多かれど、つつましくて、ただ、

のちに又あひ見む事を思はなむこの世の夢に心まどはで

誦經の鐘の風につきて聞えくるを、つく／＼と聞き臥し給へり。

鐘のおとの絶ゆる響にねを添へて我世盡きぬと君に傳へよ

くわんじゆもて來たるに書きつけて、「今宵はえ歸るまじ」といへば、ものの枝にゆひつけておきつ。乳母、「怪しく心ばしりのするかな。『夢もさわがし』と宣はせたりつ。宿直人よくさぶらへ」といはするを、苦しと聞き臥し給へり。「物聞召さぬいと怪し。御湯漬」などよろづにいふを、さかしがるめれど、いと醜く老いなりて、われ無くば、いづくにかあらむ、と思ひやり給ふも、いとあはれなり。世の中にえあり果つまじきさま

をさほのめかして、言はむなどおぼすには、まづおどろかされて先立つ涙を、つつみ給ひて、物もいはれず。右近、程近く臥すとて、右近「かくのみ物をおもほせば、物思ふ人の魂はあくがるなるものなれば、夢もさわがしきならむかし。いづかたともおぼし定まりて、いかにもいかにもおはしまさなむ」と打歎く。なえたる衣を顔に押しあてて臥し給へりとなむ。

まづおどろかされて　それと知つて流れ出る涙を辨別して

いづかたと　お二人の中の一方にきめて、それがどうならうと運に任していらつしやいまし。

昭和十二年六月十五日印刷
昭和十二年六月二十日發行
昭和廿二年十月十五日再版發行

對校源氏物語新釋

五十の巻

定價六十圓

著者　吉澤義則

發行者　齋藤道太郎
東京都中央區日本橋吳服橋三ノ五

印刷者　星野政吉
東京都港區芝濱松町一ノ十三

發行所　株式會社平凡社
東京都中央區日本橋吳服橋三ノ五
電話日本橋(24)三一五五 一五五七 二五九八七

配給元　日本出版配給株式會社
東京都千代田區神田淡路町二ノ九

310
138

終